

爾後進路を西に向け、十一月十日滬杭甬鐵道に沿ふ楓涇鎮を陥れ、續いて太湖南方に向ひ前進したのであるが、

此のことに就いては後述する。

要するに上海の背後を脅威すべき杭州灣上陸軍は上海の陥落を見るや、二つに分かれて直ちに追撃の新作戦に移り其の一は太湖の東方より其の北方に出で、上海攻撃軍と連繫して猛追撃に加はり、他の一は太湖の南方より其の西方に出で、如上の軍と連絡し南北兩々並進追撃して遂には南京攻撃となつたのである。よつて先づ順序として湖東會戦を述べ然る後大追撃作戦に及ぶであらう。

其二 湖東會戦 (十一月上旬—中旬)

十一月七日より同十五日に至る崑山附近迄の戦を湖東會戦と稱せられた。

上海戦線は十月下旬大場鎮、江灣鎮を攻略、一舉蘇州河を南下して上海を包圍するや、戦争は茲に陣地戦の様相を脱して大追撃戦に移つた。支那軍は十一月七、八日以來西方に向ひ退却し、張治中は南翔に、陳誠は嘉定に在つて之を指揮督勵したようである。

【左翼方面の追撃】 上海攻撃軍の左翼は西南方に進出して十一月十日既述の如く杭州灣上陸軍と連絡を取りて追撃に移り、又蘇州河々畔に在る部隊は十一月九日江橋鎮を陥れ、十日には大場鎮西方の堅壘南翔を攻撃し翌十一日之を占領し、十三日には外岡鎮を抜き敵を太倉に壓迫した。

南翔は上海の西北約六里、人口約二萬、其の周圍及び内部は大小數多のクリークを以て圍繞せられ、嘉定と並んで支那軍第二線陣地に於ける重要なる據點を成形してゐた要衝である。今や此の陥落を見る上海陣地の維持は

全く絶望的となつた。

【中央方面の追撃】 他の日本軍は十一月十二日南翔北方の馬陸鎮を陥れ翌十三日には嘉定城を攻略して太倉に向ひ追撃を開始した。嘉定は明時代には八幡船に、清時代には長髮賊の亂に荒掠されたが、最も著名なのは清の天下一統後、辮髮令を強制した時、之に従はざる者を虐殺した事件である。人口約一萬、周圍約一里半の城廓を繞らし、太倉、崑山と共に支那軍の難攻不落を誇つた堅陣であつた。

【右翼方面の追撃】 日本軍の最右翼に在る部隊は上海戦線最北の要衝である劉河鎮に向ひ十一月十三日一舉に之を陥れ陸渡橋を経て敵を追撃し南方より進撃中の前記諸隊と呼應して十四日早朝太倉を完全に占領した。是等の諸隊は息つく暇もなく北進し、同日夕には沙溪鎮を抜き翌十五日には支塘鎮を、十六日には梅李鎮を奪取して常熟附近の吳福陣地向つた。

【白茆口の上陸】 是れより稍々先き十一月十三日未明、新たなる日本軍の大部隊は揚子江を遡江して突如常熟東北方白茆口附近に上陸した。此の上陸作戦も杭州灣上陸と同様、敵の虚を突き奇襲作戦によつて大成功を収めたもので上陸部隊は直ちに江岸の敵陣を突破し一齊に南下進撃し南東より前進せる諸部隊と相呼應して崑山に迫まらんとしたが、崑山は早くも十一月十五日杭州灣上陸の北進部隊によつて占領されたことは既に述べた通りである。是れに於て崑山を陥れた部隊も、太倉を略した部隊も、又此の新上陸部隊も相共に西方に向ひ並進して吳福陣地の攻略に参加することゝなつた。

太倉は水利の便あるより海賊の巢窟となつてゐた。元時代に此の海賊の親分朱清を懐柔して江南の米を此の地に集め劉河によりて揚子江に出し北京へ輸送せしめたものである。それで米貯藏のため數多の倉庫を建てたので

太倉は水利の便あるより海賊の巢窟となつてゐた。元時代に此の海賊の親分朱清を懐柔して江南の米を此の地に集め劉河によりて揚子江に出し北京へ輸送せしめたものである。それで米貯藏のため數多の倉庫を建てたので太倉の名が出たのである。元、明の交に爭覇戰場となり、又長髮賊の兵禍を受けた。人口約一萬、周圍約二里の城廓が繞らされてゐた。

斯くて内外人の間に、一大抵抗を豫想せられた太倉、崑山、嘉定、南翔の堅陣が枕を並べて數日の間に陥落し、今まで日本軍何んするものぞと空元氣を出してゐた敵も此の神速驚異的な追撃に戰意を失ひ、逃げ後れた敗殘兵は精根盡きて續々と投降し來り、茲に崑山平地は完全に日本軍の掌中に收められ、上海を中心とする半徑五十吉米の地區内には全く敵の片影を見ないやうになつた。

此の湖東會戰に於ける支那軍の遺棄死體五萬、俘虜少くも一萬で全損傷は十五萬に上つた模様である。

其三 太湖北方の戰況（十一月—十二月）

上海事變勃發當初に於ては日本政府及び國民は必ずしも南京を攻略するの必要を認めてゐなかつたやうで、國民の多くは上海の包圍が完成すれば、此の方面の戰爭は一段落を告ぐるものと考へてゐた。然るに上海戰爭が長引き且つ南京政府は益々抗日を標榜するので、日本官民の考へ方も次第に變り、首府南京を是非攻略しなければ膺懲の目的は達成出來ないと云ふことが一般の常識となつた。

そこで上海攻略後起つた湖東會戰が意外に簡單に片付きて日本軍の壓倒的大勝利に終るや、全軍は太湖の北と

南に分れ兩道から南京に向ひ進撃を開始した。

太湖は周圍約百五十里、面積二千二百平方吉米、附近には小山はあるが概ね平坦で小湖多く且つ運河を始め大小の河川蜘蛛の巣の如く通じてゐる。従つて此の附近一帯は灌漑の便發達せるため農産物は豊富に産出し米は年産約四千萬石と稱せられてゐる。國民政府が南京に遷都以來同地域は政治、經濟乃至軍事的重要性を増し、軍事施設は最近益々盛んになると共に警備も嚴なるに至つた。

南京政府は首府防禦の第一線を、左よりすれば、福山、常熟、蘇州、吳江、平望鎮、嘉興、海鹽に亘る線に置き、第二線を江陰、無錫、吳興、杭州の線とし、最後の陣地線として鎮江、丹陽、金壇場、宜興、長興、吳興（湖州）、杭州の線を選定し、何れも堅固に陣地を構築し、茲に約三十二箇師、三十萬を配置し白崇禧之が指揮に任じ蔣介石亦戦線に出馬して死守を嚴命した模様であるが、打續く敗戦に支那軍の士氣全く沮喪して戦意なく、日本軍の猛追撃は正に疾風枯葉を卷くの慨があつた。

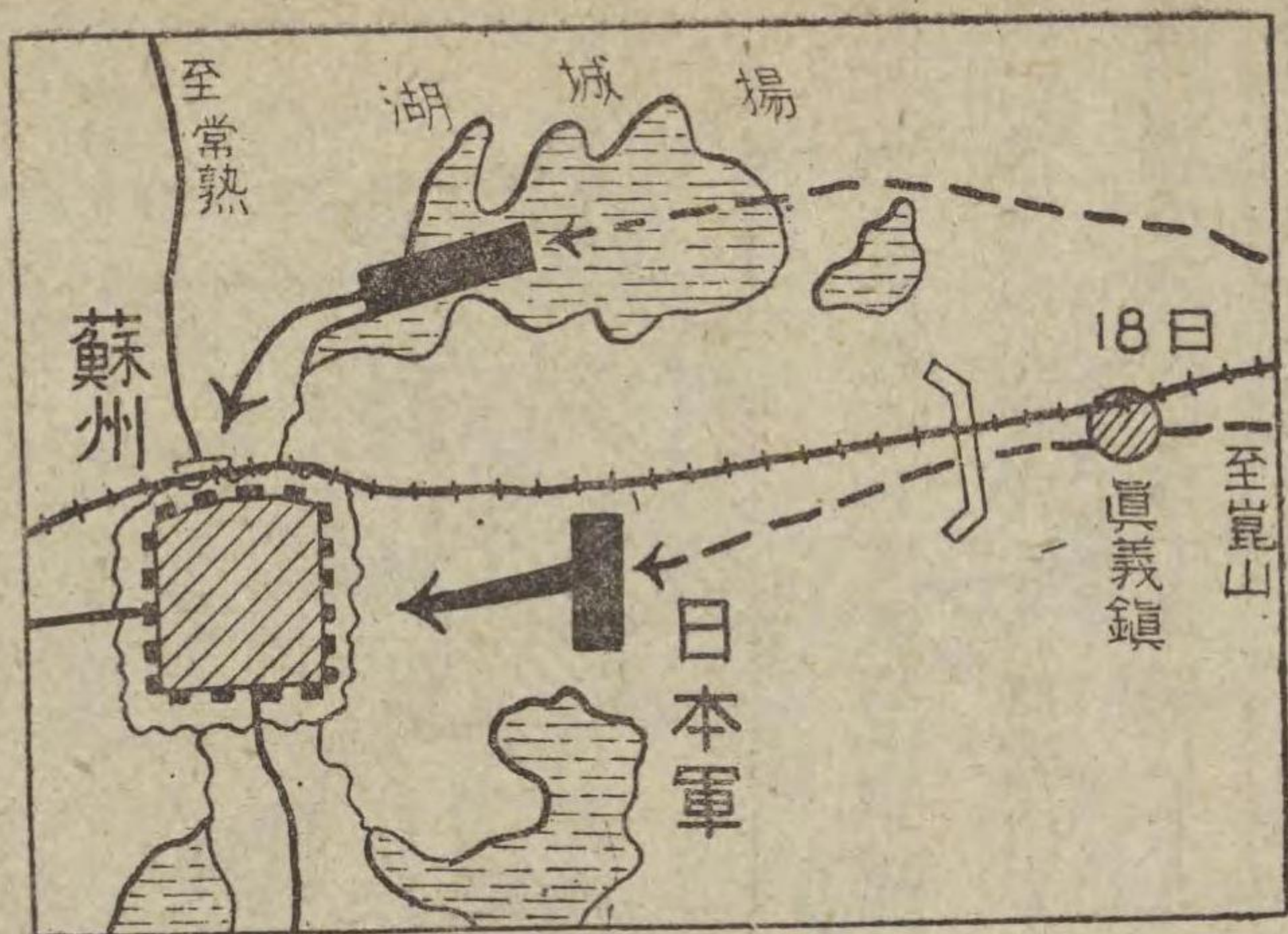
敵の退却するや、其の過ぐる所道路、鐵道を破壊した爲め日本軍は補給に窮し一時水路又は飛行機によりて之を辨じ幾多の困難を排除して迅速果敢なる追撃作戦に遺憾なからしめた。

又上海附近の攻撃に於ては日本軍はクリークに悩まされたが、此の追撃戦に於ては逆にクリークや運河を利用して船團を以て果敢迅速なる水上機動作戦を實施し屢々敵を奇襲して之に殲滅的打撃を與へ奇功を奏してゐる。以下其の戦況を述べる。

【吳福陣地の攻略】 吳福陣地とは湖北に於ける吳江、蘇州、常熟、福山に亘る敵の第一線陣地のことであつて南京攻撃には先づ此の吳福陣地の堅を突破しなければならぬ。

以下其の戦況を述べる。

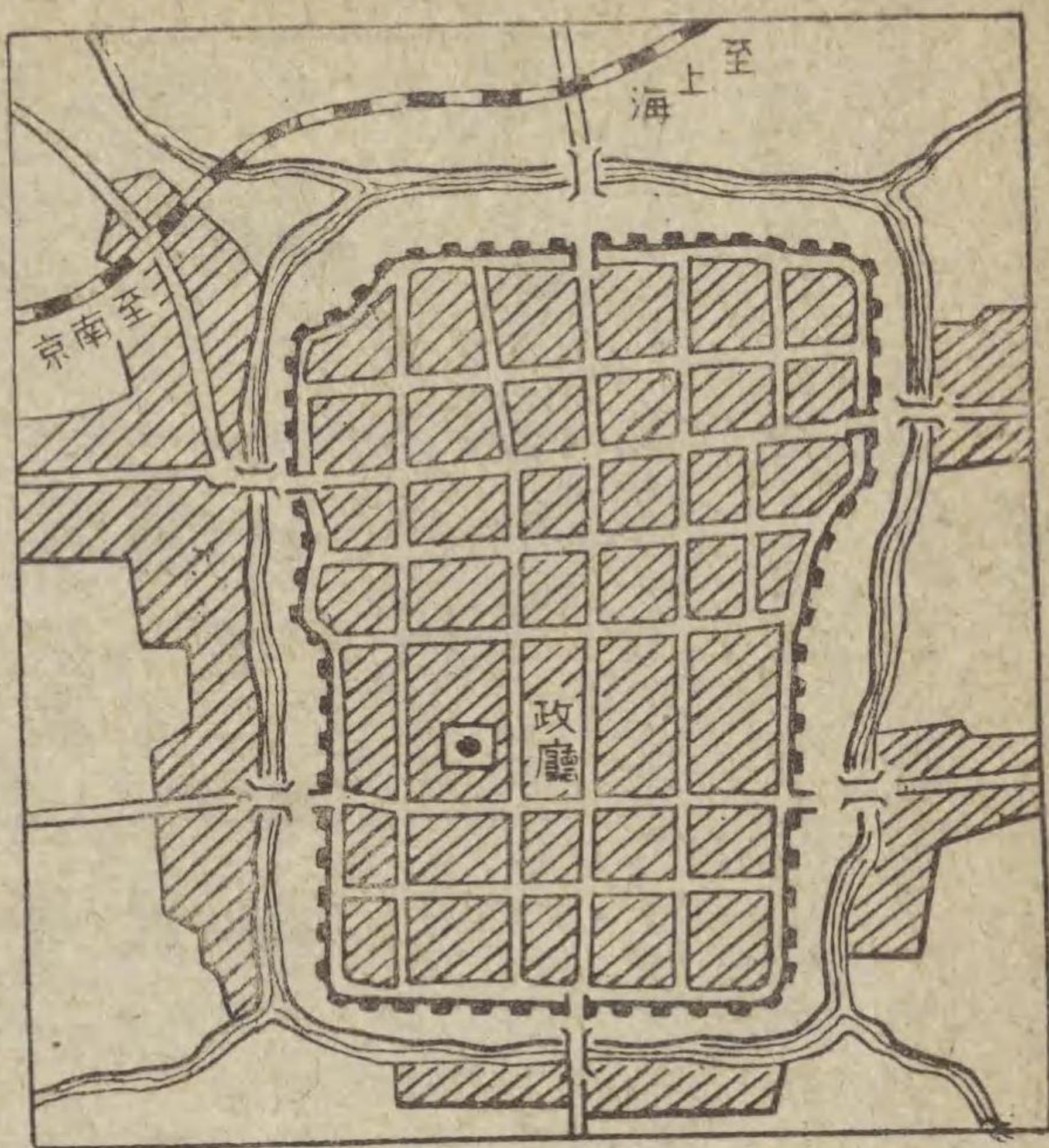
【吳福陣地の攻略】 吳福陣地とは湖北に於ける吳江、蘇州、常熟、福山に互る敵の第一線陣地のことであつて南京攻撃には先づ此の吳福陣地の堅を突破しなければならぬ。



蘇州攻略
(日九十月一十)

其一 蘇州の攻略 十一月十五日崑山を占領した部隊は連日の雨を冒し滬寧鐵道に沿ひ一路蘇州城に向ひ急追し、十八日眞義鎮附近に於て敵のトーチカ陣地を突破したる後、一部を以て揚城湖上を突進して蘇州北方に果敢なる敵前上陸を行ひ、正面から敵陣に向ひつゝある陸上部隊の猛撃に呼應して城内に突入し、十九日午前九時之を占領した。曉闇の嵐を衝いて蘇州城壁目指して進む日本軍の進出が餘りに早かつた爲め、城中の守備軍は雨合羽を着た日本軍を味方の者が退却を以て来たものと思ひ違ひ其の隊列に入つて平氣で歩いてゐた。又城兵は道を開いて迎へると云ふ有様で、支那軍は誰も知らぬ間に城は占領されて了つてゐた。蘇州の占領終るや更に長驅無錫に向つた。

蘇州は上海の西、水路で八十哩の地にあつて近く太湖の東岸に接す。春秋時代の吳の國都で有名な吳王夫差、越王勾踐の争ひの舞臺として著れ、當時既に宏壯な城廓を繞らしてゐたが其の後數次の禍亂に會ひ屢々改修され、目下の城壁は周圍約五里、南北一里半、東西一里の長方形をなし、城壁の高さは六米内外あり、城壁に沿つ



蘇州城

て運河を繞らし城門は南北各一箇、東西各二箇を有し外に數箇の水門を設け城内外の運河を連絡してゐる。人口は昔し盛んな時には二百四十萬を數へられたが、今や約三十五萬を有してゐる。市民は性質怯懦、商工業のみに没頭して勇武の精神に缺けてゐるが、名勝舊蹟多く、風光明媚、數層の古樓倒影を寫し、畫舫の中に淑やかに舉措する蘇州美姬の姿、紅燈の下に絃歌さざめくの景は唐宋の時代を髣髴せしめる。

其二 常熟、福山の攻略 前述した如く十一月十四日太倉を陥れた部隊は白茆口に上陸した新鋭部隊と共に戦果を西方及び南方に擴張して次第に吳福陣地の左翼據點である常熟の堅要に迫り、十八日、一隊を以て東正面より一隊を以て常熟の左側背にある虞山方面より、他の一隊を以て舟艇により崑城湖を横斷し常熟南方莫城鎮方面より、三面包圍の陣形を以て攻撃し十九日遂に常熟を陥れ、續いて追撃に移り、二十日には治塘鎮を占領し勢ひに乘じ無錫、江陰の敵陣地線に向つた。

常熟攻撃と同時に一部隊を派遣して福山鎮の攻撃に當らしめた。此の隊は海軍と協力し奮戦の後十一月二十一日之を占領した。此の時湖南戦線に於ても嘉興の堅陣を陥れて西方に敵を急追中であつた（此の事は後述する）。

以上の如く蘇州、常熟、福山、嘉興等の堅壘相次いで陥落し湖東會戦に輝かしき最後を飾るや、十一月二十日畏くも陸海軍に對し優渥なる勅語を賜はり、又陸軍大臣より同夜松井軍司令官に左の要旨の祝電があつた。

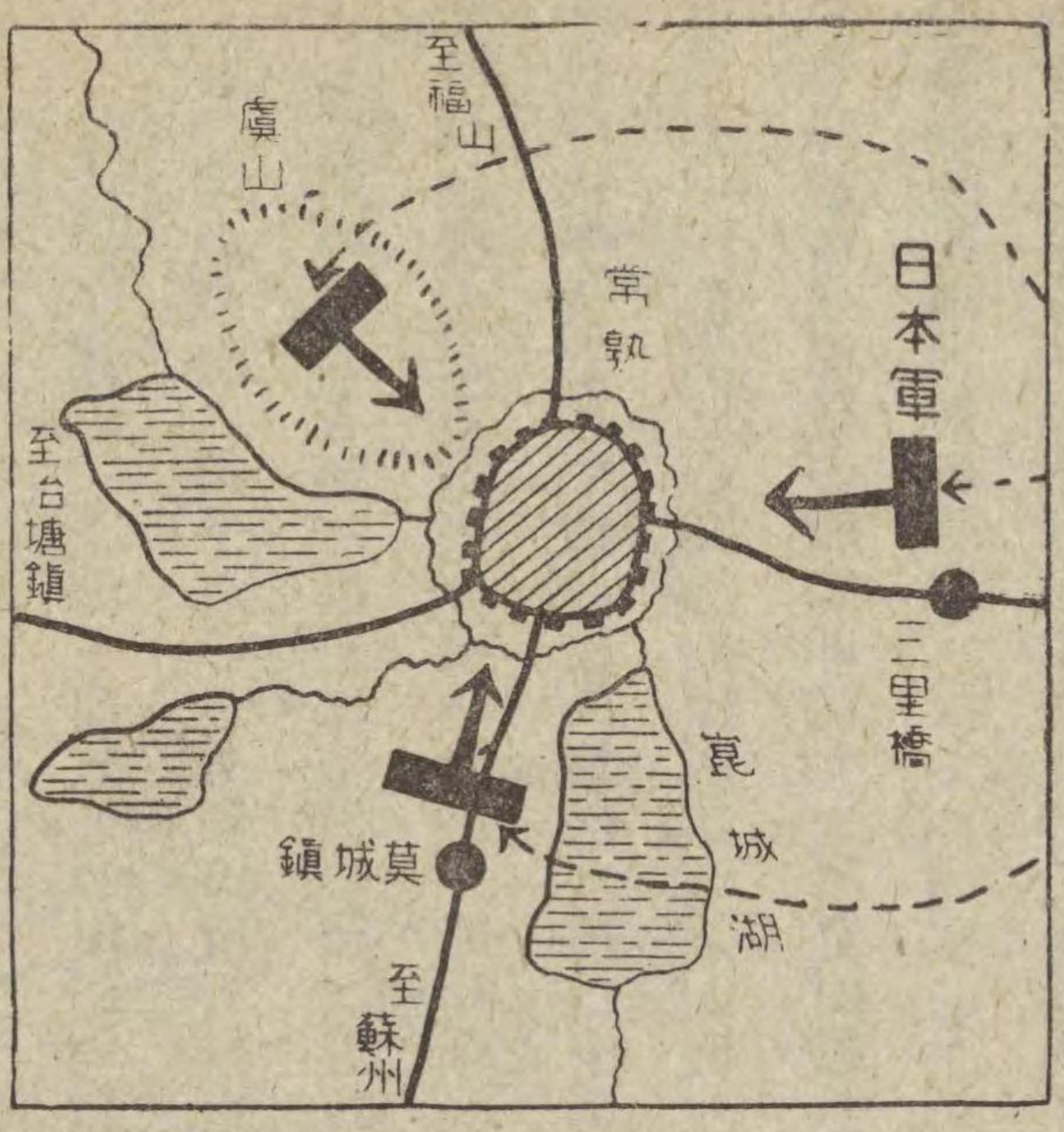
日之を占領した。此の時湖南戦線に於ても嘉興の堅陣を陥れて西方に敵を急追中であつた（此の事は後述する）。

以上の如く蘇州、常熟、福山、嘉興等の堅壘相次いで陥落し湖東會戦に輝かしき最後を飾るや、十一月二十日
畏くも陸海軍に對し優渥なる 勅語を賜はり、又陸軍大臣より同夜松井軍司令官に左の要旨の祝電があつた。

「頑強なる敵の抵抗を排し太倉、崑山、常熟、蘇州、
嘉興等の敵の重要據點を奪取し、克く敵をして抵抗の
餘裕を與へざる猛烈果敢の追撃により赫々たる大勝を
博したり、

此の光輝ある戦勝は克く皇軍の威武を中外に宣揚する
ものにして參戰將兵連日の勇戦奮闘に對しては眞に感
激措く能はざるものなり、

惟ふに事變の前途尙ほ遼遠なり、切に將兵の武運長久
を祈ると共に重ねて榮譽ある犠牲者に對し深甚なる敬
弔の意を捧ぐ。」



常熟攻略
(日九十月一十)

吳福陣地を屠つた日本軍は毫も急追の手を緩めず江陰、無錫の陣地に向ひ突進した。

【無錫、江陰陣地の攻略】 無錫——江陰の陣地は南京防禦の第二線で最も堅固として知られてゐる。此の陣地
は揚子江と太湖との間、僅か七、八里の狭部を占めてゐるので強兵を以て之を防守せんか、容易に突破し難き堅

要である。敗残の支那軍も比較的頑強に抵抗したが遂には突破せられた。

無錫は昔し吳王闔閭の祖先なる泰伯が都し數代に亙り鎮した要害である。此の地方錫を産す、之が爲め屢々玉侯の争奪の焦點となり、結局錫は掘り盡くされて了つた。城の碑銘に「有錫兵天下争無錫清天下寧」とありて無錫の名が襲用されてゐる。人口約十萬、城廓の周圍約三里、紡績を主とする工業都市である。

江陰は揚子江上、上海と南京との中間地點で揚子江の南岸にある小さな街で、附近に江陰砲臺があるので有名である。此の邊は揚子江の最も狭い所で古來要害の地として知られ秦の始皇帝が之を賞したと云ふのは暫く措くとして其の後の各朝は揚子江防備の關門となしたことは明かである。宋が金の侵寇に當り海軍の根據地となし、清時代は堅固なる砲臺を築いたが、阿片戦争、長髮賊の亂には敢なく陥落した。清末に兩江總督李鴻章が改築したが、永年放置してゐた結果使用に堪へず要塞としての價値がなかつたので、最近國民政府は之を現代式に増強改築し、江陰附近の高地には多數のトーチカを有する陣地を作りて陸正面の防禦に充て、水上からの進撃を阻止する爲めには多數の船舶とジャンクを附近の江底に沈めて封鎖設備を施した。人口約一萬、城廓の周圍約一里半の軍事的要地である。

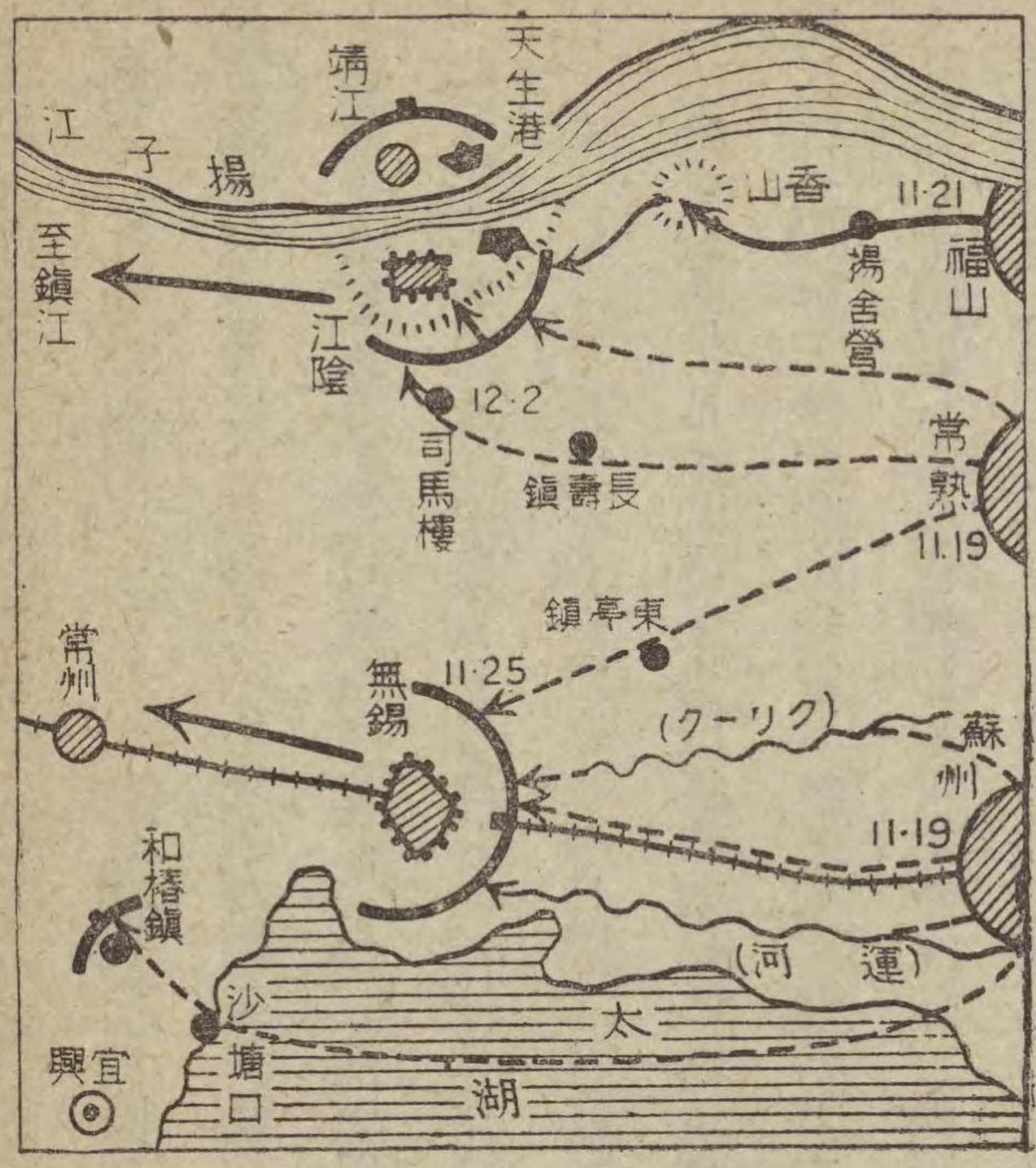
其一 無錫の攻略 前述の如くに吳福陣地を突破した日本軍は無錫—江陰の線を結ぶ堅陣に殺到して一路南京を目指すに至つた。

常熟を攻略した部隊の一は敵を追撃して十一月二十二日東亭鎮を陥れて無錫の東北方に迫り、蘇州を攻略して

敵を追撃した部隊は三縱隊に分かれ、一は鐵道線路に沿ひ、一は同線路に沿ふ運河により、一は同線路の北方に在るクリクを利用して無錫に向ひ追撃前進し、二十三日各隊相連繫して無錫東南方約一里半の所に達し壯烈な

常熟を攻略した部隊の一は敵を追撃して十一月二十二日東亭鎮を陥れて無錫の東北方に迫り、蘇州を攻略して

敵を追撃した部隊は三縦隊に分かれ、一は鐵道線路に沿ひ、一は同線路に沿ふ運河により、一は同線路の北方に在るクリークを利用して無錫に向ひ追撃前進し、二十三日各隊相連繫して無錫東南方約一里半の所に達し壯烈な夜襲によつて敵の掩蓋濠に取り附いて以來、砲工兵協同の下に圓匙と小銃とを兩手に使ひ分けつゝ敵に肉薄し、殊に砲兵は敵の機關銃座を逐次に破壊して歩兵突撃の機を作つた。二十四日夜は城内に在る支那兵との間に壯烈なる肉弾戦が展開せられたが、二十五日朝には城内の殘敵を掃蕩して完全に之を占據した。折柄昇る眞紅の旭日



略攻錫無—陰江

に日の丸燦然と映え、將兵は四日間殆んど不眠不休の攻撃の疲労も忘れて聲を限りに萬歳を三唱した。當時支那兵は敗退中大混亂を生じ、武器を携帯せず、糧食を求めて彷徨ふ兵が尠くない。ために無錫には兵變起り三銀行が襲撃せられた。

無錫占領軍の一部は息つく暇もなく敗敵を急追して常州に向ひ、又先に蘇州を攻略した部隊の一部は多數の民船により大舉太湖の波を壓して湖上を横斷し十一月二十七日朝、敵の虚を衝いて太湖西岸沙塘口沿岸附近に上陸し二十八日早くも宣興北方和橋鎮附近を占領して湖南よ

り西進せる部隊との連絡を取つた。

其二 江陰の攻略 十一月十九日常熟を攻略した部隊の一は二縦隊となり敵を西方に追撃し二十七日には長壽鎮を陥れ三十日には江陰の南方司馬樓附近に進出し、江陰要塞を東、南の二方面より包圍し、翌十二月一日遂に江陰市街に突入し、二日完全に之を占領し續いて黄山要塞をも陥れた。

一方十一月二十一日福山を攻略した部隊は揚子江南岸に沿ひ敵を追撃し途中揚舍營に於て敗敵の抵抗を撃破し、十二月一日香山附近の敵を攻撃し翌二日之を占領し進んで江陰に入つた。

江陰を攻略するや其の主力は長江南岸に沿ふ地區を鎮江に向ひ前進し、一部は二月八日江陰附近で揚子江を渡河して北岸に上陸、陸海空軍及び艦砲射撃の協力の下に其の攻撃順調に進捗し、同日靖江に突入し天生港の砲臺を攻略して附近一帯を占領し以て揚子江航行の安全を確保した。

江陰附近に於て日本軍の鹵獲した要塞砲の數約四十五門である。

以上の如く太湖北方の戦況は頗る有利且つ急速に進展し十一月十九日頃には蘇州、福山の所謂吳福陣地を、十一月二十五日頃には無錫、江陰の陣地線を突破して太湖の西北端に進出し、又太湖南方に於ける戦況も之に劣らず有利に發展し今や太湖西方に頭を出して南北兩軍相提携して南京に向ひ進撃し得るの隊勢に在つた。されば先づ湖南作戦の経過を述べ然る後太湖西方の線より大舉南京進軍の戦況に及ぶであらう。

其四 太湖南方の戦況 (十一月)

十一月五日杭州灣に上陸した日本軍は二つに分かれ一は北方に、一は西方に急進し、而して其の北進した部隊は松江を占領して湖北方面に進出し上海より退却する敵を追撃したことは既に述べた通りであるが、此には西進

十一月五日杭州灣に上陸した日本軍は二つに分かれ一は北方に、一は西方に急進し、而して其の北進した部隊は松江を占領して湖北方面に進出し上海より退却する敵を追撃したことは既に述べた通りであるが、此には西進して湖南方面に活動した部隊の戦況を述べるであらう。

此の湖南方面は地形上、南京を防禦する上に於ては湖北方面の重大性に比し次義的のものである。されど杭州の大都を控へ、杭州より南京の西南に通ずる鐵道の軍事並に經濟上の價値を思ふときは、南京政府としては決して閉却してはならぬ方面である。それで蒋介石は湖北の吳福陣地と連繫して

一、嘉興——海鹽の線を第一線とし

嘉善——乍浦鎮の線を其の前哨線とし

二、長興——吳興(湖州)——海寧の線を第二線とし

三、杭州を以て此の方面に於ける核的據點とした。

然るに是等の陣地は脆くも忽ちの間に陥落して了つた。

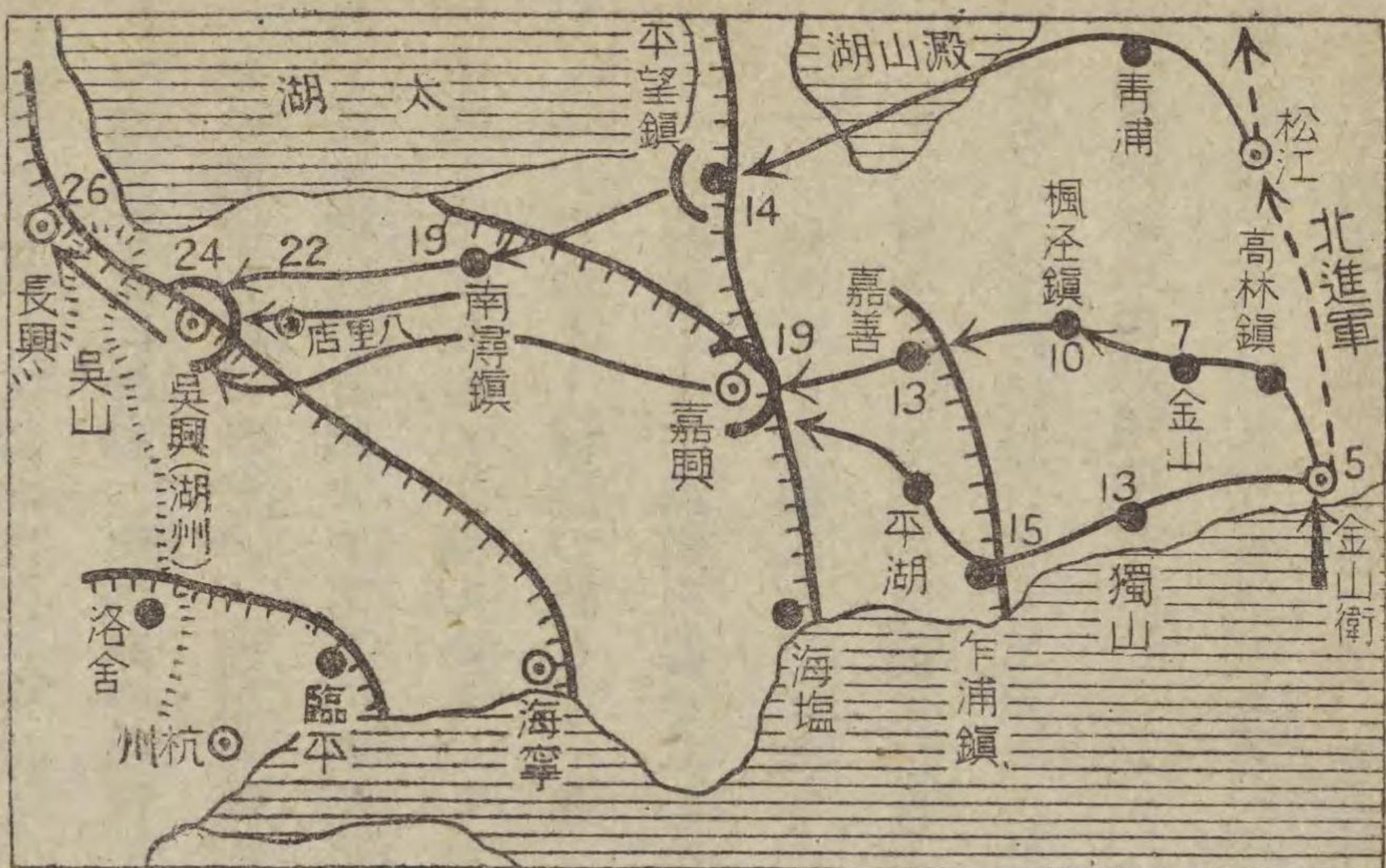
【第一線嘉興陣地の攻略】 杭州灣上陸軍の内の西進部隊は十一月五日上陸すると直ちに前進を起し、先づ亭林鎮を抜き、七日金山附近を経て九日楓涇鎮の敵を攻撃した。同陣地はトーチカ據點を有する三線より成る堅固なもので、裝備の優秀な歩兵一千、重機關銃十、迫撃砲二門を以て之を守備してゐたが、十日強攻して之を攻略し、十三日には敵兵約五千の頑守せる嘉善を陥れ、十五日夕には嘉興の東方二吉米の線に進出して同地攻撃を準備した。

嘉善は春秋時代の吳、越の古戦場であり、其の後三國時代吳の孫權が魏の曹操に對抗せる時、此の地に於て軍

艦を建造して提子江に浮べ克く其の勢威を保ち得たと云はれてゐる。明時代八幡船の跳梁に備へて築城したのが現市城で周圍一里餘、人口約一萬の小都市である。

嘉興はその昔吳越の争に際し越は吳の猛攻を此に防いで敗れた所であり、秦代には始皇帝東巡の際、此の地に帝王の氣があると云ふ卜者の言を信じ囚徒十萬を動員して其の氣の撲滅に盡さしめたことがある。市街は周圍約一里半の城廓を繞らし、人口約六萬、軍事、經濟上の要衝で蔣介石は此の線で日本軍を喰ひ止めんとしたのであつた。

嘉興の攻撃は嘉善を陥れて前進した部隊と、別に海岸道を西進して來た部隊との共同によつて行はれた。此の海岸道部隊は新たに杭州灣に上陸した兵團であつて、上陸するや直ちに海岸道を西進し十一月十三日は海軍協力の下に獨山市北方の敵を撃退し、十五日には乍浦鎮の要塞を粉碎して早くも平湖に迫り、同地に在る約一箇師の敵を東、南の二方面より包



南湖の戦況
(十一月)

圍攻撃して之を陥れ、直ちに嘉興に向つた。

嘉興は此の方面の陣地に於ける核心であるだけ、約三、四箇師の兵力之を防守してゐた。日本軍は之に對し十

圍攻撃して之を陥れ、直ちに嘉興に向つた。

嘉興は此の方面の陣地に於ける核心であるだけ、約三、四箇師の兵力之を防守してゐた。日本軍は之に對し十八日嘉善方面よりの部隊は西北方より、平湖方面よりの部隊は東方より挾撃の隊勢を取り數日來の豪雨を冒して猛攻し翌十九日遂に同城を占領した。

先に青浦方面から澱山湖上を横斷して十一月十四日平望鎮を占領した一部隊は太湖南岸道を西進して十九日嘉興の西北方約八里の南潯鎮を占領した。

此の十一月十九日は支那軍に取りては戰運の凶日であつた。即ち湖北に於ては常熟、蘇州の堅陣敗れ、湖南に於ては南潯、嘉興の難關陥り、蔣介石の重視し且つ防守を期待した所謂南京の防禦の第一線は茲に脆くも潰えてしまつたのである。

嘉興、南潯を攻略した日本軍は豪雨、泥濘を物ともせず破竹の勢ひを以て敵を追撃し、此に吳興(湖州)、長興の攻略となるのである。

【吳興、長興陣地の攻略】 十一月十九日南潯を占領した日本軍は水路、自動車道を利用して西進し、途中敵を驅逐し二十二日には水路八里店に迂回して殆んど敵を捕捉殲滅した。敵の遺棄した屍體約二千を下らず、此の中には旅長一、團長(聯隊)二あつた。

其の内二十三日嘉興攻略部隊も到着し北、東、南の三方面より吳興(湖州)を包圍攻撃し二十四日遂に之を占領

した。敵は主力を以て長興方向に、一部を以て西方に退却した。吳興に於て日本軍は約五十箇師團分の米を鹵獲した。

吳興は米粟の豊産地であり、附近は湖水と山藪とに圍繞せられて攻圍困難の地位を占めてゐるので、天下亂るれば必ず一勢力の據るべき處であるが、他に杭州、南京、蘇州等の如き恰好の本據があつたので、吳興は常に是等の防禦線に使用せられた。今回蒋介石は此の地を第二線南京防禦の一要點とした。宋が此の附近に據つて金、元の來侵を防ぎ、又明の朱元璋(太宗)が元軍を破り、八幡船、長髮賊の侵掠を受けたこと等が史の著例とする所なり、人口約五萬、市街には周圍二里餘の城廓を繞らしてゐる。

十一月二十四日吳興(湖州)を屠つた日本軍は長興に向ひ猛追撃を續行し、二十五日長興前面の吳山々頂に日章旗を翻し、砲兵隊の協力と相俟つて二十六日拂曉より攻撃を開始し遂に同日之を占領した。該地の占據により太湖の北、東、南の各岸は完全に日本軍の占領に歸したので、同湖の西岸に據つた敵も既に最後の要害も頼むに足らざるを知り續々湖岸より西方に向け潰走したので太湖は完全に日本軍の制する所となつた。

長興は吳興(湖州)と共に太湖西南岸の重要都市である。句容、南京への幹線道路上にあり又廣徳飛行場にも通じ南京攻略戦に重大意義を有する據點である。長興以西は山岳地帯に接してゐる、上海戦以來湖沼やクリーク、泥濘等に惱まされた日本軍は是れから變つた山岳地帯の戦鬪に移るのであるが長興占領軍の一部は直ちに北進して宣興に、他の一部は西進して廣徳に向つた。

雲一つなき絶好の飛行日和に恵まれた此の頃太湖と南京間の上空に海陸空軍が翼を並べて亂舞し敵陣に巨弾をあびせて敵の心膽を寒からしめた。之に策應して長興占領の湖南作戦軍は益々西進を續けて湖北作戦軍と競争的

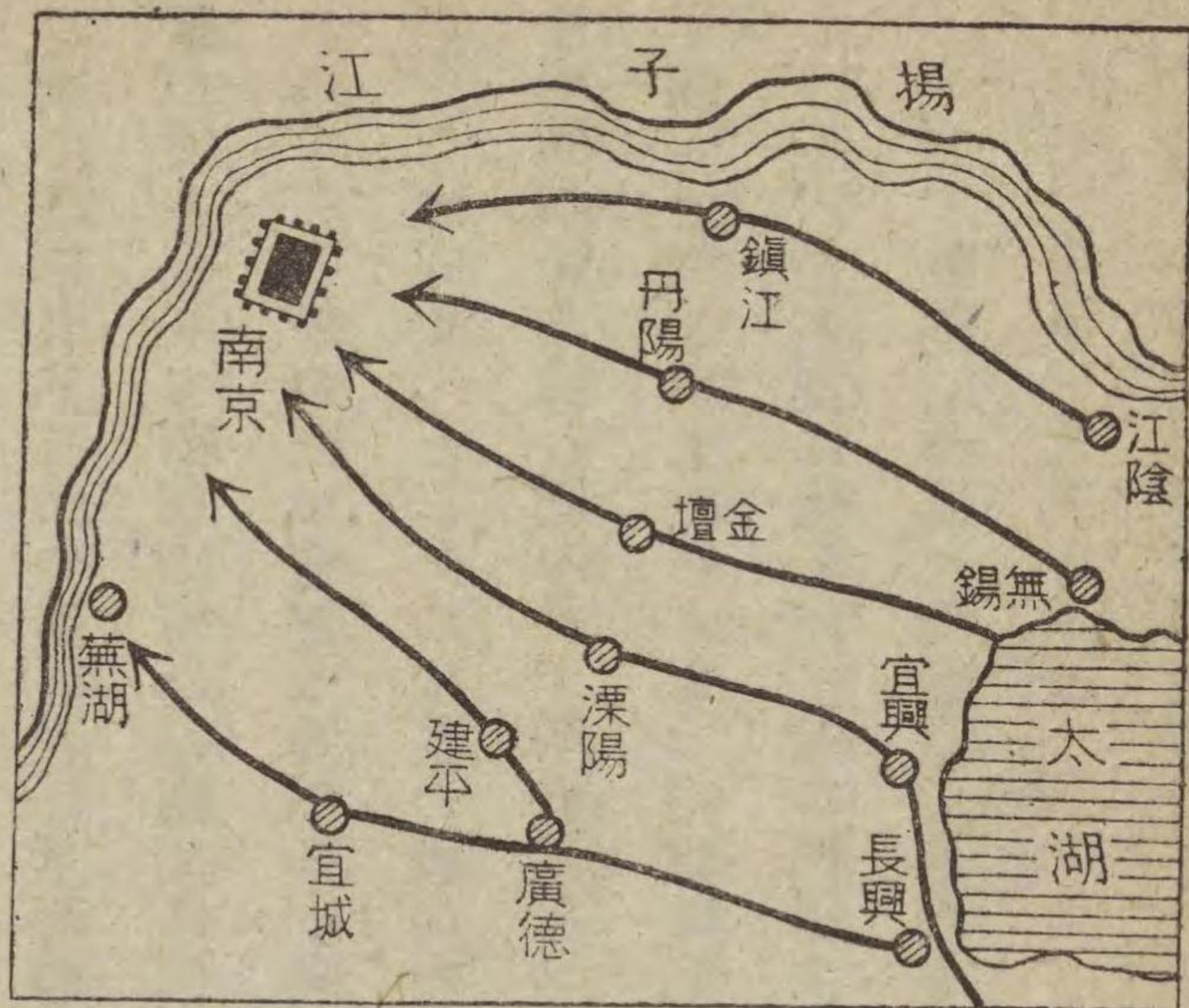
雲一つなき絶好の飛行日和に恵まれた此の頃太湖と南京間の上空に海陸空軍が翼を並べて亂舞し敵陣に巨弾を
あびせて敵の心膽を寒からしめた。之に策應して長興占領の湖南作戰軍は益々西進を續けて湖北作戰軍と競争的
に南京に迫まらんとした。

其五 太湖西方南北兩軍の並進 (十一月—十二月)

太湖南北に分かれて一時作戰した日本軍は連戰連勝敵を撃破し恰もよく兩軍共に十一月二十六、七日頃太湖の
西岸に顔を出すに至つた。之れ軍統帥の作戰指導其の宜しきを得たものであつて、爾後は兩軍を相連繫せしめ大
鵬の翼を張りて南京に向ひ包圍的に進むべきである。此の時に於ける一般狀況を大觀すれば南京の位地は彎曲せ
る揚子江の袋の底に窘蹙せる頗る不利な姿勢にあるものであつた。日本軍の此の隊勢に對し支那軍事當局が尙ほ
南京を頑守せんとしたのは其の戦局の大勢を知らざるものと評せざるを得ない。之も畢竟彼等の宿病とも云ふべ
き地形の堅を恃む罪の致す所と云ふべきである。

湖西に頭を出した日本軍は南京に向ひ三道並び進む所ではなく六道並び進んだ。今其の大體を云へば

- 一、最右翼は揚子江に沿ひ西進するもの
- 二、無錫、丹陽、句容道を進むもの
- 三、金壇、天王寺鎮道
- 四、宣興、溧陽、溧水道



南京の地位

六、最左翼は長興、廣德、甯國(宣城)道を進むもの
此の如くして南京の北、東、南より遠巻きに攻撃しようとの企
圖であつたやうだ。先づ右翼より述べよう。

【其一 右翼方面】(一)十二月二日江陰を陥れたる日本軍は
同八日揚子江を渡つて北岸に突進し同日靖江を占領して揚子江の
航行を安全にし、然る後其の主力は海軍と協同して南岸に沿ひ鎮
江に向ひ前進し、十一日鎮江東方四里半に在る圖山要塞及び象山
砲臺等を陥れ、十二日橋頭鎮を抜き、十三日烏龍山砲臺、十四日
幕府山砲臺等を攻略して南京の北方近く迫つた。

鎮江は丹陽方面より進撃せる一隊により十一月八日既に攻略せられた。此の附近の諸砲臺より鹵獲せる大砲約六十門に上つた。鎮江占領部隊は十三日北岸に向ひ敵前渡河を強行して敵を撃退し、十四日には揚州城を占領して當方面の安全を確保した。

鎮江は南京から水路約二時間の行程にあり、人口約十五萬、城壁の周圍約一里半である。戰國時代、吳越爭霸の時より江岸の要地として著聞し、吳の孫權が今の南京に建國して以來江南の安危は一つに鎮江の攻守に係ると

さへ云はれて兵家必争の地となつた。隋が運河を開いてから一層要地化し殊に此の附近の江面が狭くなつたことにより揚子江の渡場として盛んに用ひられるやうになり、南北交通は水陸何れも此の地を經過するに至つては、

の時より江岸の要地として著聞し、吳の孫權が今の南京に建國して以來江南の安危は一つに鎮江の攻守に係ると

さへ云はれて兵家必争の地となつた。隋が運河を開いてから一層要地化し殊に此の附近の江面が狭くなつたことにより揚子江の渡場として盛んに用ひられるやうになり、南北交通は水陸何れも此の地を経過するに至つては、此の地の興廢は歴代王朝の盛衰に比例した。爲めに宋は南遷後常に重兵を此に駐割せしめて金、元の侵寇に備へた。清時代は特に滿洲八旗兵を此處に駐割せしめた。阿片戦争の時英國軍艦二時間の砲撃に陥落して清國屈服の動機となつた。長髮賊の亂に住民は大虐殺せられて荒廢したが、其の後漸く復舊した。

由來鎮江は附近の沿岸、中洲等に在る砲臺と相待つて揚子江正面の防備は堅固であるが、南方の陸正面に對しては比較的防備薄弱である。此の附近は抗日熱の最も盛んな所である。

(二) 十一月二十五日無錫を攻略した部隊は敗敵を急追し、二十七日には黃林鎮を陥れ、二十八日進んで常州を攻撃し徹夜市街戦を演じつゝ頑強に抵抗する殘敵を壓迫し二十九日黎明と共に一齊攻撃に移り正午頃城内を完全に占據し、三十日には奔牛鎮に達し、十二月二日には丹陽の要地を攻撃し夜半完全に之を占領し、續いて一部を以ては鎮江を攻撃せしめ、主力を以ては敗敵を一路南京へ追撃し、四日夕には句容攻撃を開始し、夜襲を反復しつゝ殘敵を掃蕩し市外の西北端より飛行場に到達し、五日早曉句容を占領し七日湯水鎮に對し包圍の態勢を占めた。

(三) 無錫より西南方に分進した一隊は行く／＼敵を追撃して十二月二日金壇城を攻略し城頭高く日章旗を翻へした。爾後猛追撃を續行し三日夕には磨盤山々頂に達し、翌四日には天王寺鎮を経て五日句容西方、南京街道

上の索野鎮を占領し、七日には淳化鎮の敵に迫まり東方及び南方より之を包圍し殷々たる銃砲聲は南京郊外快晴の冬空を壓して將兵の士氣は既に南京を呑んだ。南京へ僅か二里半である。

【其二 中央方面】(四)十一月二十六日長興占領後、北進した部隊は湖西の山間を縫うて分進し二十八日宣興の攻撃を開始し、クリークを挟んで夜戦に入り工兵の決死的架橋を以て宣興の南門に突入し午後十一時を以て完全に之を占據し、二十九日は殘敵の掃蕩終了と共に敵を追つて西進し、十二月二日溧陽を陥れ、三日には南渡鎮を抜き、磨盤山を横斷して一氣に溧水に殺到し、四日午後城頭に日章旗を掲げた。更に南京方向に進撃を續け、六日には祿口鎮を抜いた。此の時建平(郎溪)方向より北進せる部隊も之に加はり相協力して七日秣陵關附近の敵陣を突破した潰走する敵を追ひ南京の南門方向に進んだ。

【其三 左翼方面】(五)長興より西進した部隊は泗安鎮を抜き十一月二十七日省境を突破して祠堂に達し、二十九日午後より猛烈なる砲撃の掩護下に廣徳に向ひ果敢なる攻撃を強行し、夜間續行して三十日早朝之を占領し主力を以て更に敵を西方に急追し一部を以て廣徳より西北方建平方向に敵を追撃した。

廣徳は江蘇、安徽、浙江三省の要衝で守るに易く攻めるに難き地勢である。由來兵家の必勝の地とされてゐた。春秋戦國時代には楚、吳の抗争の地であり、宋の時代には岳飛は金の侵入軍を此の附近で邀撃して屢々破つたが、遂に突破されて一時首都臨安も陥落した。其の後元將伯顔が南京より攻め來りて廣徳を陥れ臨安を抜いて宋を滅ぼした。(臨安は廣徳の南方約二十里の所にある)近次南京政府は廣徳に道を通じて空軍根據地を設けた

が、支那軍は戦局が此の方面にまで擴大するものとは豫想せず、最近俄に軍司令部を置いてゐた有様であつた爲め、此の方面の敗戦は南京に對する脅威を一層大ならしめたものである。

宋を滅ぼした。(臨安は廣徳の南方約二十里の所にある) 近次南京政府は廣徳に道を通じて空軍根據地を設けた

が、支那軍は戦局が此の方面にまで擴大するものとは豫想せず、最近俄に軍司令部を置いてゐた有様であつた爲め、此の方面の敗戦は南京に對する脅威を一層大ならしめたものである。

廣徳より西北方に追撃した部隊は十二月三日建平(郎溪)を占領し、此處より一部は石臼湖東岸を進んで溧水附近に出で該方面に進出せる部隊と協力して秣陵鎮方向に突進して南京南門に向つたことは既に述べた所である。

建平より西進せる主力は固城湖南岸を進んで十二月四日水陽鎮を占領し敗敵を追撃して七日何家舗附近に達し當塗(太平)東方地區に向ひ前進した。

當塗は南京と蕪湖との中間、揚子江の南岸に位する敵の要害で南京の後陣として重視されてゐた所であるが、最早日本軍によりて攻撃されるに至つたことは恰も南京の背後に劍を擬せられたに等しいものである。

(六) 十一月三十日廣徳占領後其の主力は西方に敵を急追し十二月二日には河南店を攻撃し激戦の後四日之を撃退し五日朱塘鎮を陥れて南京附近の敵の唯一の退路たる江南鐵道に迫まらんとした。敵は龍頭山の頂上に據り必死の抵抗をなすので茲に猛烈なる山地戦を交へた後之を突破し、六日拂曉山間に鈔する感激の萬歳と共に山上に日章旗を翻へし次いで七日宣城を占領して鐵道を遮斷し尙ほ西北進して八日頃灣沚鎮に入り蕪湖に迫まらんとした。

以上の如く六道を競争的に前進したる日本軍は十二月七、八日頃には凡そ揚子江岸烏龍山砲臺附近から湯水鎮—淳化鎮—秣陵鎮—何家舗—灣沚鎮の線に進出して包圍陣を成形し南京を指呼の間に總攻撃をなさんとするの勢

を示した。

其六 評 論

上海戦の追撃は十一月上旬より十二月上旬迄約一箇月間行はれ、此の行程は、湖北の近い方で約八十里、湖南の遠い方で約百里であれば一日平均約三里内外であり、行動正面は約四十里であつた。しかも此の間一刻瞬時の休息もなく日夜戦闘を繼續し殊に夜間戦が多かつたのは敵を急追捕捉せんが爲めであつたらう。尙ほ湖東に於ける戦闘間は豪雨とクリークに惱まされ、湖西の地區に於ては山地戦に苦しみ、しかも以上の如き好果を收めたるは史上稀に見る所である。之には色々の素因あらんも一に統帥の良好なるに歸せざるを得ない。

即ち上海攻撃軍と杭州灣上陸軍とを其の初期に於て適當に部署せるが如き、湖北、湖南の兩戦線を理想的に指導せるが如き湖西に於ける全線を敏速順調に統帥せるが如き、皆其の優點を示せるものであつて、是等作戦の行動圖は全く一の模範圖例とも云ふべきものである。

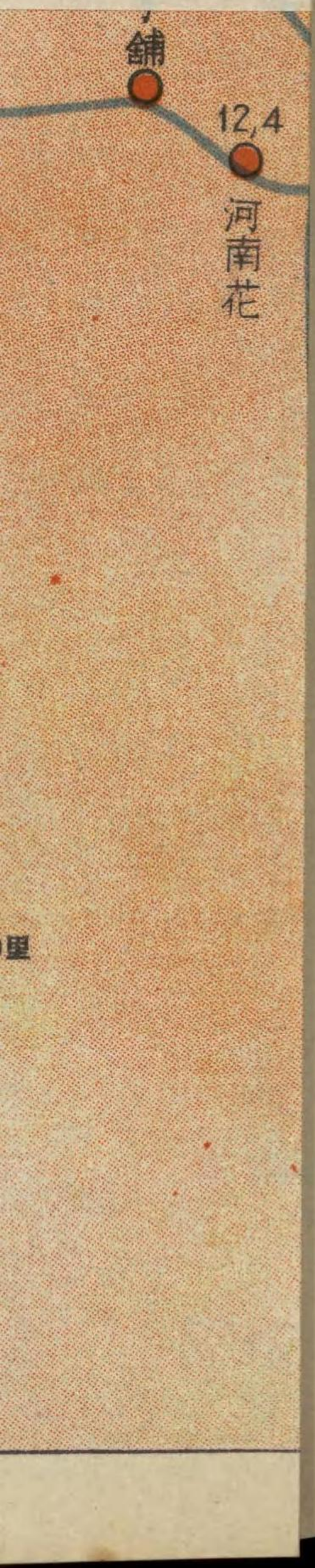
日本軍に就いて研究を要すべきことは杭州灣上陸軍の用途であらう。今回は上海の背後を衝くのが當初の主目的であつたらうが、之が上海に用ふるか或は南京攻撃に用ふるかによつて其の上陸點を如何に選定すべきかは研究の價値ある問題であらう。

支那軍は一と度び上海に敗るゝや、屢々抵抗したやうであるが、到底上海戦に於けるが如き頑強の氣慨なく殆んど一瀉千里の勢を以て南京に退走したのであつた。此の際支那軍としては既に湖北、湖南の防禦線が敗れた以

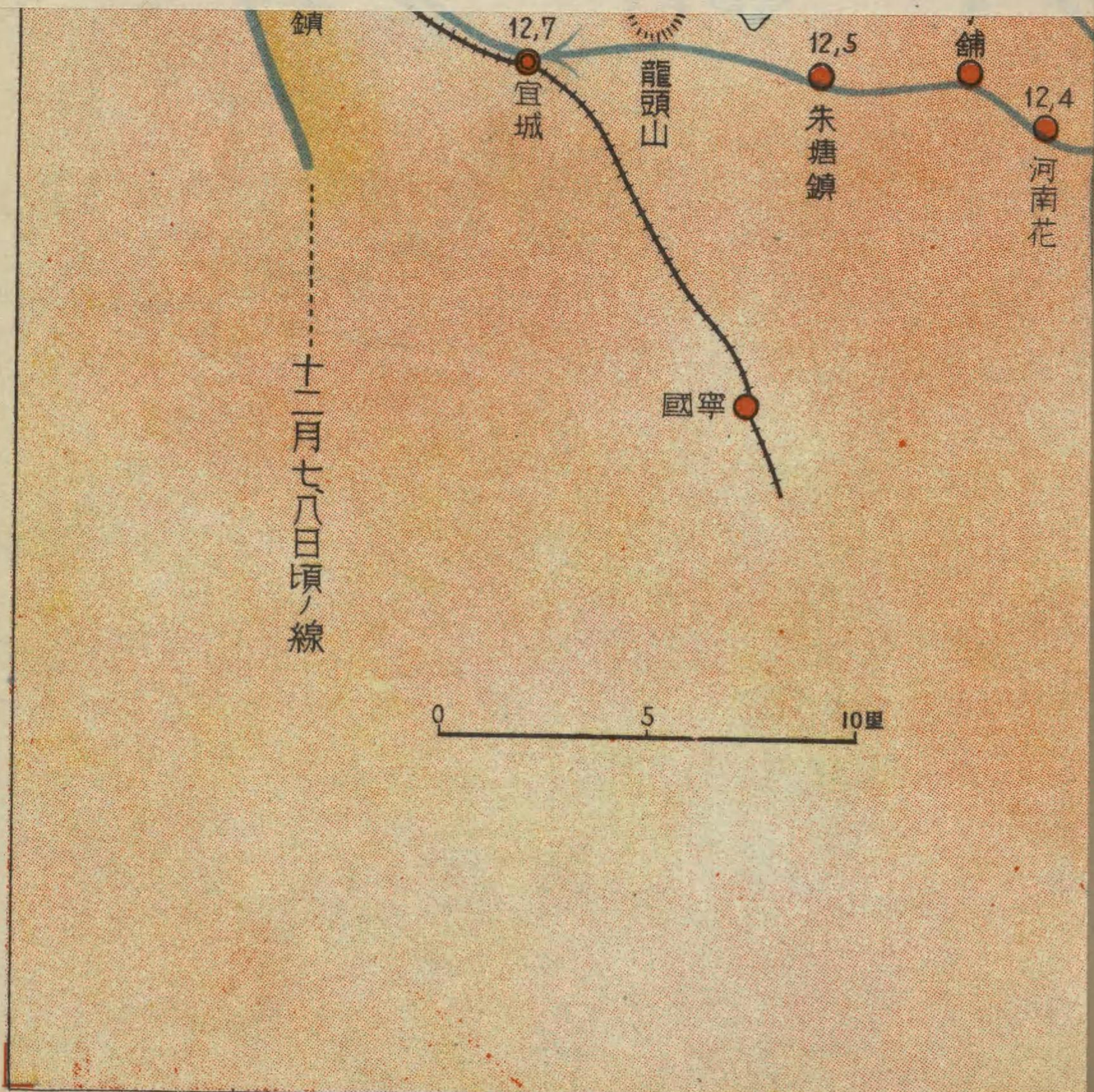
上は徒らに袋の底の南京に蹙りて包圍攻撃を受けんよりは、茲に乾坤一擲の決戦を試みるか若くは思ひ切つて早期に南京を撤退すべきかであつた。日本軍の既に湖西に進出したるを見て尙ほ且つ南京を拒守せんとするが如き

上は徒らに袋の底の南京に蹙りて包圍攻撃を受けんよりは、茲に乾坤一擲の決戦を試みるか若くは思ひ切つて早期に南京を撤退すべきかであつた。日本軍の既に湖西に進出したるを見て尙ほ且つ南京を拒守せんとするが如きは戰略の要諦を解せざるものと云ふべしである。

然らば如何に乾坤一擲の壯舉を斷行すべきかと云へば南京より鎮江に互る高地線に側面陣地を占めて、嚴然たる背水の陣を取り、敗餘喪心の軍を死地に陥れて活を求むべく敵を邀撃すべきであつたらう。之が爲めには鎮江附近に於て長江閉塞の手段を講ずるの必要あること勿論である。

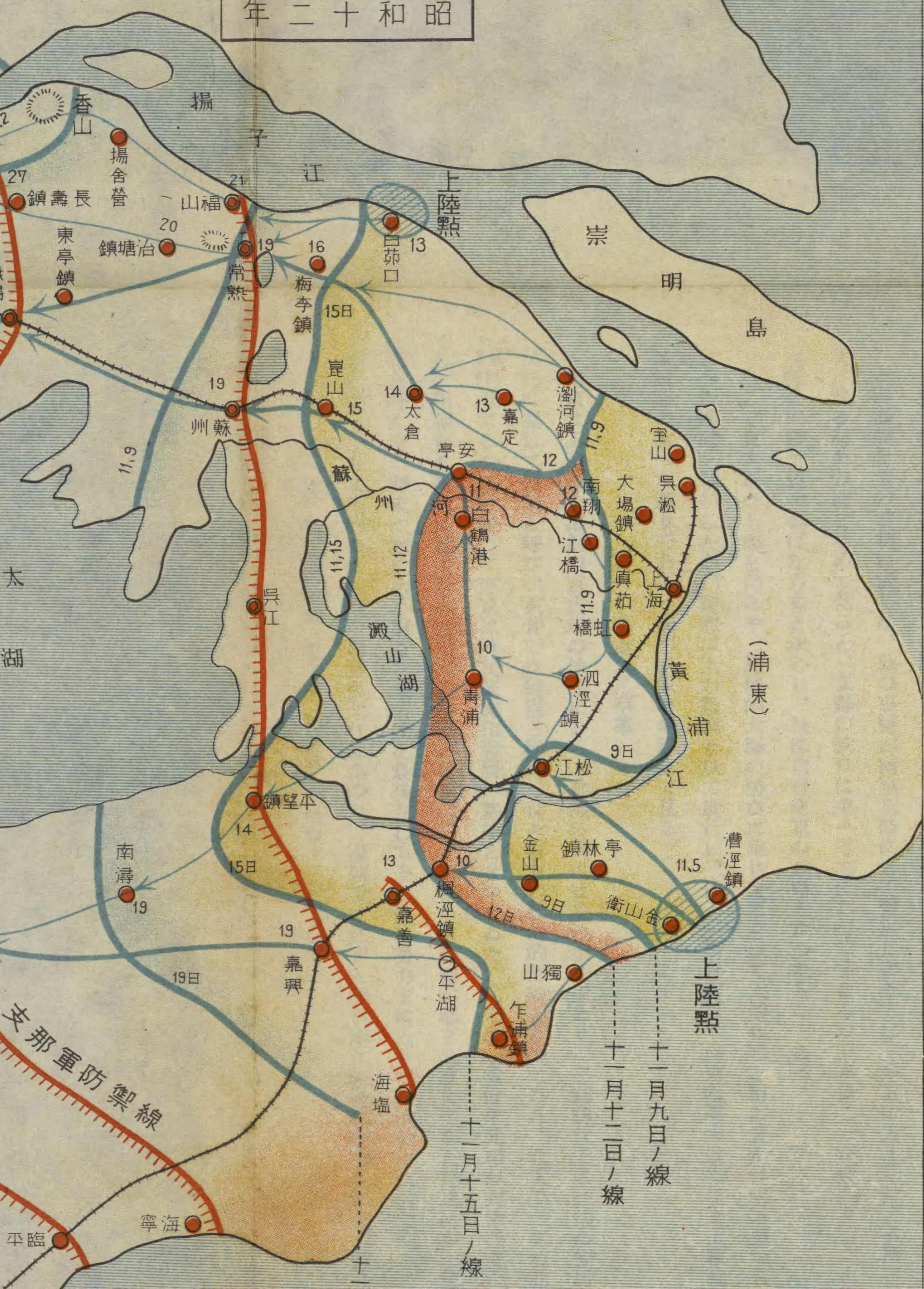


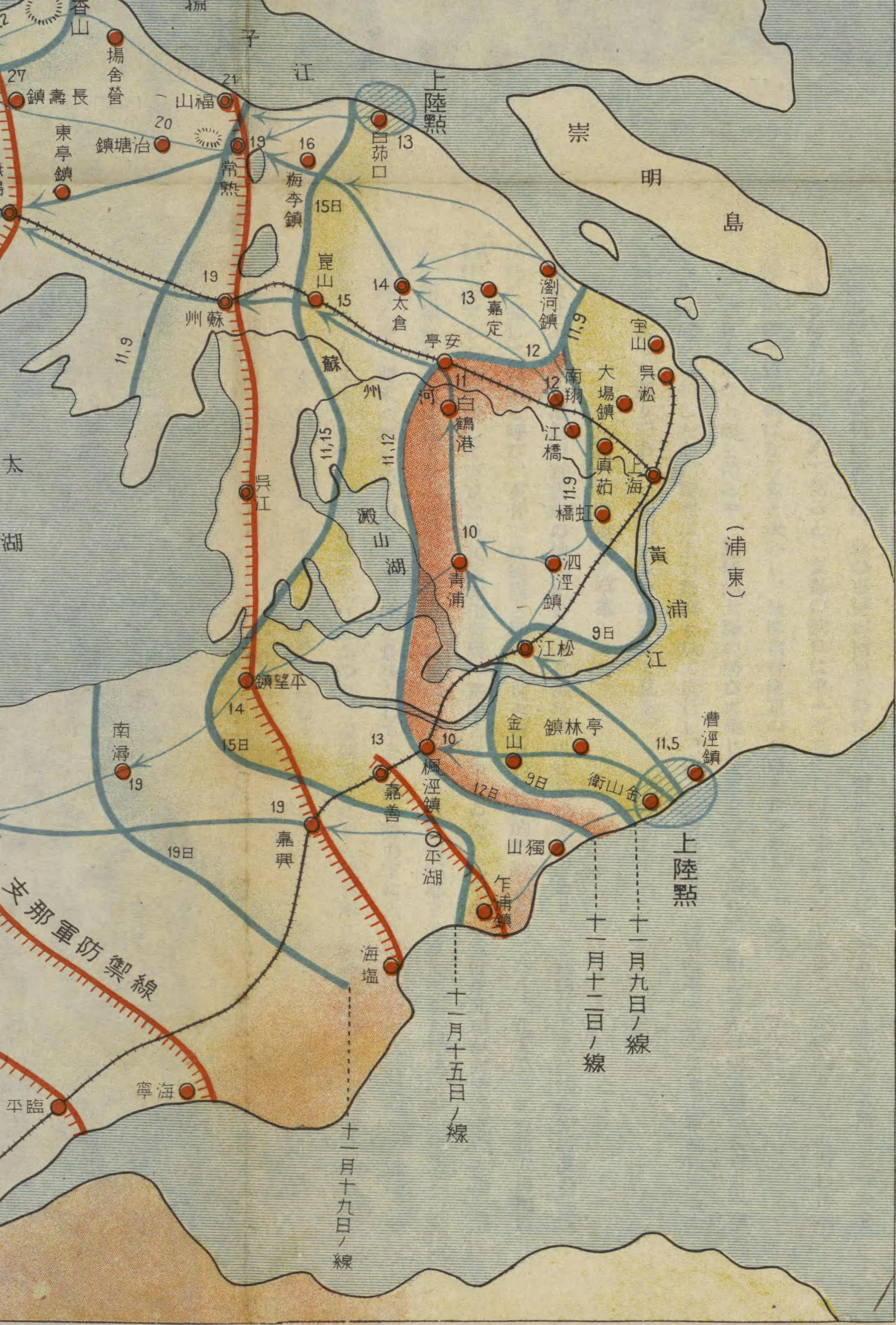
里



上海戰後之追擊概圖

昭和二十年





戰後追擊概圖

昭和二十年





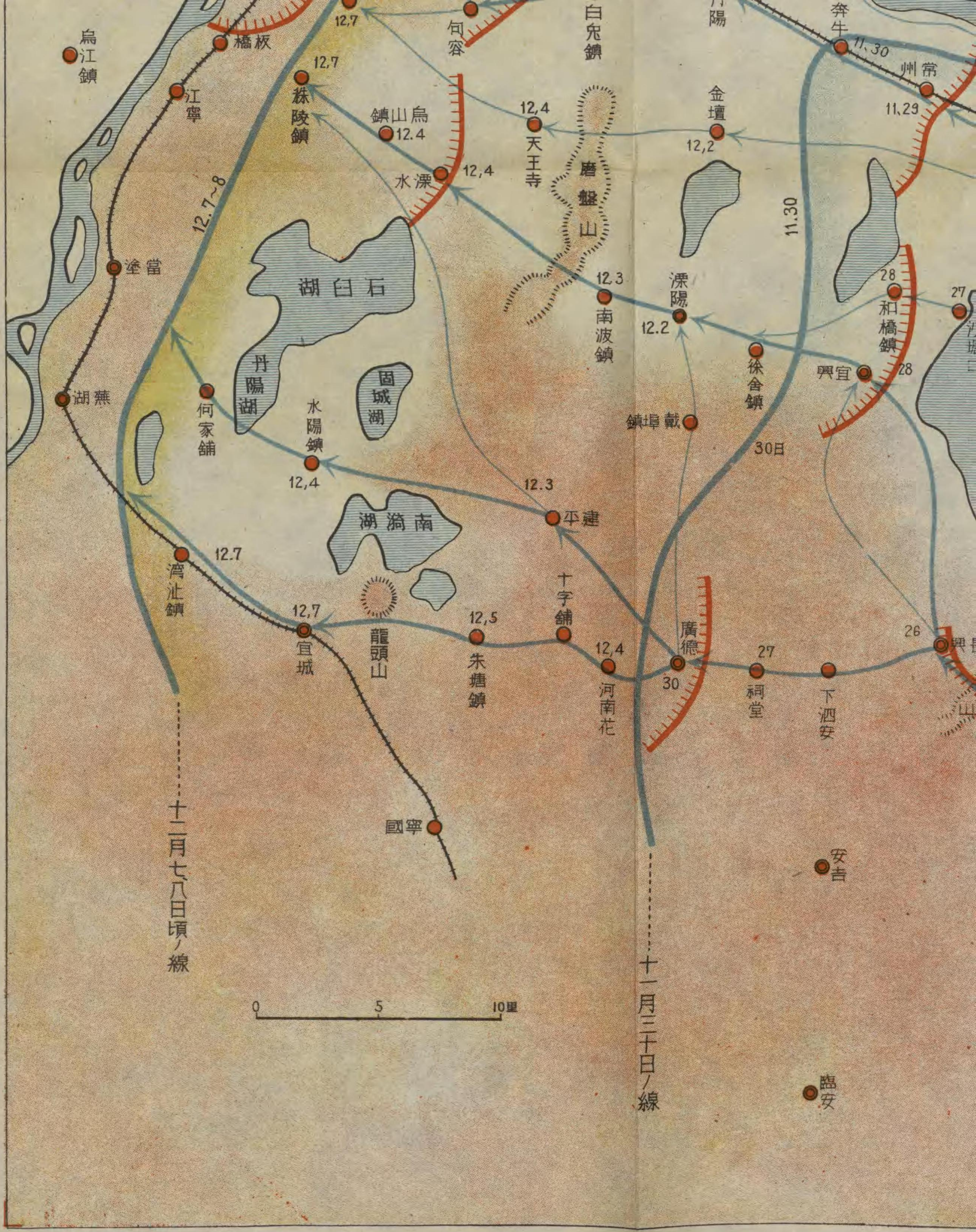


十二月七八日頃ノ線

十一月二十日

0 5 10里

幕府山 烏龍山 鎮頭橋 鎮江 山焦 山象 關下 淳化鎮 鎮水湯 12,7 12,5 12,3 12,2 丹陽 奔牛 11,30 州常 11,29 烏江鎮 橋板 江寧 株陵鎮 12,7 鎮山烏 12,4 天王寺 12,4 磨盤山 金壇 12,2 12,2 12,3 12,2 漂陽 28 和橋鎮 28 塗當 湖燕 何家鋪 水陽鎮 12,4 固城湖 鎮埠戴 徐舍鎮 30日 27 興宜 27 湖滄南 平建 12,3 十字鋪 12,4 廣德 30 27 祠堂 下泗安 26 27 26 湖蕪 灣沚鎮 12,7 宜城 12,7 龍頭山 朱塘鎮 12,5 河南花 30 27 26 國寧 安吉



烏江鎮

橋板

江寧

秣陵鎮

鎮山烏
12.4

句容

白兔鎮

12.4
天王寺

磨盤山

金壇

12.2

奔牛

州常

11.29

12.7~8

塗當

湖白石

丹陽湖

固城湖

湖燕

何家鋪

水陽鎮

12.4

水漂

12.4

12.3
南波鎮

溧陽

12.2

徐舍鎮

興宜

28

和橋鎮

28

30日

鎮埠戴

12.3

平建

湖滄南

龍頭山

12.7

灣沚鎮

12.7
宣城

12.5
朱塘鎮

十字鋪

12.4
河南花

廣德

30

27
祠堂

下泗安

26

興

十二月七八日頃ノ線

國寧

十一月二十日ノ線

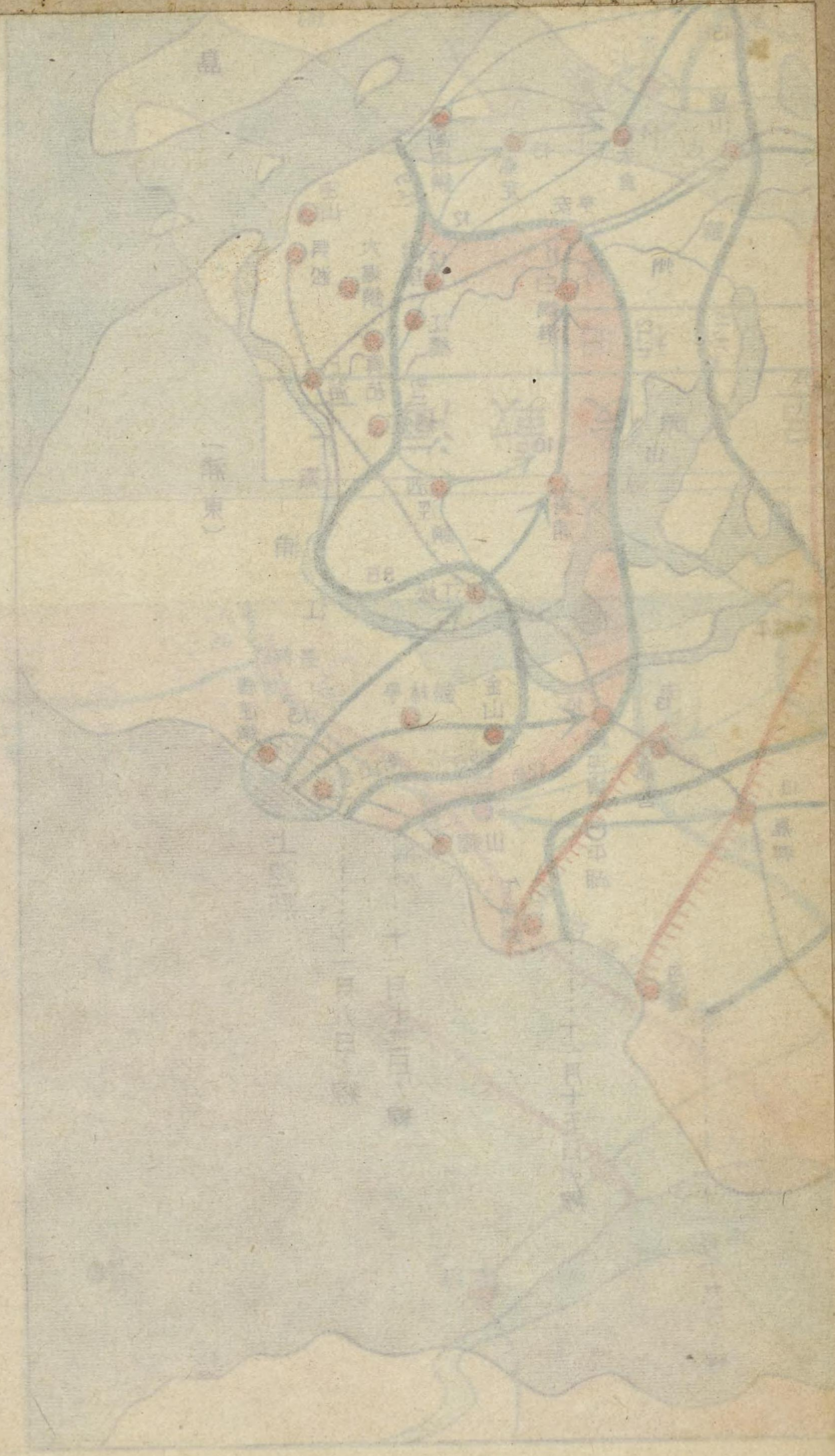
安吉

臨安



第三節

南京攻略（昭和十二年十二月十三日）



第三節 南京攻略（昭和十二年十二月十三日）

上海事變勃發の當初に於ては、此の事變が南京攻略にまで發展しようとは、敵も味方も期せざる所であつたらう。然るに上海戦を始めて見ると、支那の抗日は中々深刻にして頑強なものであることが解かり、之に對し日本は徹底的に膺懲せねばならぬと決心し、茲に首府南京の攻略となつたものである。

そこで日本軍は上海を陥るや、壓倒的大勝の勢ひに乘じ全軍を以て太湖の北と南に分かれ兩方面から南京へ南京へと進撃を開始したが、豫想以上の順調を以て進行し、僅々一箇月を以て南京の周邊近くにまで殺到したことは前節に述べた通りである。先づ南京を略説して見る。

其一 南京の沿革

南京は上海の上流約四百吉米の地點にある。戰國時代には楚の金陵であり、三國時代では一代の智將吳の孫權が此に都して建業と呼び、東晋では建康と稱へ、世々南方の政治的都城となつてゐた。北支那が概ね北方異民族の住地であつたに對して南京は漢民族文化發展の基地となつてゐた。元末に一貧僧朱元璋が討蒙興漢の大旗を翳して明朝を此の地に建てたのは當然の措置と云ふべく、同朝の永樂帝が都を北京に遷した時之に對して舊都を南京と呼んだ。明末に鄭成功の南京攻略失敗を最後として全く清の勢力下に入り、政治的には異民族たる清朝の支配を受けても文化的には何等の影響を受けなかつた。清朝では江寧と呼び兩江總督の駐劄地であつた。一八四二

年の阿片戦争では廣東から北上して來た英國艦隊のため猛撃されて白旗を掲げて南京條約を結び、一八五三年長髮賊の亂には洪秀全の手に陥り其の居城たること十一年であつたが曾國藩の猛撃に會ひ奪回されて此の大亂は平らいだ。宣統三年（一九一一年）武昌に革命起るや南京は陥落して清朝滅び民國時代に入つた。此の時南京は全く革命軍の本據となり、北洋軍閥の基地たる北京と兩々相對した。其の後北方勢力下に陥つたが、一九二六年新體制を組織した國民黨は蔣介石の指揮下に北伐を開始し三民主義を奉ずる國民政府を樹て、一九二八年正式に南京を民國の首府と定め、爾來營々十年驚異的成果を擧げつゝ其の建設に當り、道路、官衙、軍事施設の完備等古都の面目を一新して遂に完全な一大近代都市の形態を備ふるに至つた。

人口約百萬、現在の城は明の太祖の時代に修築されたもので、城壁の周圍約十一里、十箇の城門あり、高さは十米から十五米、壁の厚さは上部で五米乃至十米下部で二十米乃至三十米あり、規模の大なること北京に次ぐ。城内は南部は比較的平坦であるが、西北は小山起伏し、東部には高山がある。其の内最も人目を引くものは紫金山である。古い歴史を有するだけに名所舊蹟が多い。

其二 南京攻略前の狀況

上海陥るや、崑山、蘇州の堅城を始めとし無錫、嘉興の險要相次いで陥落し、それに日本飛行機の頻々たる南京空襲により首府の人心動搖し不安が日に募るので、表面強がり云つてゐた國民政府も遂に居たゝまらず重慶に遷都を決定し、十一月二十日之を内外に發表した。其の内容の要は左の通りである。

「蘆溝橋事變發生以來、京津が陥落し戦争蔓延してより、國民政府は、日本の侵略厭くなきに鑑み、自衛のため抗戦するに決し、民衆は敵愾心に燃えて戦ひ、將士は奮戦して壯烈なる犠牲となつた。而して松滬の一

「蘆溝橋事變發生以來、京津が陥落し戦争蔓延してより、國民政府は、日本の侵略厭くなきに鑑み、自衛のため抗戦するに決し、民衆は敵愾心に燃えて戦ひ、將士は奮戦して壯烈なる犠牲となつた。而して松滬の隅では抗戦已に三箇月に亘り、日本の陸海空軍の攻撃に對し陣地は灰燼となるも、軍心は金石の如く、戰場に於ける勇氣と戦鬪の激烈とは、實に民族獨立の精神を明示するもので而して支那民族復興の基礎となるものである。

日本は更に暴威を揮ひ、兵を分けて西進し我が首都に迫る。察するに其の暴力により我に城下の盟を要求するならん。凡そ血氣あるものは寧ろ瓦全より玉碎を欲す。政府は全局を統一して長期抗戦の爲め本日重慶に移轉する。今後は最大の規模によりて持久の戦鬪を爲さんとす。中華民國は人多く地廣く物亦豊かなり、人皆必死の決心を備へて一丸となり、抗戦を繼續して國家民族生存獨立の目的を達するであらう云々。」

斯くて政府の各部は夫々移轉し、大本營、軍事機關のみ南京に踏み止まり之を死守することゝなつた。

遷都後の南京防備に就いては唐生智が防衛總司令となり約十萬の兵を以て之を守り、揚子江より進來する日本軍を阻止する爲めには、南京の下流烏龍山砲臺附近に多數のジャンクを沈めて此處を封鎖し、陸正面にありては、東方は江陰、常州を繋ぐ陣地を以て太湖以北よりする日本軍の進撃を防ぎ、西南は廣徳西方に強力なる陣地を構築して太湖以南よりする日本軍の進撃を防ぎ、又第二陣としては鎮江、句容の線に精銳部隊を配備して日本軍を防がんとした。而して唐生智は市内外人に避難を勸告し、焦土抗日を放言して虚勢を張つてゐた。

既にして日本軍は疾風迅雷の如く太湖の南北兩道より押し寄せ、今や四方より南京を取圍み、地上の銃砲聲、力強き軍靴の音、輕快なる鐵蹄の響きは空中のプロペラの響きと調和して豪壯なる南京陥落の前奏曲を奏するが如く、百萬將兵の意氣は天に冲し、近く紫金山を望んで南京一番乗りを競ひ、逸りに逸つてゐた。

蒋介石は十二月七日朝飛行機で宋美齡夫人及びドナルド顧問と共に南昌に都落ちした。

日本軍最高司令官松井大將は徒らに人命を損じ、あたから中國の首府を灰燼に歸せしむるを惜しみ、十二月九日南京防衛司令唐生智に對し二十四時間の期限をつけ十日正午迄に降伏するやう、投降勸告文を飛行機より投下して日本武士道の情けを示した。

勸告文全文

「日軍百萬既に江南を席卷せり、南京城は將に包圍の中にあり、戦局大勢より見れば今後の交戦は只百害あつて一利なし、惟ふに江寧の地は中國の舊都にして民國の首都なり、明の孝陵、中山陵等古跡名所蟠集し宛然東亞文化の精髓の感あり、日軍は抵抗者に對しては極めて峻烈にして寛恕せざるも無辜の民衆及び敵意なき中國軍隊に對しては寛大を以てし之を冒さず、東亞文化に至りては之を保護保存するの熱意あり、しかし貴軍にして交戦を繼續せんとするならば南京は勢ひ必ずや戦禍を免れ難し、しかして千載の文化を灰燼に歸し十年の經營は全く泡沫とならん、よつて本司令官は日本軍を代表し貴軍に勸告す、即ち南京城を和平裡に開放し、しかして左記の處置に出でよ。

大日本陸軍總司令官 松 井 石 根

本勸告に對する回答は十二月十日正午、中山路句容道上の歩哨線において受領すべし、もしも貴軍が司令官を代表する責任者を派遣する時は該處に於て本司令官代表者との間に南京城接收に關する必要の協定を遂ぐる準備あり、若しも該指定時間内に何等の回答に接し得ざれば日本軍は已むを得ず南京攻略を開始せん。」
勸告文は前記の如く情理を盡くしたものであつたが、敵軍は之に應ずる色なく、頑強な抵抗を續けるので、十二月十日午後一時日本軍は遂に總攻撃を實行するに決し、砲兵の砲撃、飛行機の爆撃と相俟つて全線一齊に進撃を開始した。

其三 南京城の攻撃

十二月十日南京總攻撃の命下るや、諸隊は一齊に攻撃前進を開始し、彼我空陸の銃砲爆聲は江南の天地を壓して一大市街戦を展開した。今之を左の區分に從ひ其の戦況を説くであらう。

- 一、南京城東正面の戦況
- 二、南京城東南正面の戦況
- 三、南京城南正面の戦況
- 四、南京上流長江沿岸の戦況
- 五、南京下流長江沿岸の戦況

其一 南京城東正面の戦況 十一月七日湯水鎮附近に達した部隊は同鎮並に湯山附近に在る敵を突破し九日夕には麒麟門（紫金山東方二里）より蒼波鎮に互る線に前進し、當面の敵に猛撃を加へ敵陣を突破して、十日午後には右翼堯北門より紫金山東方及び其の南方山麓附近に進出して依然敵に猛攻を加へた。

十一日に至り堯北門附近の敵を突破して紫金山頂を奪取し夕刻迄には玄武湖北端より紫金山西麓を経て中山門東側に互る線に進出して刻々南京壓迫の陣を進め、十二日夕右翼を以て和平門附近に進出して愈々城門突入の機を窺ひ、同夜即ち十三日午前三時二十分遂に中山門に突撃して之を占領し、日章旗を城壁高く掲げて萬歳を絶叫した。

中山門占據に次ぎ城門附近より勇躍突入した部隊は同門附近に在る軍事中樞機關を占據し、又南京城北方に迂回した部隊は下關に迫りて敵の退路を遮斷した。

此の南京東正面の戦に於て十三日迄に敵に與へた損害中敵の遺棄屍體約五千を下らず、又下關に於ては汽關車三、客車六、貨車三十八を鹵獲した。

其二 南京城東南正面の戦況 十二月六日以來淳化鎮附近の敵を攻撃中であつた部隊は八日午後遂に同地を突破して敵を猛追し其の主力は九日午後南京城東南城壁に沿ふクリークの線に進出した。

他の街道を分進した一部隊は九日早くも南京城東南に在る光華門前面に迫り、城壁上から猛射を浴せる敵軍最後の抵抗に對し悽壯極まる近迫戦鬪を續けてゐたが、十日午後五時決死的爆破が功を奏し、光華門の一部は破壊

されたので、時を移さず突入し城壁高く日章旗を翻へし、南京城一番乗りの名乗りを擧げた。

折柄西に沈む夕陽を浴びて一番乗りの勇士が力の限り左右に打振る日章旗は首都南京陥落の曲を奏でるタクト

されたので、時を移さず突入し城壁高く日章旗を翻へし、南京城一番乗りの名乗りを挙げた。

折柄西に沈む夕陽を浴びて一番乗りの勇士が力の限り左右に打振る日章旗は首都南京陥落の曲を奏でるタクトとなつて、萬歳の聲南京城を壓する中に此の豪壯雄大なる情景も薄暮の中にかすんで敵兵掃蕩の激戦の幕が切つて落された。

かくて續々と到着する後續部隊は、砲兵掩護の下に血戦死闘を続け銃剣相摩する所まで迫り十三日早朝光華門及び中山門の破壊口から城内に突入して頑敵を壓しつゝ漸次北方並に西方武定門に向ひ戦果を擴張して殘敵に最後の鐵槌を加へた。

其三 南京城南正面の戦況 十二月七日秣陵鎮附近の敵を撃破した部隊は八日には元武橋、谷里村に互る線に進出し、九日には敵を南京城に追ひつめて雨花臺南方の臺地より西善橋の線に進出した。

十日は晝間より夜にかけて攻撃を續行し十一日夕刻頃には雨花臺、安德門に互る線にまで前進し、十二日朝には同地を占領して其の北端に出で愈々城壁に對する攻撃となつた。

十二日正午頃には南京城門中最も堅固な中華門に對し決死的突撃を強行して之を占據し城壁高く日章旗を翻へし、續いて其の西方に於ても強攻を續け午後四時四十分城壁の西南角を占據し引き續き城内掃蕩に移り敵を北方に壓した。

尙ほ一部隊は揚子江沿岸に近く迂回して南京西側に進出し、十三日午前水西門を攻撃して城内に突入し同夕刻

には城内西北方の高地を占領した。

以上の如く日本軍は十二月十日午後五時には南京城東南方の光華門を陥れ、同十二日正午には南方の中華門を抜き、同夜三時二十分には東方の中山門を奪ひ各部隊は是等各門より競ひ突入し戦果を擴張しながら十三日夕刻頃までには城内の殘敵を掃蕩し終つた。

城内の敵は一時は頑強に抵抗したが、十一日夕刻頃から潰走を始め數十隻の船舶によつて揚子江上流の方へ退却を試みたが其の大部は日本軍の爲めに撃滅された。

斯くして南京城は陥つた。南京城壁を震撼した爆音銃砲聲は敵にとつては正に抗日亡國の弔鐘であつた。此の日江南の空澄み渡り日章旗は城頭高く夕陽に映じ日本軍の威風は長江一帯を壓した。

其四 南京上流長江沿岸の戦況 十二月四日水陽鎮を陥れた部隊は北進して丹陽湖を横ぎり、九日には當塗（太平）東方地區に進出し、十日黎明と共に攻撃を開始し周章狼狽する敵を驅逐して當塗城内に突入して之を占領した。

當塗は南京の西南約十五里揚子江の右岸に位し、南北支那交通の要地で、古來南京防禦の重鎮として著聞し、縣城の西南に揚子江防備の爲めの砲臺が築かれてゐる。元末に當り明の朱元璋が戦勝を博した所であり、又近くは清末の長髮賊の亂及び國民革命軍の北伐に攻略された所である。人口約二萬、城廓の周圍約一里半、今や此の地日本軍により占領せらる、是れ恰も南京の背後に劍を擬せられたに等しいものである。

當塗占領部隊は、常に奇襲を以て神出鬼没の行動を以て知られたもの、又もや該地占領後直ちに北進慈姑鎮附

近から突如揚子江を渡り對岸の楚の項羽自刎の地として有名な烏江附近に上陸し、敵を急襲して烏江を占領し、

當塗占領部隊は、常に奇襲を以て神出鬼没の行動を以て知られたもの、又もや該地占領後直ちに北進慈姑鎮附近から突如揚子江を渡り對岸の楚の項羽自刃の地として有名な烏江附近に上陸し、敵を急襲して烏江を占領し、息つく隙もなく省境を越えて江蘇省に進入し、十一日夜橋林鎮に達し少憩の後翌十二日未明同地を發して進撃し、同日夕江浦城に在る約五百の敵を粉碎し、十三日浦口驛並に其の北方約一里の浦口城を占領して南京に在る敵の退路を遮斷した。浦口は津浦鐵道（天津—浦口）の起點で南京の下關と相對し南北渡江の要地である。

尙ほ宣城方面より破竹の勢ひを以て前進し十二月七日灣沚鎮に進入した部隊は八日夕には南徒門附近に進出し、九日には其の先鋒を以て蕪湖東方に迫り、翌十日揚子江岸の要害たる同城に突入して之を占領するや直ちに北進し、十一日には大橋を陥れ十二日には慈姑鎮を通過して北進した。

以上の如く長江上流方面に進撃した兩軍は何れも破竹の勢ひを以て當塗、蕪湖の要地を占領して南京の南方退路を遮斷し、尙ほ勢ひに乗じ揚子江を渡り其の西岸を北進すること約三十里にして十二月十三日南京對岸の要驛浦口を攻略して敵の西北方退路をも遮斷した。

其五 南京下流長江沿岸の戦況 十二月八日鎮江を攻略した部隊は、江陰より來たる部隊の主力と合し、十一日揚子江の中州に在る焦山砲臺を占領し、十三日には七濠口附近に於て長江の敵前渡河を敢行し敵を壓して攻撃前進し、十四日には施家橋附近の敵を突破して、同日午後當面の要地揚州を占領し日章旗を掲げた。揚州は三國時代魏の曹丕が吳を討たんと兵を此の地に進めたが大江を望んで師を還し、東晋の世には桓温が築城して其の本

據となし、唐時代には支那第一の都會として榮え其の文化は花と咲き其の末期には地方の争亂を他處に歡樂境は不夜城を呈し特に美人の産地として著聞した。元代にはマルコ・ポーロが此の地に官に就き、明代には周圍一里半の城廓を築き、清末には長髮賊に占領され衰微するに至つた。爾後軍事上よりも水陸の便あるにより經濟的の重要性をもつに至つた。

之より先き十二月二日江陰要塞を占領した部隊は既説の如く長江南岸に沿ひ西進し、行く／＼圖山要塞、象山砲臺を陥れて鎮江に入り、十三日には南京北方の烏龍山砲臺を攻略して砲十八門を鹵獲し、更に十四日には南京北方一里に在る幕府山砲臺を占領して、南京入城の友軍と連絡し、然る後渡河して北進した。

陸軍の南京進撃と共に海軍も亦揚子江を溯江し、途中機雷、閉塞船、防塞等各種の障害を排除し沿岸の砲臺を砲撃しつゝ、南京陥落の日、即ち十二月十三日午後五時には艦隊は舳艫相銜んで南京の表玄關たる下關碼頭に進入して陸軍部隊と協力し、南京より揚子江を越えて北岸に逃亡する敵の敗殘兵に猛射を浴びせ殲滅的打撃を與へた。斯くて南京は十二月十三日午後十時完全に攻略されたのである。

南京城攻略に要した時日は總攻撃開始の十二月十日から同十三日まで僅々四日である。南京は支那の首都であるのみならず、其の要塞は抗日作戰計畫に基き民國二十四年（昭和十年）以來五千萬元の經費を以て現代式に増強せられた堅固なもので、しかも十萬の大兵を以て背水の陣を布いてゐたものである。

普通要塞戦に於ける攻撃軍は防禦軍の二倍乃至三倍の優勢を必要とされてゐる。然るに日本軍は敵よりも遙か

劣勢な兵力を以て僅々四日間に斯くも堅固な要塞を攻略した前例は世界戦史の上に未だ見ざる處である。今ま第一次世界大戦中、要塞の強度、守兵の素質等南京要塞と似寄つたもの二、三を選んで比較して見よう。

劣勢な兵力を以て僅々四日間に斯くも堅固な要塞を攻略した前例は世界戦史の上に未だ見ざる處である。今ま第一次世界大戦中、要塞の強度、守兵の素質等南京要塞と似寄つたもの二、三を選んで比較して見よう。

	リエージュ要塞	アントワープ	プルゼミスル	南 京
陥落日數	十五日	五十日	二十四日	四日
防禦兵力	約三萬	十萬	四萬	十萬
攻撃兵力	約十八萬	十五萬	十二萬	敵より寡少

之を見ても日本軍の威力の如何に優逸なるかを知ることが出來よう。此の戦に於て支那軍の捕虜及び遺棄屍體約六萬、日本軍の死傷約四千である。

其四 南京入城

敵首都南京の攻略成つて十二月十七日、南京攻略に参加せる陸海空各部隊の盛大なる南京入城式は行はれた。此の日天氣晴朗、紺碧の空澄み渡つて雲一つ浮ばず、平和の曙光が新戰場に漲つた。

陸海軍各部隊は午後一時、中山門より國民政府に至る南京第一の大通り兩側に整列し、光輝燦たる軍旗及び軍艦旗を捧げて威容長江の浪に映じ、紫金山の霜華一段の光を増す中を、朝香宮殿下を始め奉り松井陸軍司令官、長谷川支那方面艦隊司令長官は中山路に到着し歴史的入城式が開始された。松井、長谷川兩司令官はそれ／＼幕僚を従へて堂々閱兵を行へば陸海軍の航空部隊は大編隊を整へて南京の空を旋回して空中大分列式を行ひ、斯く

て殿下を始め奉り軍司令官以下陸海軍各部隊長は國民政府に入り午後二時政府正門に高く大日章旗が掲揚された。

次いで全將兵一同、東方遙か皇居を拜し奉り、松井軍司令官が渾身の感激をこめて「天皇陛下萬歳」を三唱すれば全將兵の唱和する萬歳の轟きは、故國へも届けとばかり此の餘韻遠く消ゆる時、誰か殉國の忠魂、護國の英靈皆此の中山門内に來つて此の盛儀に參列せよと心に念ぜざるものあるべき。

而して中支方面戦死者の陸海合同慰靈祭は風寒き十八日午後二時より南京故宮飛行場に於て嚴かに執行された。飛行場の中央に建てられた白木の靈標には「中支方面戦死者の靈標」の文字が尊き偉勳を示す中に悲しくも讀まれる。陸海軍部隊肅然と整列し「國の鎮め」の喇叭が響き渡るや嚴肅な祭主の玉串奉奠が執行され、最後に昇神の儀があつて同二時半悲しくも盛んなる式を終つた。

其五 南京攻略後の狀況

【其一 日本側】 南京攻略の報來るや、日本大本營に於ては當局談を發表して江南の華と散つた英靈に感謝と尊敬の至情を捧げ次に來るべき決意を明かにし、松井司令官亦今後軍の向ふ所を示した。又近衛總理大臣は十二月十四日聲明書を發して南京陥落の意義を明かにし、國民に對し持久戦を覺悟せよと警告した。其の要旨は左の通りである。

「さしもの南京が斯くの如く早く陥落したことは寧ろ意外な程である。本事變の當初に於て日本は出來るだ

け不擴大解決の方針を執つたので戦略的にはそれだけ日本に不利であつた。それにも拘はらず僅か數箇月にして北は黄河以北の大地域を席捲し南は江南一帶の要塞地帯を撃破した皇軍の威力に就いては事實が雄辯に

け不擴大解決の方針を執つたので戦略的にはそれだけ日本に不利であつた。それにも拘はらず僅か數箇月にして北は黃河以北の大地域を席捲し南は江南一帶の要塞地帯を擊破した皇軍の威力に就いては事實が雄辯に語つてゐる。日本の此の實力に對する誤斷は南京政府の致命的錯覺であつた。支那は宜しく從來の誤謬を訂正し此の上無用なる抵抗を止むべきである。支那はあれだけの軍隊を本來の使命の爲めに使はず抗日の爲めに動員したことは、見當外れであつて千仞の功を一簣に虧くの結果を招いたのである。

日本は一貫した方針に基き支那に猛反省を促がし日支提携の大道に還らんことを求めた。松井軍司令官の投降勸告も亦此の主旨に出たのである。然るに之に對し一顧も興へなかつたので已むなく總攻撃を敢行したのである。吾人は南京陥落の報に接して、勝利に喜ぶ前に、同文同種の五億民衆の救ふべからざる迷妄を悲しまざるを得ない。

頻りに南京死守を豪語した蔣介石は逸早く脱出し今猶長期抵抗を呼號してゐるが、近代戦争は軍事のみならず産業其の他の全般に亙る國家總動員の體制の上に行はれる。所謂ゲリラ戦術の効果を期待するなど、云ふのは例によつて共產黨の術中に陥るばかりである。國民政府は今日まで外交的にも實行動に於ても排日の極限を盡くした。しかも其の結果に對しては責任をとらず、首都を棄て政府を分散し、今や一個の地方軍閥に轉落して猶且つ反省の色なきに到りては日本も考へ直す外はない。

蓋し日本は抗日政權と軍隊とに對しては飽くまで膺懲の手を緩めぬが、支那一般民衆の生活に對しては關

心なきを得ない。凡そ人民の在る所政府なき能はず、其の政府たるや實體あるものでなければならぬ。然るに北京、天津、南京、上海の四大都市を放棄した國民政府なるものは實體なき影に等しいものである。

然らば日本は國民政府崩壊後に生ずる新政權と共に共存共榮の方策を講ずる外はなからう。今や世界は一の變革期である。此の世界の時運を正解するものならば親日的基礎の上に於てのみ支那の國家組織は成功するものであり、又斯かる新支那の出現によつて歐米諸國の東洋に於ける利益は初めて安全であるであらう。支那事變は東亞に於ける一個の悲劇であるが、此の種の悲劇を繰り返へさぬ爲めに、此の際日本は根本的手術を回避してはならぬ。南京陥落は此の意味から云へば全般的支那問題の序幕であつて、眞の持久戦はこれから始まると覺悟せねばならぬ。敢て國民の奮闘を望む云々。」

斯くの如く日本政府に於ては持久戦を覺悟し、更に新たな勇猛心を振起し舉國一致出帥目的達成に邁進することゝなつた。

【其二 支那側】 南京が完全に陥落して南京政權が遂に一地方政權に顛落してしまつたのを機會に、多年南京政府や地方軍閥や浙江財閥其他によつて搾取劫掠を受けて來た全支の民衆は茲に更生の黎明を迎へると共に、悠久なる和平を建立せんと、十二月十四日午前十時を期して由緒深き北京の居仁堂に於て「中華民國臨時政府」樹立の式典が舉行されたが、其の宣言の大要左の如し。

「國民黨政權を竊擧して民衆を瞞罔する事十有餘年、災禍頻りに臻り、稅斂苛細、内に民生を剝奪して虐政

相踵ぎ、時に大地日に崩れ反覆して共黨を容納す。倒行逆施社稷の將に顛覆することを顧みず、猶且つ恬として恥を知らず、遂に鬩を隣邦に構へ同種相食む、口に焦土抗戦を呼號するも百戰百敗數月を経ずして國都

一國民黨政權を竊擧して民衆を瞞罔する事十有餘年、災禍頻りに臻り、稅斂苛細、内に民生を剝奪して虐政

相踵ぎ、時に大地日に崩れ反覆して共黨を容納す。倒行逆施社稷の將に顛覆することを顧みず、猶且つ恬として恥を知らず、遂に讐を隣邦に構へ同種相食む、口に焦土抗戦を呼號するも百戰百敗數月を経ずして國都を喪ひ、省市の半數を失ふ、戰備十年にして如何して斯くも脆きや。

頻年國防を名に託して消耗せし金錢幾十億に達するや測り知るべからず。若し正途に用ふれば斯かる摧枯拉朽に至らざるべし。然も其の大部分を著服せしこと審劾を俟たざるも明かなり。彼等は廉潔を標榜すれど魅魍魎の徒、要路に盤踞し綱紀を蕩亂し加ふるに公論を撲滅し、黑白を顛倒し、正人を狙殺せしこと數ふべからず。今や首都既に喪ひて倉皇として逃遁し自ら收拾すること能はず。同胞の生命何處にか託せんや。

茲に同人相謀りて中華民國二十六年十二月十四日北京に於て臨時政府を樹立す。

志は民主國家を回復し、汚穢なる黨治を洗滌するにあり、絶対に共產主義を排除するにあり、東亞の道義を發揚し世界友邦との敦睦を厚ふるにあり。萬惡の國民政府宜しく容共の非を悟り、民衆を瞞せし罪を陳謝し、又引責下野して人民に政權を還すべし。若し頑として大言壯語なほ止めずして其の罪を被はんか、陸沈の禍は許容すべからず。

國民黨の政策悉く誤りなるも、中には老成碩望の士に乏しからず、吾等と心を同ふするもの光臨せられなば、共に大局支持に當らんとす。天下の公器は一黨一派の壟斷を許さず、區々たる心は天日に誓ふべし。吾等は世變に飽經し、垂暮の年にて何等の企圖なし、但し中國人として駭僧の手により祖國の衰滅するを見る

に忍びず、故に暫し立ち上りて大難を冒し敢て其の所信を遂行せんとする者なり。故に將來に於いて國家の政治軌道に復歸するの日來れば吾等は相携へて郷里に歸るべく茲に宣言す。」

右の新政府は取敢へず過渡的に臨時政府とし議政、行政、司法の三委員會を以て組織し、湯爾和は議政、王克敏は行政、董康は司法委員長となり、政府主席は當分空席とし近き將來に於て正式政府の編成と共に設定することゝした。而して此の臨時政府の成立と共に北支各地にあつた過渡的政權は總て新政權に合流することになつた。

又臨時政府と表裏一體となり其の理想實現に邁進せんとする新民會なるものが十二月二十四日結成せられ、北京に盛大なる發會式が舉行せられた。其の宣言の要旨は、

「戦禍全土に漲り社稷將に滅びんとす、一に之れ國民政府の罪なり。私閥比周して國事を擅にすること十有餘年、稅政百出、内外に其の信を失す、濫りに于戈を交へ國土危殆に瀕す、之偏に黨部の責なり。昨是今變、諸政機を逸し失策節度無し、徒らに容共媚外、國を驅て焦土と化し無辜の幾千萬同胞の生命を損傷し幾百億の財帑を消耗し中華五千年の文化を煙滅するも恬として悔なきに似たり。

今や蔣宋の門閥獨り存して四億の民生茲に危ふし、之誠に中華民衆蹶起の秋なり。即ち茲に新政權の樹立を見、吾人相奮勵提携し以て新政權に協力し祖國を危急より救ひ民生を安んぜん、之現代中華民衆共同の使命なり。よろしく衆議を竭し民力を傾盡して狂瀾を既倒に回す、それ國は道を履みて昌え、人は道を得て信和す、先づ東方の文化道徳を昂揚し、先哲の遺訓を顯彰し、進んで國共兩黨の妄想邪説を掃滅せん、新民に

諮り以て民意を暢達し地産を開發して民生を安んぜざるべからず。本會は新政權とは表裏一體にして先づ之を護持し反共戦線の闘士となり民力の函養をつとめ更て北隣共榮の實現を冀進し以て世界の太平に貢獻す

和す、先づ東方の文化道徳を昂揚し、先哲の遺訓を顯彰し、進んで國共兩黨の妄想邪説を掃滅せん、新民に

諮り以て民意を暢達し地産を開發して民生を安んぜざるべからず。本會は新政權とは表裏一體にして先づ之を護持し反共戦線の闘士となり民力の涵養につとめ更に比隣共榮の實現に邁進し以て世界の大平和に貢獻するところあらんとす。天下同憂の士來つて本會に加入せよ。」

以上の如く南京攻略は日本の對支戦略上に於ける偉大なる貢獻であつたと共に日本政府並に支那政權に與へた影響頗る大なるものがあつた。

其六 評 論

【日本軍に就いて】 南京城の攻撃は理想的と云ふを適當とせん。大體に於て南京の東、東南、南の三面に各一本の銳鋒を突き付けて敵の面、喉を制し、他の一本をば東北方より突き出して敵の左胴を狙ひ、他の二本をば西方から遠廻しに敵の右胴と背の半分を脅かし、以て敵を困迷せしめて致命傷を與へた戦法であつた。

此の如く殆んど理想的に戦線の運ばれて行つたのは其の基礎配置が善かつたからである。即ち上海の攻略終るや、其の攻撃軍と新たに杭州灣に上陸した軍とが地形上自然に太湖の北と南に分かれて前進したのが、道路網の關係上、丁度都合よく前のやうに六本の槍となつて敵を半ば包圍的に攻撃し得たのである。即ち幅約四十里の大網を押し進めて南京城に籠つてゐる鬼を捕へやうとした形であつた。

此に一つの研究問題がある、それは南京攻撃は所謂包圍作戦であつたか、どうかと云ふことである。敵の右方當塗、蕪湖方面に突き出た二本の槍が揚子江の對岸に渡つて南京の後方に廻つた所から見れば包圍と云ふことも

出来ようが、此の時は既に南京の敵が崩壊した後であつたから、此の包圍行動が南京城の攻撃に直接貢献したと云ふよりは寧ろ間接的な役目を果たしたと云ふを適當とせん。それで學問上では此の行動を包圍と云はずに戰略的迂回と云ふを至當とする。

日本軍は前述の如く上流の當塗、蕪湖方面から一隊を揚子江の左岸に分進せしめたと同様、下流の鎮江方面からも左岸に一隊を分進せしめ兩々相俟つて南京の背後を遮斷控制し然る後正面から南京を攻撃して敵を殲滅しようとするのであれば、それこそ純然たる南京包圍作戰と云ひ得るのであるが、日本軍の作戰は左様ではなく、鎮江方面からは部隊を分進せしめず、蕪湖方面からは迂回隊を進めた位であつたから、南京攻撃は學問上の包圍作戰だと云ふことが出来ない。然るに世に南京包圍作戰大勝利云々と稱する者あるにより、聊か學理的包圍論を挿んだ譯である。但し南京攻略後長江左岸津浦線方面に兵を進めた。

包圍攻撃は最優最良の戦法ではあるが、之が爲めには多くの兵力と時間とを要する。當時の状況に於ては上海より約八十里乃至百里の猛追撃を續行して敵を南京に追ひ込んだのであれば、此の勢ひに乗じ一刻の猶豫も與へず、一氣に南京に突入するのが、戦法の最も妙なるもので、茲に所謂戦の「機」なるものがある。日本軍は此の「機」を捉へて城壁に「體當り」して奇勝を博したのである。若しも此の際包圍陣形を取りたる上、徐ろに攻撃をなさんと、時間を取り、兵力を分散したりしたならば、それこそ學問に捉はれた戦法であつて徒らに戦機を失し、縱令南京を陥落し得たとするも多くの時間と大なる犠牲を拂はねばならなかつたであらう。之を思ふと日本

軍の此の一氣呵成的の南京攻撃は「機の戦術」の範例と云ひ得る。

【支那軍に就いて】 支那軍が南京死守の愚な作戰を取つたことに就いては前節にも論じた所であるが、茲には

軍の此の一氣呵成的の南京攻撃は「機の戦術」の範例と云ひ得る。

【支那軍に就いて】 支那軍が南京死守の愚な作戦を取つたことに就いては前節にも論じた所であるが、茲には更に其の根本心理に就き述べて見る。

支那人が城廓依存の習性を有する民族であることは常に述べる所であるが、殊に南京城に就いては一層其の執著心が強く寧ろ信仰的であるとも云へる。最も南京城は阿片戦争の時には英國艦隊に降り、長髮賊の亂には陥つたとは云へ、昔し三國時代吳の首府となりてより以來天下の要關とされた所である。東方、南方には防禦に適當な高地丘陵を控へ、北と西には揚子江の險がありて、百萬の敵を拒守し得るとの信念が彼等支那人の心魂に傳統されて來てゐる。故に守將唐生智が十萬を以て日本軍（彼れより寡兵）を殲滅し呉れんと豪語したのは無理のないことである。

然るに彼等の恃む山と云ひ川と云ひ城壁と云ふものは發達した現代の兵器殊に立體戦術に對しては殆んど其の效力を失ひ、却つて山は攻者の間接射撃に利用され、川は飛行機の夜間に於ける好目標となり、城壁は砲彈の破擻により守兵を損すると云ふ逆効果を現はす有様であるのに、彼等は今尙ほ昔の夢を見て此の「天險」と云ふ迷信に捉はれた所に敗因があつた。

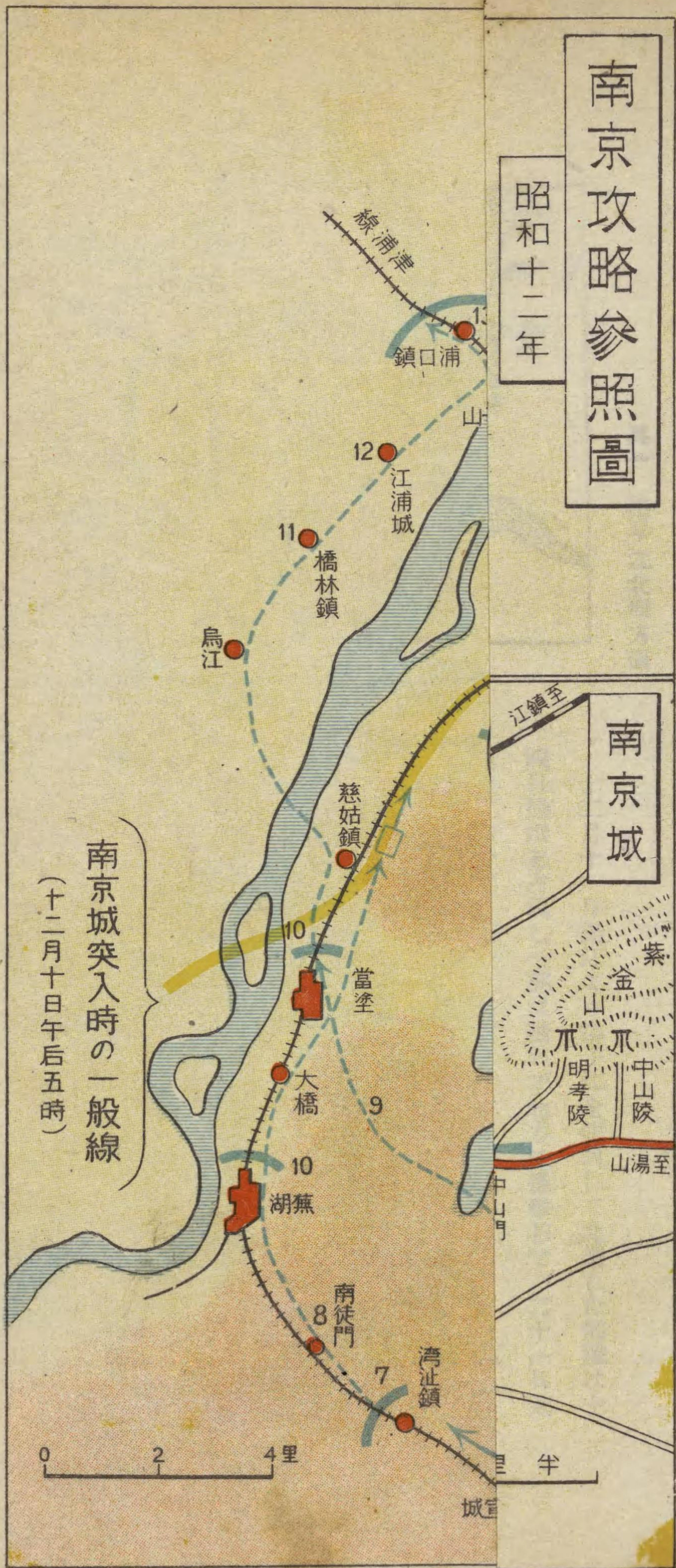
北支戦線に於ける居庸關の陥落、雁門關、娘子關の崩潰、黄河の渡河、此の方面に於ては上海のトーチカ陣地の敗壞、皆此の陣地依存の弊に因る。昔より陥らざるの城廓はない、近くは世界第一の大要塞巴里も一再ならず

陥落し、遠くはバビロンの都、アテネの丘、カルタゴの城、君府の險皆陥つてゐる。三國時代、一代の英雄呉の孫權は其の時代の兵器と戦法とに鑑み、此の山と河の險を利用して南京城を難攻不落の地位に在らしめたが、現代は最早それを許さないのである。

も一つ支那軍の戰術的誤解は城廓を一つの陣地と思ひ込んでゐたことである。彼等は南京城廓をマジノ線或はジックフリード線位に思つてゐたらしい。之は頓でもない謬りである。城廓は一線陣地であり、マジノ線始めジックフリード線或はスターリン線にしる現代の陣地は數線に互り奥行のあるものである。一線陣地の城壁は一點破るれば、それが忽ち致命傷となるのであるが、數線陣地の現代式ではさうではない。故に南京に於ては光華門の一點に穴が明くと、忽ちにして中山門、中華門、水西門と云ふ風に互解的に崩潰して仕舞つたのである。城廓は如何に堅固と雖も現代兵器に對しては到底破摧は免かれ得ない。支那の城廓は大抵は一線式であつて日本の昔の城の如く二の丸、三の丸、本丸と云ふやうな設備はないやうだ。萬里の長城は二線、三線の所も部分的にはあるが、大體の經始は一線式である。しかも此の一線に全努力を拂つてゐる。之が支那人の特性でもあらうか。故に支那人との戦に於て此の「一戦」で打撃を與へんか、其餘の戦勢は竹を割るが如くに進展して行くやうである。斯う云ふ點から考察すると、上海戦の打撃は南京を陥らしめたと云ひ得るのである。此の反對に若しも最初の一戦に彼に負けんか、彼は石を山上より轉落するの勢ひを以て乗り懸かつて來るのである。支那人との戦には此の呼吸を呑み込んで懸かることが肝要である。

南京攻路参照圖

昭和十二年

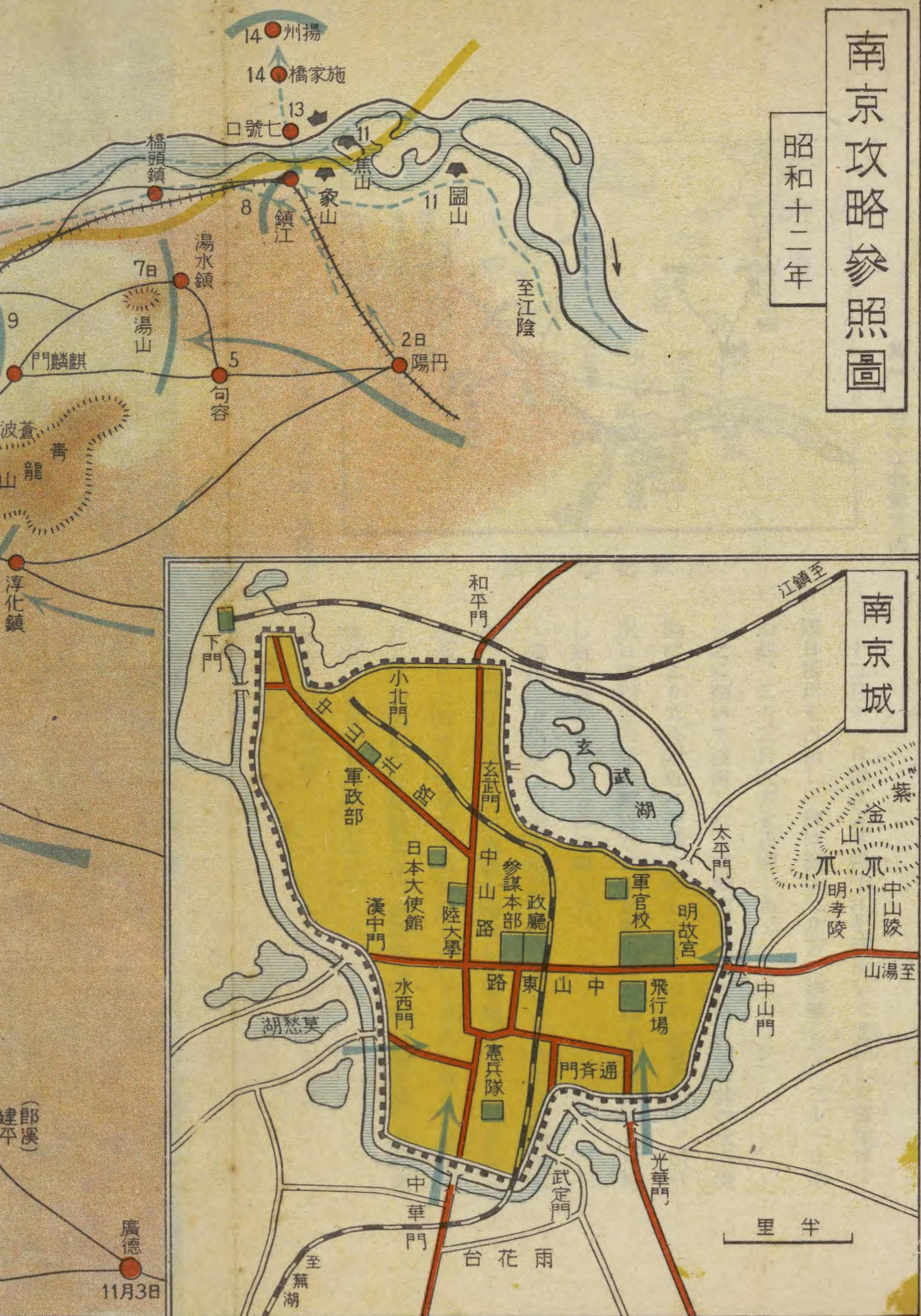


南京城突入時の一般線
 (十二月十日午后五時)

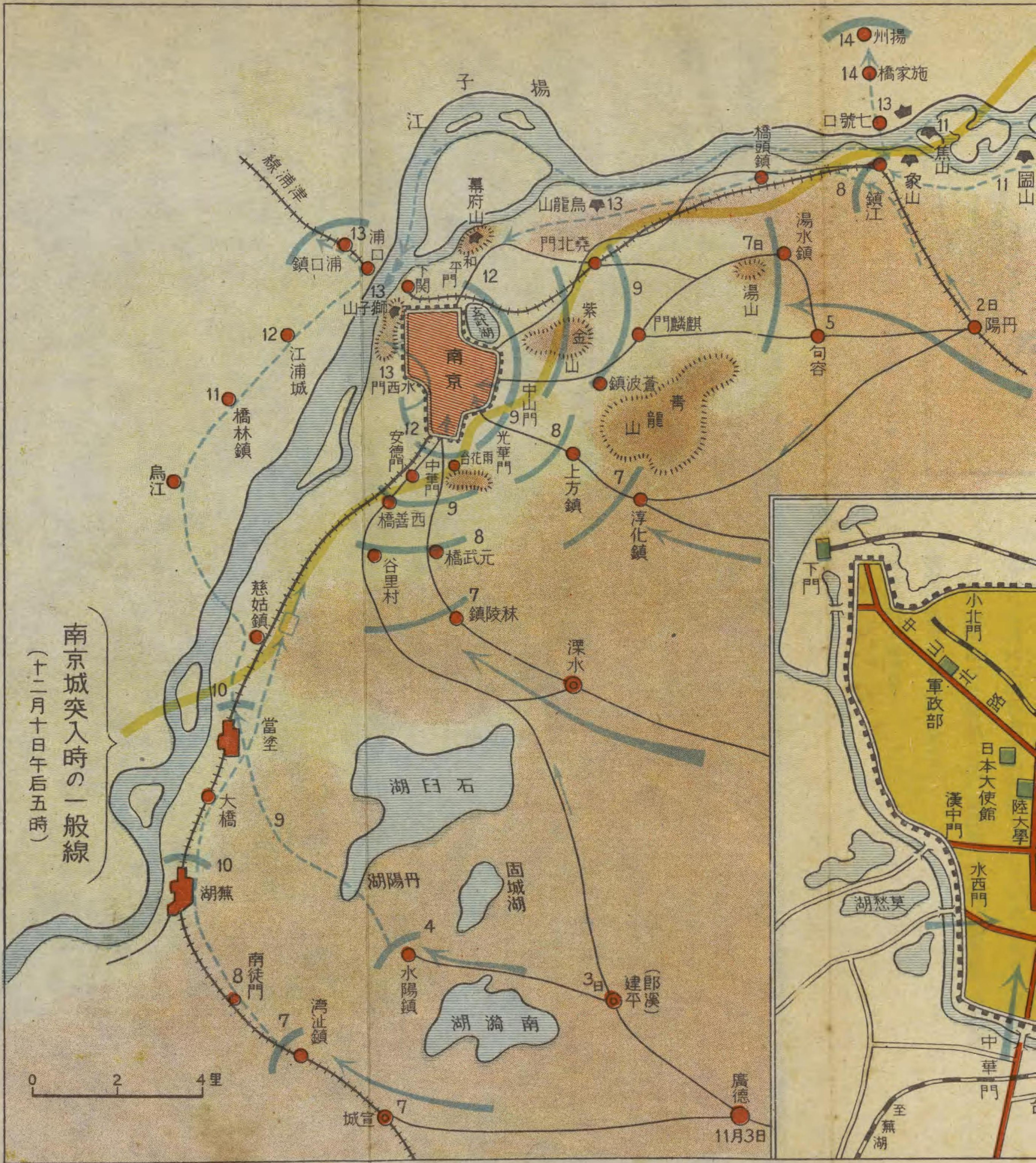
此の呼吸を呑み込んで懸かることが肝要である。

南京攻路参照圖

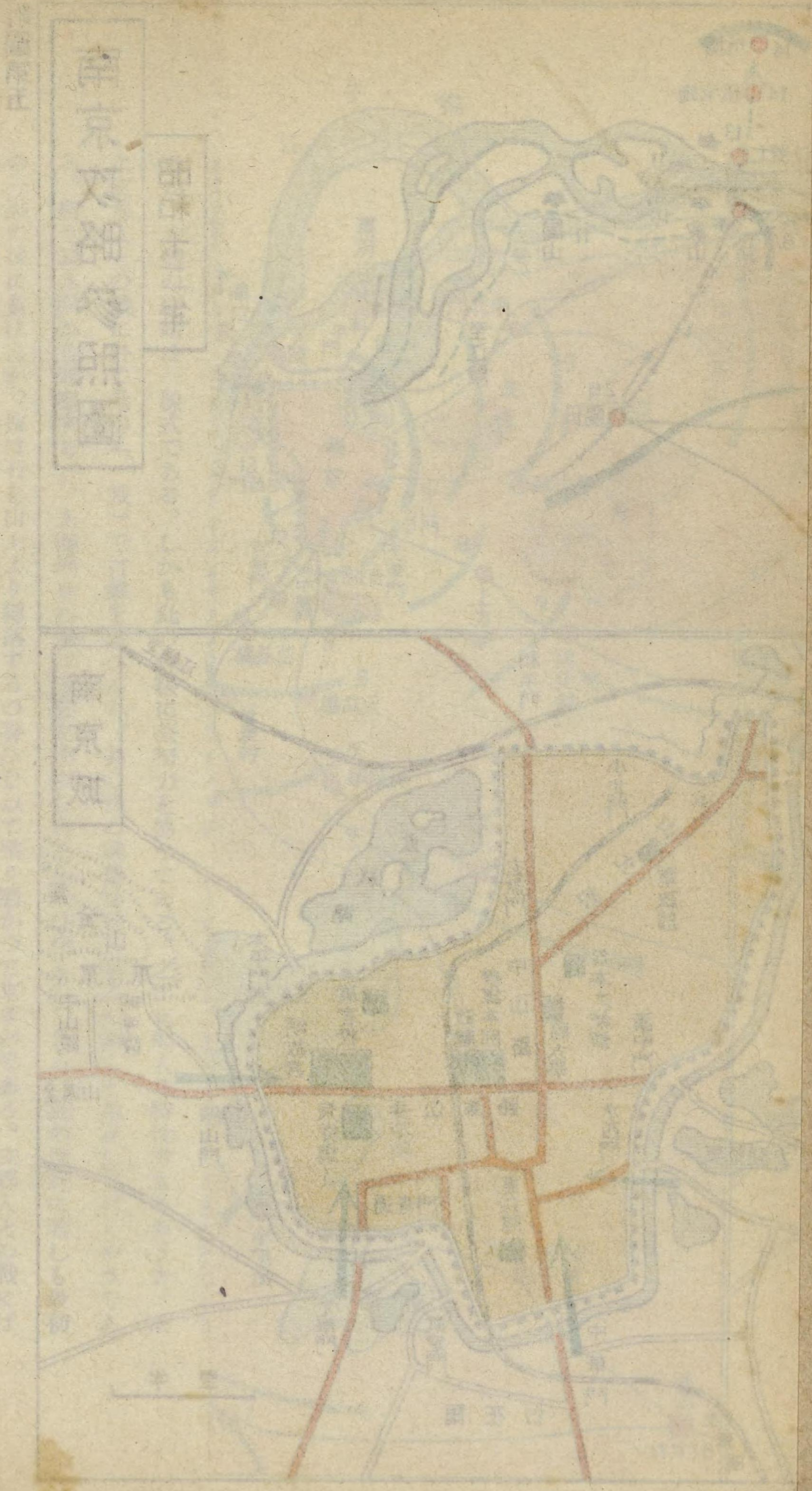
昭和十二年



る。斯う云ふ點から考察すると、上海戰の打撃は南京を陥らしめたと云ひ得るのである。此の反對に若しも最初の一戰に彼に負けんか、彼は石を山上より轉落するの勢ひを以て乗り懸かつて來るのである。支那人との戰には此の呼吸を呑み込んで懸かることが肝要である。

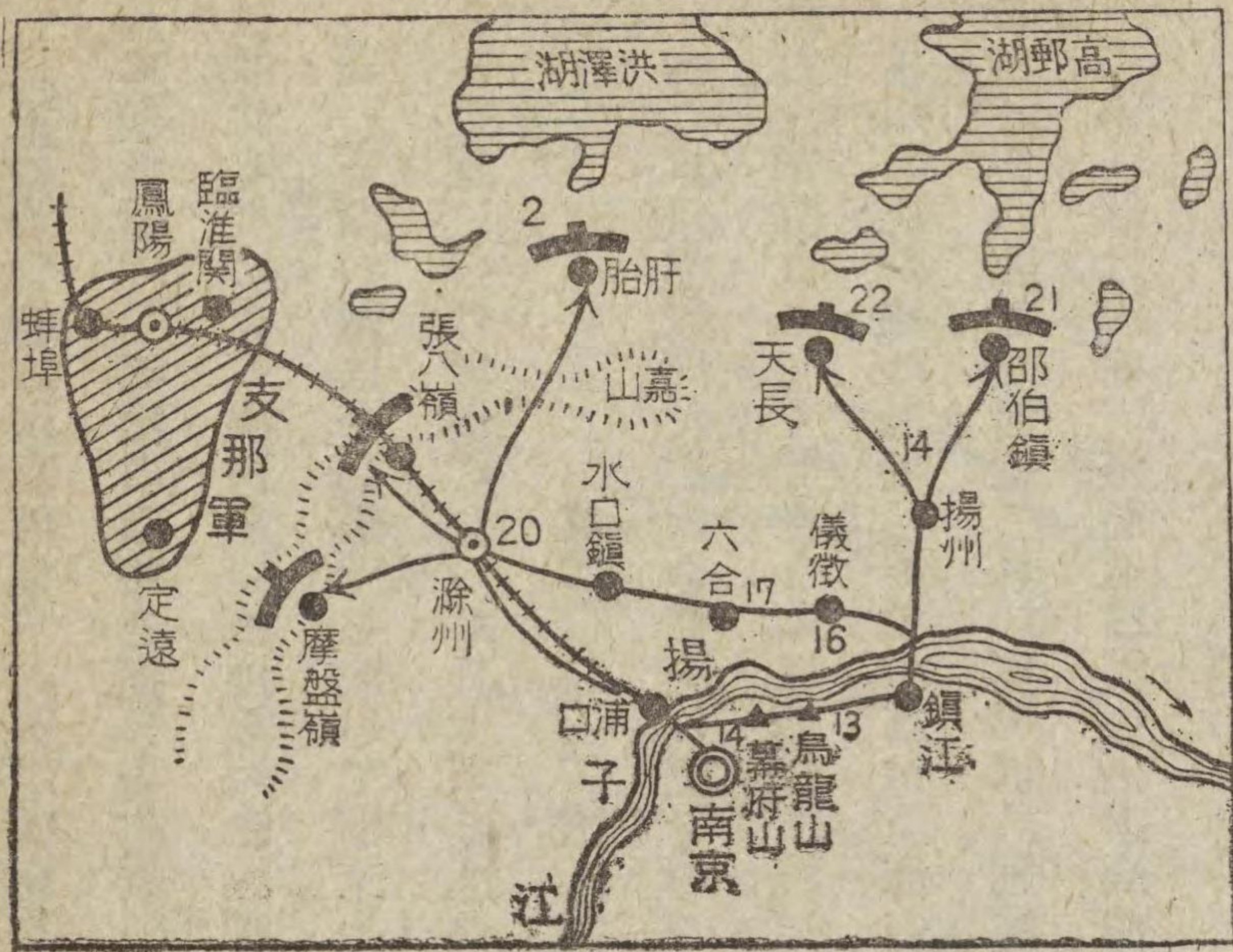


第四節 南京北岸及び杭州方面の戦



第四節 南京北岸及び杭州方面の戦

其一 揚子江北岸方面



南京北岸の戦

十二月十一日鎮江より揚子江を渡河して北進した部隊は十四日揚州を占領し一部は續いて北方に進撃して、二十一日邵伯鎮、二十二日天長を占領した。

之に續いて渡河したる部隊は十六日儀徵に達し其の水上機動により六合附近に奇襲上陸して十七日六合を占領し、同日水口鎮附近の敵を撃破し二十日遂に津浦線上の滁洲城を攻略し敵を南方及び北方に追撃した。

鎮江より揚子江右岸を西進した部隊は十三日には烏龍山砲臺、十四日には幕府山砲臺を略取して下關に到りたる後渡河北進して滁洲に向ひ前項の部隊と合して附近の敵を攻撃し一月二日頃迄に右は肝胎より、津浦線上の張八嶺を経て左は磨盤嶺に互る間を占領した。

以上の如く右方は邵伯鎮、天長、肝胎等の要地を占領して當面に在る湖沼地帯を抑へ、左方は津浦線を中心として張八嶺、磨盤山の山路を扼して南京の北部地域の安全を圖り以て來るべき徐州の春季作戰に備へんとする畫策は水も洩らさぬ周到を極めたものである。

此の方面の敵は手兵數千を率ゐて南京を脱出した唐生智の指揮に屬するもので津浦線上の臨淮關、鳳陽、蚌埠及び定遠一帯の地域に在つて日本軍の進撃を阻止せんとしてゐた。

其二 杭州方面

南京攻略部隊は戈を收め征衣の塵を拂つて來る可き飛躍に備へて英氣を養つてゐたが、其の一部たる蕪湖を攻略した部隊は息つく間もなく反轉して杭州方面に進發した。

杭州は杭州灣に上陸した日本軍が上海の敗敵を急追するに忙はしく暫し杭州に手を觸れずに西進したものであるが、其の間杭州附近にある支那軍は劉建緒の指揮により大凡次の如く二線に陣地を構築してゐた。

第一線は海甯、洛邑及び其の西方高地

第二線は臨平、黃湖鎮の線

其の守備兵力は約五個師團であるが、杭州城内には約一聯隊あつた。

之に對し日本軍は三方面より包圍的に攻撃し一舉に之を錢塘江に陥擠して殲滅せんと圖つた。

即ち前述せる蕪湖方面より東進せる諸隊は十二月二十一、二日を以て孝豊、安吉の線に達し少數の敵を驅逐し

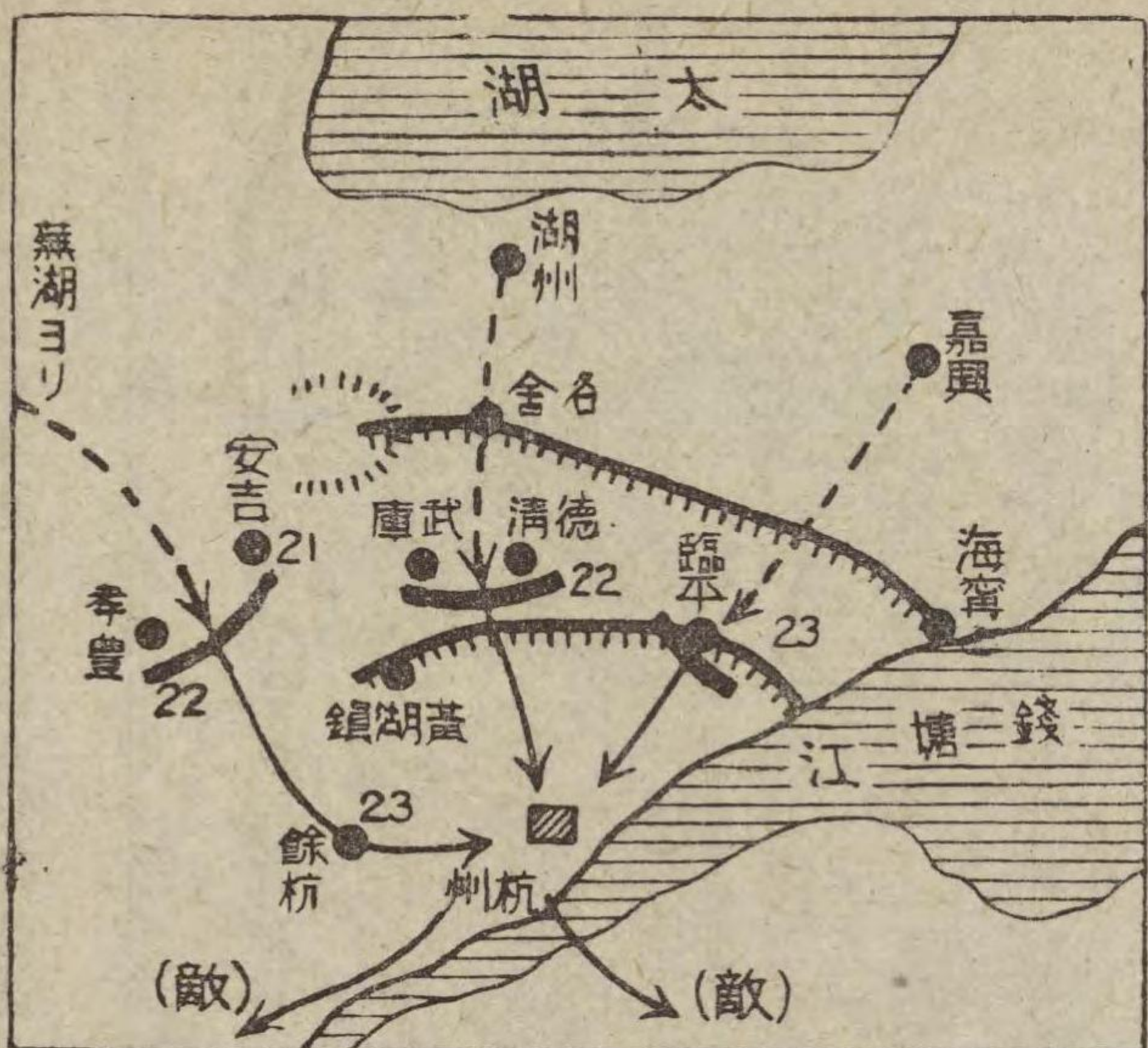
て二十三日杭州に迫り、

又湖州（吳興）より南下せる部隊は二十二日武庫、德清の線を占領して杭州の北方に向ひ、

て二十三日杭州に迫り、

又湖州（吳興）より南下せる部隊は二十二日武庫、徳清の線を占領して杭州の北方に向ひ、

又他の一隊は滬杭甬鐵道に沿ひ嘉興方面より西進し臨平を経て杭州の東方に向ひ、



杭州の略攻

(日四廿月二十)

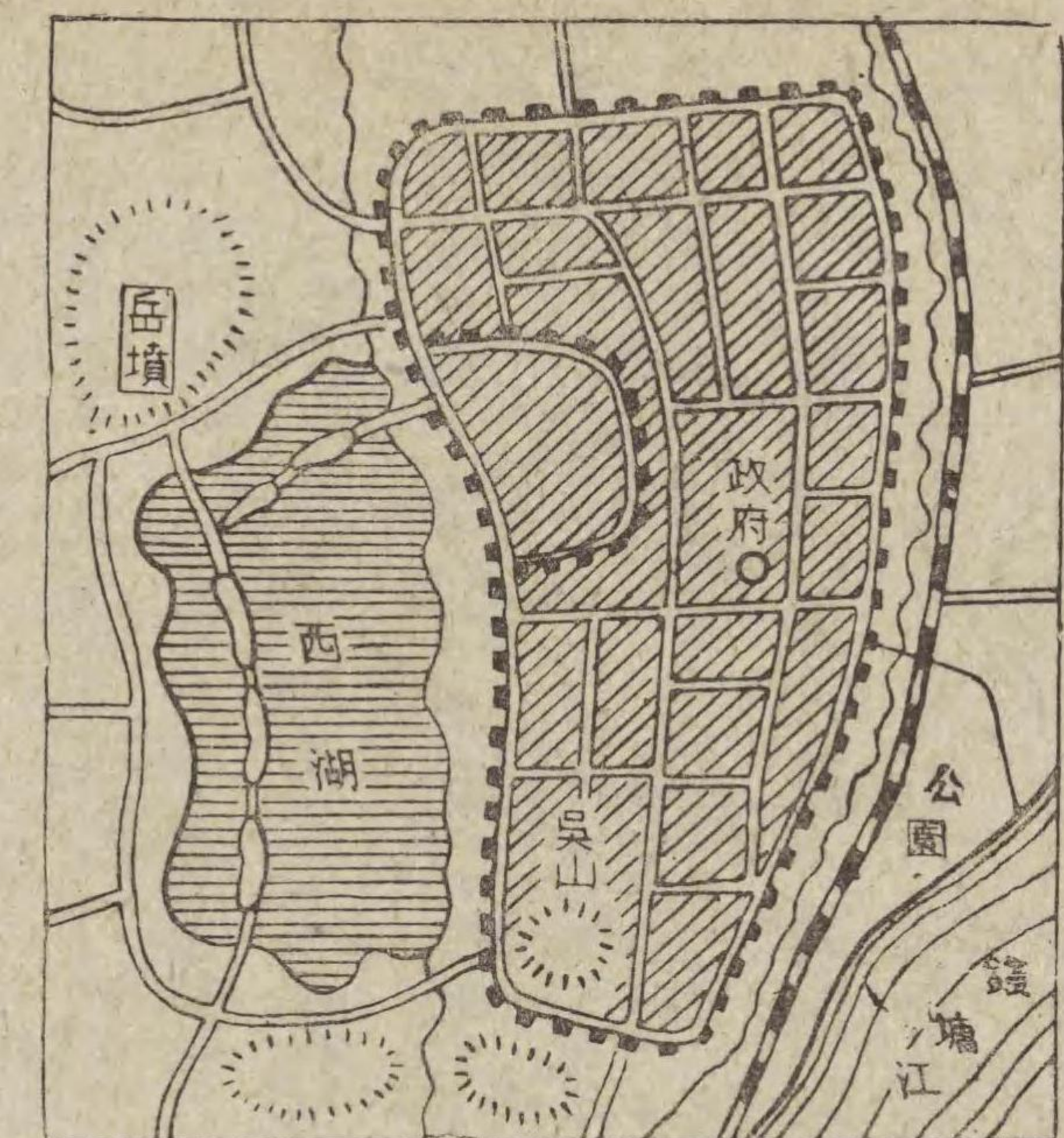
斯くて杭州は三方面より日本軍の包圍する所となつたが、敵は大動搖を來たし全く戰意を喪ひ脆くも錢塘江を渡河し、對岸地區を西南方に向ひ潰走した。日本軍は急追して二十四日朝杭州城を攻略し一部を以て飛行場を占領し、翌二十五日堂々入城式を行つた。此の戰に於ける鹵獲品の主なるものは砲十七門であつた。

杭州は錢塘江及び杭州灣を控へ内外交通上地理的好條件に恵まれ、晋、隋、唐時代には外國貿易港として繁榮し、宋の南遷後其の首都となり一時は人口百五十萬を算し、宋代後期の爛熟文化の中心地となり、マルコ・ポーロなどは世界第一の大都會として歐州に紹介した程である。元代に至り衰へ、明代には海賊防禦の中心として聞えたと過ぎず。上海の興隆後は全く貿易港としての價値を失ひ、又長髮賊の兵燹を被つて益々荒廢した。されど國內的に重要都市

たるには變りがない。城廓の周圍約六里、人口約三十萬ある。

古來日本と深き交渉を有したが、十數年來抗日運動の中心地となり、又空軍の教育建設地であつたが、前の上海事變の際は日本軍飛行機の爆撃に遇つて殆んど全滅した。鐵道、自動車道、航空路、水路の一大中心地である。

今之を占領することによつて蕪湖、杭州を連ぬる線以東は確實に日本軍の把握下に歸したのである。



杭州城概圖

揚子江を渡り都を此の杭州に遷し臨安府と命名した。爾後南宋と稱せらる。此の當時の狀は誠に我が吉野朝の悲史よりも、より以上の悲痛事であり、漢族に取つては何んとしても忘れられぬ悲慘事であつたらう。

此の時南宋に二派あり、宰相秦檜等は平和派であり、青壯の將岳飛は主戦派の急先鋒であつた。岳飛は屢々出

で、金兵を破り將に黄河を北に渡らんとする勢ひを示した。然るに平和派の秦檜等は岳飛を召還し事を構へて之を彈劾し獄に投じて之を殺して了つた、時に岳飛年三十九。而して秦檜は盡く准北の地を金に與へて屈辱平和を

此の時南宋に二派あり。宰相秦檜等は平和派であり、青壯の將岳飛は主戰派の急先鋒であつた。岳飛は屢々出で、金兵を破り將に黄河を北に渡らんとする勢ひを示した。然るに平和派の秦檜等は岳飛を召還し事を構へて之を弾劾し獄に投じて之を殺して了つた、時に岳飛年三十九。而して秦檜は盡く淮北の地を金に與へて屈辱平和を結んだのである。

宋朝はもと／＼崇文卑武の國であつて其の結果が外侮を受けるに至つたのである。岳飛は之を痛憤し、「文臣不愛錢、武臣不怕死」を國運挽回の要諦なりとして天子に奏聞し、而して彼は背に盡忠報國の四大字を書し、且つ敵國金を討つべく、幾多熱烈なる愛國的詩文を草して國民の士氣を鼓舞するに力めた。

天は正し、岳飛は殺されたりと雖も彼れの誠忠は其の後報いられて杭州西湖畔に一大銅像として現はれ、其の傍に「精忠報國」の四大字の碑が建てられた。之が有名な岳墳で忠臣岳飛の墓である。而して其の墓畔には鐵鎖に繋がれてゐる秦檜の鐵像があつて岳飛の銅像が之を睥睨してゐる。漢人は銅を尊び鐵を卑む。先年馬占山が北滿で日本軍に抗して英雄と謠はれ、間もなく滿州國に歸順して罵られたことがある。其の時漢人は「前の馬占山は萬人推賞す、銅像を鑄て以て芳を百世に流すべし、後の馬占山は萬人唾棄す、鐵像を鑄て以て臭を萬年に遺すべし」と云つた。秦檜の鐵像も此の心持から作られたものである。

岳飛の北狄打倒に關する愛國的熱情の詩文は大いに漢民族をして異種族に對する反感を昂めしめた。然し南宋の政策は、極端な以夷征夷であつたから、百の岳飛があつても國を保ち得なかつたのである。南宋は金國を憎むの餘り蒙古を利用したが、後には其の蒙古即ち元の爲めに殲滅的打撃を受けて悲慘なる滅亡を遂げた。

今や蒋介石一派は岳飛の愛國詩を其の儘、排日抗日思想を煽る具に利用して國民の青年層に刺戟を與へて之を踊らせてゐる。しかも彼は南宋が蒙古を利用した以上に極端に、蘇聯其の他の強敵を前門からも後門からも招き入れて善隣日本を苦しめんと圖つてゐる。

皇國日本は遼でもなく金でもなく又蒙古でもなく、其の正義に於て其の國力に於て比較にならぬものがある。支那國民は岳飛の愛國的慷慨を學ぶは可なりとするも自己を反省し、世界の犬勢を觀破し、亡國南宋の誤れる以夷征夷の政策を辿る蒋介石一黨の盲目的行動を打破すべきである。然らずんば支那全土が、南宋以上の憂き目を見るであらう。

杭州に吳山、西湖の名勝がある。吳山は昔の吳國に縁あり西湖は一に西子湖とも云ふ。南宋が都を此の地に移した後、岳飛の忠も文天祥の誠も其の甲斐なく、上下皆文弱に趨り國難をも忘れて長夜の宴を此の湖畔に續けて遂に國を失ふに至つたことが、恰も昔の吳王夫差が西施（西子）に溺れて越王勾踐に滅ぼさるゝに至つたのと軌を一にすると云ふ所から西子湖の名が興へられたと云はれてゐる。當時人々は、「西子亡吳西湖亡宋」と歌つた。今や支那中華民國は蒋介石と其の姻戚宋一門によつて動かされてゐる。宋家の三女宋慶齡、宋慶齡、宋美齡の三齡女史、姓は宋であり、其の故郷が亡宋に縁の深い浙江省であれば、「西子亡吳、西湖亡宋、宋女亡華」でなければ幸である。而して三宋女のため後人が鐵像を造ることがなかつたら尙ほ更仕合せである。

丙 海軍の行動

北支に事變勃發するや、日本海軍は政府の事件不擴大の方針に基きて善處し其の優勢なる海軍力を以て黄海、支那海の廣漠なる海面を制壓すると共に、陸軍部隊と協力して事件の局地解決に努め、又艦隊の一部を以て陸軍の輸送を援護し、特に事件の中、南支に波及するを防ぐため、警備上遺憾なきやう一層警戒を嚴にした。

然るに事變の餘波が遂に中支、南支に波及するや海軍は豫ての計畫に従ひ各地居留民の收容護衛に任じ約二千數百名の邦人の無事引揚を終つた。

八月九日上海に大山中尉の虐殺事件起るや、事海軍に關するを以て慎重なる交渉をなすと共に警備を嚴にしてゐたが、遂に敵からの挑戦により八月十三日夕刻から、戦闘を開始し、上海陸戦隊が主として之に任じ寡以て衆に當り克く陣地を堅守した。此の時支那飛行機は盲爆撃をするので日本艦載機は勇敢に應戦して初陣劈頭に敵機三機を屠つた。

【海軍機の全支配空】 八月十四日長谷川第三艦隊司令長官は自衛上必要なる手段を執る旨を聲明し、直ちに海軍航空部隊を以て杭州及び廣徳の飛行場を襲ひ航空史上未だ曾つて見ざる渡洋爆撃の偉勳を樹て、翌十五日には敵の首都南京及び其の空軍根據地南昌を襲ひ敵の心膽を寒からしめた。爾來空軍は晝夜を分かたず荒天豪雨を冒

し上海附近は勿論支那内地深く敵空軍根據地を衝き或は爆撃に或は空中戦闘に赫々たる戦果を収め、やがては中南支一帯の制空権を獲て、縦横無盡の活躍を續けた。

其の空襲の主なるものは八月十四日の杭州、廣徳方面に於ける敵機二十餘機の撃破を始めとし、同十五日南京、南昌方面に於ける四十餘機、同十六日南昌、楊州、嘉興方面の五十餘機、同二十一日、孝感、滁州方面の十六機、九月十九日南京の三十二機、十月十八日漢口方面の三十餘機、十一月二十一、二日南京、周家口方面の二十五機、十二月四日南京、江陰、蘭州方面の二十餘機、十二月九日南昌、粵漢線方面の二十五機、十二月十二日南昌、西安方面の十四機、同十四日津浦線、南昌、安慶方面の三十五機等々にして昭和十二年中に爆破撃墜した敵飛行機の數約五百機の多きに上り、日本機の損害は六十一機に過ぎなかつた。

敵航空機を殆んど全滅したと同様敵の微弱なる海軍をも殲滅に歸せしめた。

【陸軍の輸送揚陸掩護】 八月二十三日陸軍の吳淞鎮及び揚子江上流羅店鎮上陸を始めとし、十一月五日杭州灣の上陸、十一月十三日白茆口の上陸等に當りては海軍は其の輸送護衛は勿論、艦砲の掩護射撃並に空軍の爆撃を行ふと共に壯烈なる白襪隊を以て先登敵を強襲して之を援け大成功裡に上陸の目的を達成せしめた。

吳淞鎮方面は岸壁に墻列せる優勢なる敵に向つての強行上陸であり全くの決死冒險的の壯舉であり、又杭州灣方面は高潮を以て知らるゝ錢塘江の下流であり、赤土堆積、暗礁多く、干満の差は普通の時でも四米に及び潮流の流速六節、大潮の時には有名な暴湍の渦卷く所で、船著場としては最も不便であるが、此の時海上稀に見る濃

霧を冒し所定の錨地に達するや、輸送船より直ちに陸軍の上陸用艇を出だし陸岸目がけて驀進せしめ、轟々たる艦砲射撃を以て之を援護したるもので、是れ亦非常な冒險的上陸のものであつた。

の流速六節、大潮時には有名な暴湍の渦巻く所で、船著場としては最も不便であるが、此の時海上稀に見る濃

霧を冒し所定の錨地に達するや、輸送船より直ちに陸軍の上陸用艇を出だし陸岸目がけて驀進せしめ、轟々たる艦砲射撃を以て之を援護したるもので、是れ亦非常な冒險的上陸のものであつた。

白茆口方面は附近一帯、淺瀬や中洲多く、水路案内には至大の苦心と困難を伴つた。しかも江岸の敵は頗る頑強に抵抗して上陸を阻止した爲め、猛烈なる艦砲射撃の強大なる效力と、航空隊の猛爆撃の威力と上陸する陸軍部隊の勇敢なる突進との協力によつて其の目的を達することが出来た。

其の他艦隊は黄浦江の上流にまで始めて遡航して水路を啓開し、蘇州河を遡りては軍需品の輸送補給に任じ、又揚子江をば陸軍の前進に伴ひ遡航し、此の間機雷、閉塞船、防塞等各種の障碍を排除しつゝ、兩岸の敵を掃蕩し、福山、江陰、鎮江、烏龍山砲臺等を陥れ十二月十三日南京陥落の日、南京の表玄關たる下關碼頭に、旗艦を中心し堂々舳艫相衝んで進入し敗敵に猛射を浴せて南京攻略に不滅の戦果を収め、十七日の入城式には司令長官以下幕僚が参加し歴史的盛儀を目出度終了した。斯くして長江の制覇が出来たのである。

【航行遮断】 航行遮断とは沿岸封鎖のことである。但し今回は未だ宣戦が布告されず、所謂戦争状態でなく、法律上から言へば「事變」であるから「封鎖」と稱せず單に「航行遮断」なる語を使用することとし、八月二十五日、日本第三艦隊司令長官の名を以て其の宣言を發表したのである。之は云ふまでもなく戦局の擴大に伴ひ、速かに支那の戦闘力を滅殺して其の反省を促がし事態を早く安定せしめんには此の航行遮断は最も有效適切なる手段であるからである。

其の第一次に於ける遮断区域は揚子江口以南、福州、厦門、汕頭に互る六百五十哩の支那沿岸一帯を支那の公私船舶に對して其の通航を遮断したのである。此の遮断に對し外國の學者間に非難もあるが、之は國際公法上承認されてゐること、現に非難してゐる國々ですら、曾つて公々然として之を行つてゐる。其の主なるものを記列すれば次の通りである。

一八五〇年 英國の希臘沿岸封鎖

一八六一年 英國のブラジル國リオ・デ・ジャネイロ港封鎖

一八八四年 佛國の臺灣島封鎖

一八八六年 英、獨、露等の希臘沿岸聯合封鎖

一八九六年 英、佛、露、獨等のクリート島聯合封鎖

一九〇一年 英、佛、獨のヴェネズエラ封鎖

一九一六年 聯合軍の希臘封鎖

支那内地には兵器廠、航空機製作所及び造船所等を有するも、其の規模は極めて貧弱で技術も亦幼稚なるが故に國民政府が口には如何に長期抗戦を叫んでも、これ一種の空威張りに過ぎずして、武器彈藥は勿論、飛行機等は殆んど總ての供給を外國から仰いでゐる有様である。従つて其の航行を遮断せんか、軍需品等の補給を困難に陥らしめ、其の没落を早め事態を速かに安定せしめることが出来るのである。

然るに時局の進展に伴ひ其の封鎖を嚴重にする必要上、九月五日に至り更に其の遮断區域を擴張して山海關より佛印の境に互る全支沿岸に及ぼした。但し青島並に香港と澳門、廣州灣の四箇所のみは自由航行し得ること、

陥らしめ、其の没落を早め事態を速かに安定せしめることが出来るのである。

然るに時局の進展に伴ひ其の封鎖を嚴重にする必要上、九月五日に至り更に其の遮断区域を擴張して山海關より佛印の境に亙る全支沿岸に及ぼした。但し青島並に香港と澳門、廣州灣の四箇所のみは自由航行し得ることゝした。後者の三箇所は外國領土並に租借地だから國際關係上已むを得ずとし、何故に青島を封鎖から除外したかと云へば、之は平和を希求する日本として、青島の沈市長以下支那側の平素に於ける信賴に對する特別な好意によるものであつた。然るに沈市長以下、日本の眞意を誤解し、排日行動を起して青島に在る日本人の工場を襲撃放火して灰燼に歸せしむるの暴行を敢てした。是れに於て日本艦隊は十二月二十六日を以て青島をも遮断区域に入れ、支那に對し一大鐵鎚を加ふることになつた。



日本海軍の航行遮断線

以上のやうな譯で今や支那に開放せられた主要海路は香港のみとなつた。香港から支那の奥地へ

の輸送経路は海路にて直接廣東へ行くのと、香港から對岸の九龍鐵道に依り廣東へ行く場合もある。澳門から廣東に入るのもあるが、之は微々たるものである。要するに一旦廣東に集めたる上、武器、彈藥等は粵漢鐵道を經

て漢口、重慶等に運ばれ、飛行機はそれ／＼各飛行基地へと空輸されるのである。尙ほ佛領印度の海防から陸路を経て支那内地へ入るのもあるが、之が外國より海路による殘された交通路の一である。

日本艦隊は外部から支那に向つて輸送せらるゝ軍需品等が香港や外國租借地や船舶内に在る間は黙視してゐるが、それが一旦支那人の手に渡つたら決して見逃すことはしない。即ち待ち構へてゐて之を爆撃粉碎するのである。故に支那側は海路による輸入は益々窘窮に陥り陸路による交通網により外國からの援助を期待するやうになつた。ビルマルト、新疆ルートなどが即ち其れである。しかし是れ又日本荒鷲の空爆目標となるので支那は益々窮して來たのである。

【將兵の勞苦】 航行遮斷の効果は偉大であるが、北は山海關から南は佛印の境まで二千八百五十哩に亘る廣大なる海上交通を遮斷して、其の警備哨戒に任じ、晝夜を分かたず風浪と戦ひつゝ困難なる任務に従事した海軍將兵の勞苦の如何に大であつたかを思はねばならぬ。

今回の事變に於ける彼等は壯絶痛快を極める大海戦に加はるでもなく、又舷々相摩する間に格闘するでもなく、唯強風怒濤の中、黙々として堅忍其の任に膺つたのである。此の無言の制壓あればこそ偉大な効果が報いられたのである。陸軍の華々しき陽の戦果も、此の海軍の黙々たる陰の功德に因るものである。此の海陸の和協一致の美は世界に誇るべき日本の精華と云はねばならぬ。

南北約三千哩に亘る海上、朝に熱風に苦しめば、夕に氷雪に悩み、北方の砂風去れば南方の颱風に襲はれ、艦

は木の葉の如く揺れて飯を炊く能はず連日ビスケットのみを嚙ちつて目を送つたこともあれば、浪靜かなる夜哨

南北約三千裡に亙る海上、朝に熱風に苦しめば、夕に氷雪に惱み、北方の砂風去れば南方の颱風に襲はれ、艦

は木の葉の如く揺れて飯を炊く能はず連日ビスケットのみを嚙ちつて日を送つたこともあれば、浪靜かなる夜哨戒警備の爲め消燈して不眠不休を續けること數晝夜に及ぶこともあつた。されど彼等は儼として黙々其の任にあつた。眞に尊とき臣道實踐、職域奉公の道を盡したのである。

彼等は怒濤を己が家として見えざるの敵に備へ、倦まず撓まず其の眼を働かした。凡そ千變萬化に處するは反つて易く、變化なき狀況に處するの難きは人事の常である。日本海軍將兵は正に此の難事に當つた天來の勇者である。

丁 評 論

昭和十二年七月七日蘆溝橋附近に起つた一小戦が導火線となつて戦闘は不規則的に北京、天津の間に開かれ忽ちの裡に日本軍は抗日第二十九軍を掃蕩して仕舞つたのである。不擴大方針を執つた日本では之で戦争は一應ケリがついて擴大はしまい、又擴大せざるやう外交手段も講じたが、相手の支那側には一向そんな氣配もなく、日本が自重隱忍すれば、する程強硬に挑戰的態度に出るので、日本も最後の決心をなし、寺内將軍を北支軍司令官に任じ膺懲の軍を起すことになつたのである。

【年末迄の戦果】 戦は先づ八月中旬から京綏線方面に開かれ、次いで京漢、津浦線に及んで北支は戦雲に掩は

れたのである。斯くする内戦火は上海方面に飛び、松井將軍の率ゆる遠征軍が此に敵前上陸を敢行して死戦を反復し、海軍は又沿岸の航行を遮斷し、空軍は支那各地に猛烈なる爆撃を行ひ、所謂陸海空の立體戦が昭和十二年の暮まで行はれて其の止まる所を知らざるの勢ひを呈した。

此の間約六箇月、一日として激戦のあらざるはなく、一夜として格闘の見ざるはなかつた。しかも日本軍は連戦連勝、北京、天津は云はずもがな、察哈爾の都張家口、綏遠省の首都綏遠を始めとし、山西の太原、山東の濟南を屠り、上海を抜き敵の首府南京を陥れて丁度年末に至つたのである。此の攻略した地域の廣さは日本の一倍半、人口は一億數千萬の多きに及び、其の作戦の電撃的にして、其の戦績の偉大なる蓋し史上稀に見る所である。若し其の損害の概數を示さんか、

支那側 死傷約八十萬、各種砲約七百門、小銃、機關銃約十五萬挺、その他無數

日本側 約十萬（戦死一萬七千、戦傷約八萬餘）

日本側が、恐らく敵兵力の約三分の一内外の數を以て以上の戦果を收め、しかも其の死傷が格段に少なかつたのである。是れ蓋し統帥の優れたると、將兵の勇敢、兵器技術の優秀に因ること勿論であるが、さればとて一概に支那軍のそれ等諸件が劣弱であつたと云ふことが出来ない。何れかと云へば支那軍としては善戦善闘したもので或は獨逸を除く歐洲軍のそれよりも勇敢であつたと云ひ得るのである。第一彼等には歐洲人の如く俘虜はないのである。之には色々の原因もあるやうであるが此の點は決して輕視の出来ないことである。

【日支兩軍の作戦】

日本側に於ては最初から上海方面に戦線を設ける計畫であつたか、どうか。又上海から南京方面に於ては戦線を設ける計畫であつたか、どうか。それは何れにしても、此の上海、南京方面に一の戦線を

のである。之には色々の原因もあるやうであるが此の點は決して輕視の出來ないことである。

【日支兩軍の作戰】 日本側に於ては最初から上海方面に戦線を設ける計畫であつたか、どうか。又上海から南京攻略にまで戦線を進める豫定であつたか、どうか。それは何れにしても、此の上海、南京方面に一の戦線を形成したことは全般の作戰上からして非常な有利な手であつたのである。

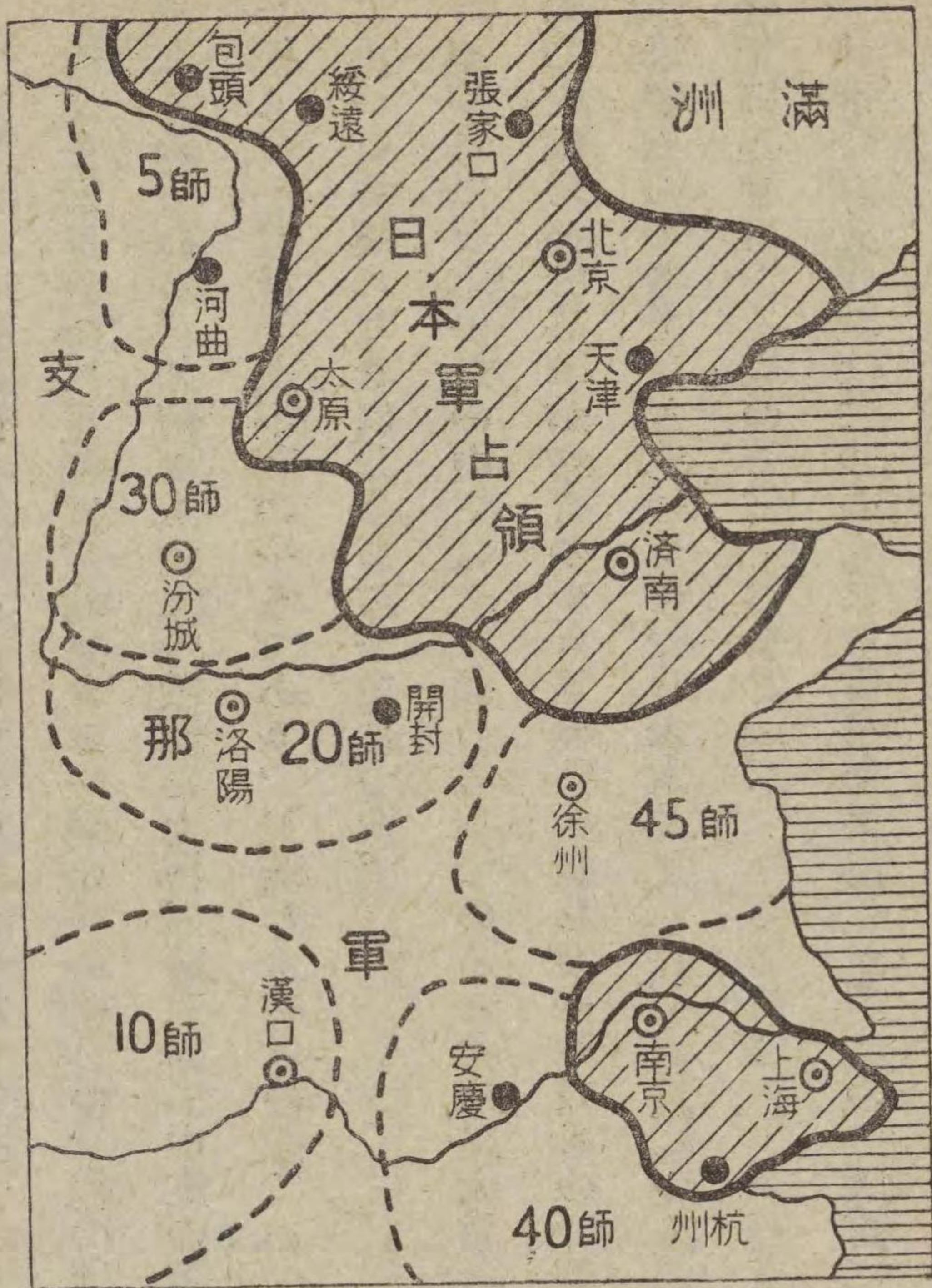
今之を基に譬へて見れば、北支なる一隅の攻め合ひ中、他の隅に機先の一石を打著して有利の隊勢を占めたやうなものである。如何にも北支の戦線と上海、南京即ち中支の戦線とは相距ること八十里であつて連絡が取れないから、一見統帥上不利のやうであり、又若しも有爲の敵であつたならば内線作戰の要領により各個撃破の行動に出づるの虞れなきにしもあらずであつた。

要するに日本の此の中支戦線は頗る有利であると共に又大膽冒險な作戰でもあつた。丁度第一次世界大戰又今回の大戰に於て英軍が希臘のサロニカに上陸したやうなもので彼は獨軍側の爲めに撃破されたのであるが、支那軍は獨軍のやうではなかつたし、日本軍も又それを見越して此の大膽作戰を敢てしたものであらう。之れ即ち敵を見て兵を用ふるもので當を得たと云ふべきである。

日本の中支作戰は二つの大なる役目を果たした。其の一は首都南京を陥れて敵に軍事的、政治的、殊に精神的の大打撃を與へ、他の一は敵を當面に牽制して北支作戰軍の行動を有利ならしめた。即ち北支軍と中支軍とは八十里を間して互に敵を牽制し合ひ以て共に其の利を收め得たのである。此の收め得た利はやがては徐州會戰に於ける總勘定となつた。是れ好點を占めた二石が敵を挾撃して地域を獲得したと云ふ形である。

昭和十二年末に於ける日支兩軍の状態は大概挿圖の如くで、日本軍を取り巻く支那軍の兵力は約百五十箇師であつて、當時一師六千人と見ても約百萬の大兵が近く相接してゐたのである。そこで一應支那の作戰を検討して

見る。



昭和十二年末期

第一、支那が北支と中支とに於て其の何れに重點を置くべきか、問題である。之は云ふ迄もなく中支即ち南京、上海方面に力瘤を入れるのが至當である。蔣介石も矢張り此の考への下に上海方面に相當強大な兵力を用ひたが、未だ尙ほ十分でなく、北支方面に可なり大なる兵力を充て、ドツチ付かずの兩天秤作戰を用ひ、結局兩方面共失敗を招いて仕舞つたのである。

北支は已むを得ざれば放棄しても可なり、されど南京、上海は失ふべからず、之れが蔣介石一派の信條でなくてはならなかつた。彼の心底にも此の考へがあつたらしい。

元來蔣介石一派の南方人は北支人とは相合はざる歴史的宿縁を有つてゐる。故に彼等としては中支、南支さへ

戦線に向け此に決勝を試むべきであつた。然るに彼は遂に此の「斷」を缺き恢復すべからざる痛手を負ふたのである。

【支那軍の弱點】 蒋介石一派の對日作戰の計畫に於て根本的に誤れるものがある。それは海軍と空軍に關する設備の缺陷である。

彼等は陸戦のみを以て日本打倒の目的を達せんと、凡ゆる苦心を拂ひ手段を講じた。即ち堅固なる陣地の構築と云ひ、數百萬大軍の建設訓練と云ひ、教育、外交、宣傳等々、到れり盡くせりであつた。しかも夫れ等に比して海軍の建設には甚だ微温的であり、空軍の擴張は未だ十分でなかつた。流石に蒋介石は是等の缺陷を知り、日本打倒尙早を顧慮したが、少壯部下の盲目的空元氣に魅せられて、とう／＼此の日支事變なる大事件を惹起するに至つたのである。

元來支那は陸軍國であつて海軍國ではない。支那戦史四千年の間を通じて海戦と云ふ程のものは甚だ稀であつて各王朝の興廢は凡て陸戦を以て決せられてゐる。故に彼等民族は陸戦萬能を傳統として來た。現代支那人亦之を謳歌してゐる。是れ誤りである。

現代の諸國家は世界的でなくてはならぬ。支那亦然り、支那が世界的になる爲めには「海」を見廻さねばならぬ、支那の爲政家乃至青年は支那を陸國家として見るよりも海國家として見直さねばならぬ時代である、海なくしては立ち行けないのである。既に海とあれば海軍によつて其の海を制し、海を護らねばならぬ。支那三千哩の

海岸は彼の外界に接する皮膚である。内臓の健全を期すると共に皮膚の強健を圖るは人生の強健法であり、國家亦同様である。然るに彼は此の海軍なくして大海軍國たる日本と戦はんとした所に、豫ての用意の缺陷がある。

しては立ち行けないのである。既に海とあれば海軍によつて其の海を制し、海を護らねばならぬ。支那三千哩の

海岸は彼の外界に接する皮膚である。内臓の健全を期すると共に皮膚の強健を圖るは人生の強健法であり、國家亦同様である。然るに彼は此の海軍なくして大海軍國たる日本と戦はんとした所に、豫ての用意の缺陷がある。爲めに彼は直ちに沿岸を封鎖せられて經濟動脈を切斷され窮迫の苦しみに陥つた。是れ彼の對日作戰計畫の誤れる一つである。

次は空軍である。最も彼は空軍の建設に相當の苦慮を拂ひ其の擴大に努めつゝあつたが、未だ其の完結に至らずして開戦したのも亦一の誤りであつた。當時彼は傭外人飛行家の言を信じ日本空軍與みし易しと誤信したのである。然るに一と度び開戦となるや、忽ちの内に二十機三十機と擊墜され、年末迄に約五百機を失ひて空權を失つて仕舞つた。

既に海權なく空權なし、海陸空三位一體なる立體戰の現代に於て、彼は其の二を缺く、縱令強大陸軍ありと雖も、跛行の作戰到底其の成果を擧ぐるを得ざるべし、先きに京津の地を失ひ今に京畿の省を屠らる、固より當然のみ。

思ふに支那軍、克く戦ひ克く忍ぶ、されど其の作戰根本の計畫施設に於て缺くるものある前述の如し、其の敗るゝや智者を待たずして知るべきのみ。蔣介石は夙に此の事あるを豫知したらんも左右の少壯者に誤られて兵鼓を進む、箭既に弦を離る、悔ゆとも及ばず。古語に兵は國家の大事、慎まざるべからずと、眞に然りである。

【上海論】 國際都市の上海、或る點に於ては善い所もあり惡い所もある。されど戰爭となつては實に厄介な邪

魔物である。此の前の戦の時にも又今回の戦に於ても支那軍はそれを利用して日本軍を苦しめ、爲めに日本軍は一方ならぬ苦心と、作戦上の不利を満喫した。そこで將來又と此の邊で戦の開かれることあるべきを考へ來る時、上海そのものに就き何か工夫を凝らさねばなるまい。

勝者に権ありとは申せ、昔のカルタゴの如く、ニネヴェの如く、銃砲を以て此の國際都市を破壊する譯には行くまい。そこで此の都市を自然消滅に歸せしむべく第二の上海を他に建設して日本主權又は親日支那主權の下に一元的都市たらしめることである。(國際都市たるべき要素を除外すれば無論可なり)

之が爲めには上海の商權を奪ふに足る形勝有利の地點を選び、國家の力を以て大々的に新建設を爲すことである。而して支那人には半命令的に移轉を促がし歐米人を孤立立往生せしめるのだ。之れ敢て人道上の問題にあらずして、國內的政治、經濟問題である。此の事たるや今の内ならば斷行の出來る案件である。然らば何れの邊にか其れを建設すべきか。

私案によれば鎮江を以て第一候補とする。此の選擇の條件は商品の吞吐に利便なること、揚子江畔たること、軍事的防禦に便なること、都市そのもの、繁榮を圖るに適すること等であらう。

鎮江は上海より六七十里上流にあれど揚子江に瀕し南京にも近く殊に北は天津より南は杭州に至る大運河を通ずるを以て支那内地との商品吞吐、交通に最も適當な大河港都市たらしめ得るの見込十分である。之が爲めには岸壁河底等の改修新工、大運河を更に浚渫擴大し、尙ほ新たに鎮江北方の湖沼を通じて東方の黃海に大運河を鑿

開し、殊に鎮江より杭州に至る運河をば大々の擴張して巨船大艦の航行に便にして杭州灣に船舶の出入を多から

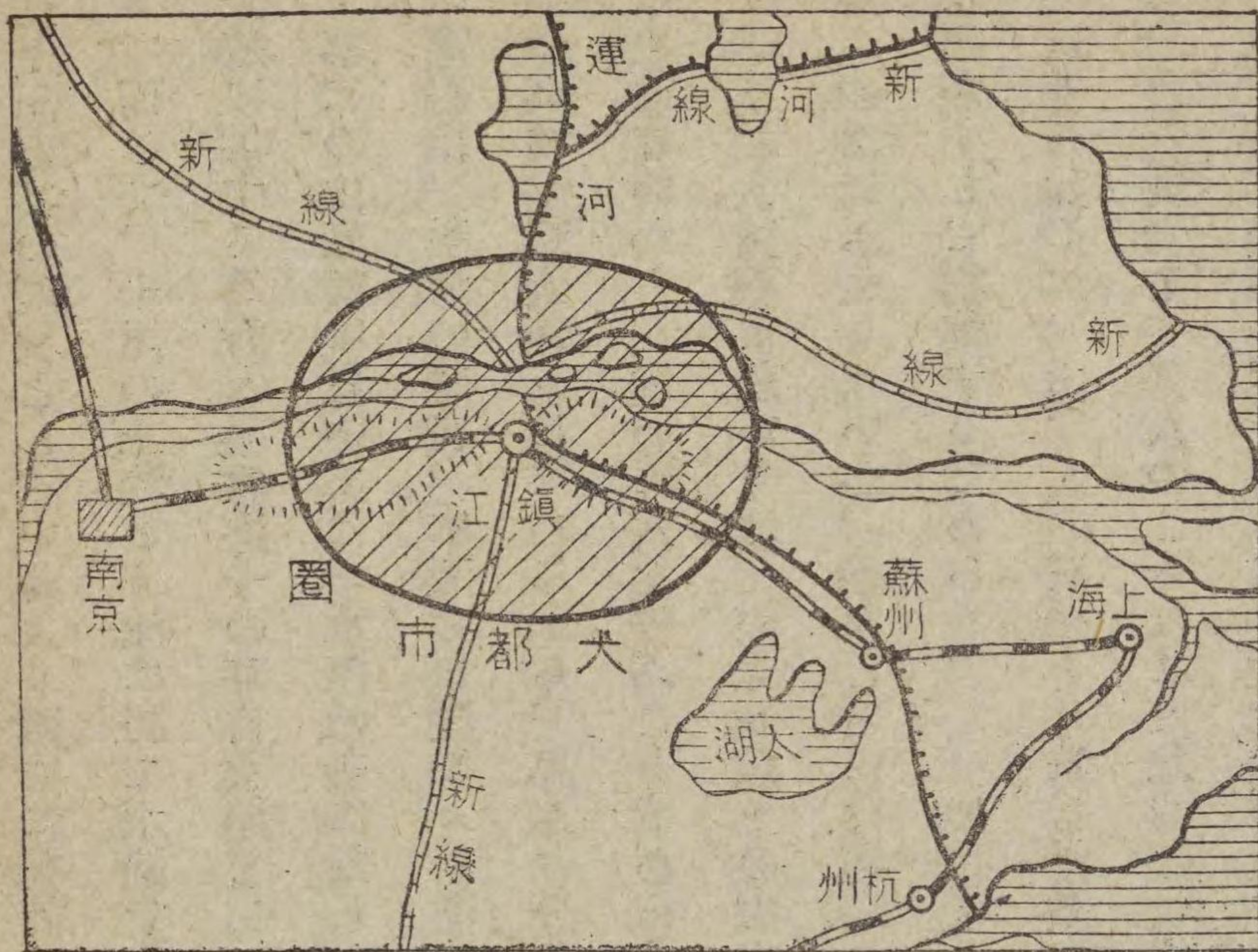
岸壁河底等の改修新工、大運河を更に浚渫擴大し、尙ほ新たに鎮江北方の湖沼を通じて東方の黃海に大運河を鑿

開し、殊に鎮江より杭州に至る運河をば大々的擴張して巨船大艦の航行に便にして杭州灣に船舶の出入を多からしめ、其の他鐵道を四通八達的に布設することである。つまり上海は單に黃浦江と蘇州河とに依る船著港としての特色あるに比し鎮江をして其の以外に水陸交通の便を占め、經濟的有利の地位を占めしむるのである。

次には防禦設備であるが、之は附近の地形上、恰好な經始を思ふ通りに選ぶことが出来るやうである。次には市の繁榮計畫であるが、之には特別の工夫を凝らすの必要がある。

一體支那人は大を好むの人種であると共に、歡樂慾の盛んな國民であるから、其の事物の構想設備は凡て萬里の長城、白髮三千丈的でなくてはならぬ。よつて鎮江大都市の設計は第一、河の色を映じ、それに山の景を配し、尙ほそれに人の美を加ふる如くせねばならぬ。

第一の河色觀に就いては鎮江の上流四里の所にある里世洲と稱する島と、鎮江の下流四里にある數箇の中州との間



鎮江新都市案

約十里を其の區域とし、中州より兩岸に數箇の美的にして仙彩を帯びたる橋欄を設け、中州には高廓巨樓を作り、而して、十里の上流と下流に於て水閘を作りて河水を調節し或は靜漣舟遊の湖と化し或は奔流船を飛ばすの豪遊に供する等詩人墨客遊士の耳目を娛ましむる如く種々の技巧を凝らすのである。

第二の山景觀に就いては、水色の美に對して、昔巴比崙城の七不思議の人造山の如くに、南京の紫金山、北京の萬壽山、熱河の離宮、奉天の東陵等々を凌いだ宏莊雄大な山景を作るのである。此の附近には長江に瀕した大小の高地が起伏連互してゐるから、思ふ存分理想通りの景觀を仕上げることが出來よう。上海には此の種の山景水色はないから、大いに人を呼ぶことであらう。

第三の人美觀に就いては、固より以上の山水の景趣を持つ大都會のことなれば、四方より美姬佳嬪の集まつて來るのは云ふ迄もないが、幸なことには鎮江の對岸揚州は支那美人の産地として古來有名の所なれば天下の嫖客は招かずして雲集するであらう。

以上の如く河、山、人の三美を具備した鎮江の新大都市にして商業に至便利の地を占める以上は、利に敏に、色を愛する支那人のことなれば忽ちにして溢るゝに至るであらう。是等は單に營利、歡樂方面のことであるが更に高雅雄渾の氣を養ふべく文化的の大施設をも加ふべきは勿論である。

斯くして鎮江市は政治都市たる南京の附屬港ともなり、別莊地ともなり、しかも支那第一どころか世界的大都市と成りたらんには、今の上海市は何時とはなしに鎮江市に其の勢力を奪はれて自然に衰微するに至るであらう。

上海は既に病膏盲に入つたる滿菌都市である。早晚之は何等かの方法を以て消毒せねばならぬ。今回の戦争に苦き經驗を嘗めた日本は率先して支那の新政權と共に躊躇することなく其の根絶的廓清を行はねばなるまい。一

市と成りたらんには、今の上海市は何時とはなしに鎮江市に其の勢力を奪はれて自然に衰微するに至るであらう。

上海は既に病膏盲に入つたる満菌都市である。早晚之は何等かの方法を以て消毒せねばならぬ。今回の戦争に苦き経験を嘗めた日本は率先して支那の新政権と共に躊躇することなく其の根絶的廓清を行はねばなるまい。一體支那人は都市の變革移轉を厭忌する國民ではない。長安から洛陽に、北京から南京に、或は東に西に、其の時の政治交易風の吹き廻はしによつて、遷都は事も容易に行はれてゐる。此の附近の蘇州は曾つて吳の首府で其の後、盛んな時には人口二百四十萬を算した一大都城であつたが、遷都してより以來衰微して今や三十五萬の小都と下格し、又杭州は南宋の都であつた時代は人口百五十萬の大都であつたが、遷都となつてからは三十萬に減少して仕舞つた。されど支那人は之を見ることが流水を見るが如く頗る冷々洒々として何等の未練もない。

三百萬人口の大上海、鎮江への遷徙、豈夫れ難からんやである。轉移するも支那人は古來の傳統により後顧の未練は残すまい。後世の史家は曾つて華やかなりし人口三百萬の上海の大都、今や鎮江に其の盛を奪はれ黄浦江畔僅かに其の面影を残すのみと云はん。

若し夫れ大上海の轉移廓清を行ひ得ば、其の效や或は北支占領よりも南京攻略よりも大なるものあらん。

昭和十二年の戦は日本に取つては支那事變の初陣であつた。戦ふこと六箇月、而して其の攻略したる北支、中支の一角は、やがては來るべき新作戦の礎石となつて新支那建設の上に偉大なる貢獻をなすであらう。

昭和十二年 中支上海、南京方面戦局史略

月日	摘要
八、九	大山中尉上海にて虐殺せらる
一三	日本陸戦隊と支那兵と開戦
一四	日本政府上海派兵決定
二三	日本陸軍上海に敵前上陸
二八	羅店鎮
三一	吳淞鎮
九、一	獅子林砲臺
二	吳淞砲臺
六	寶山鎮
一二	揚行鎮
一〇、二	劉家行占據

占據

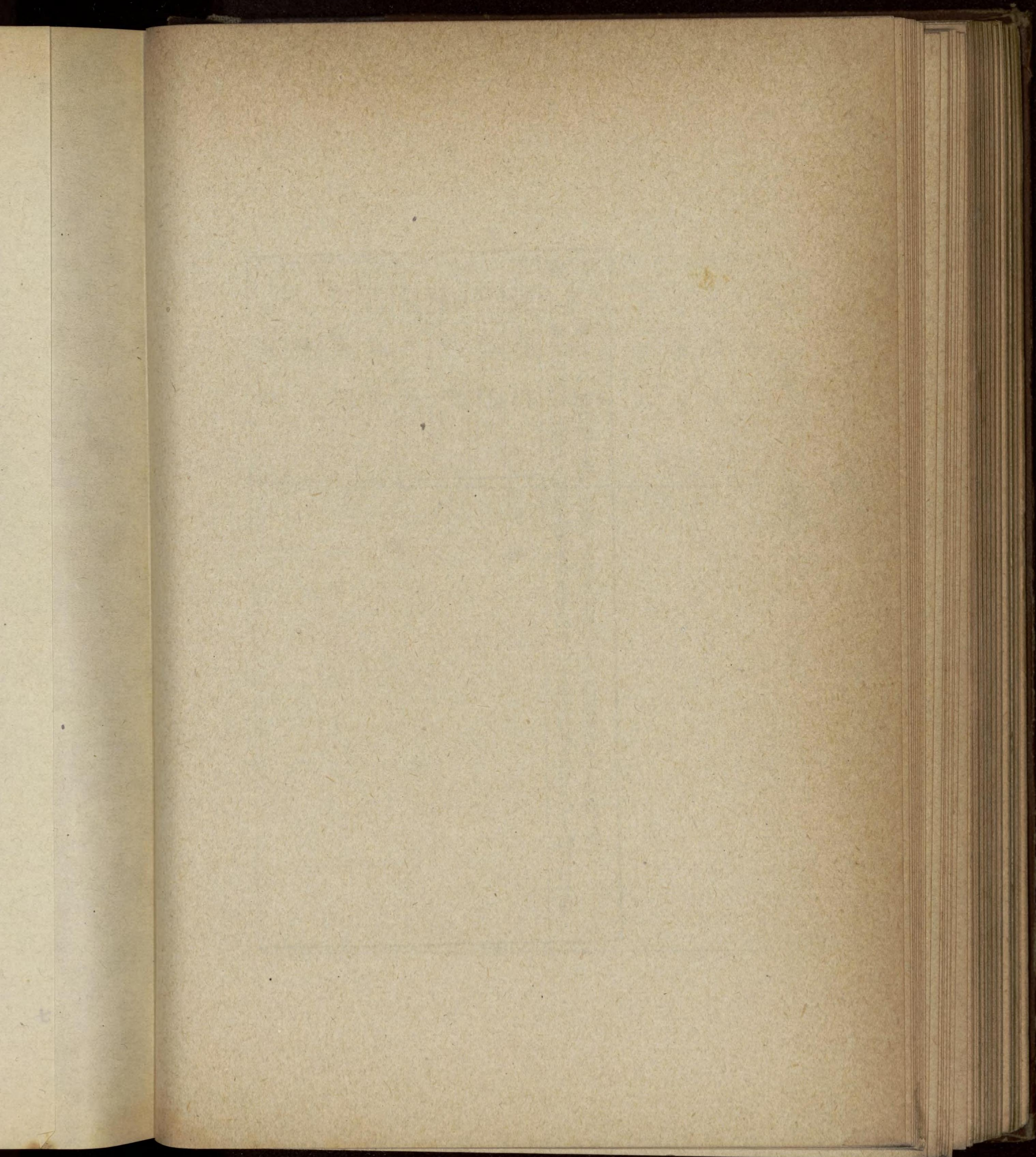
一九	一九	一九	一五	一四	一三	一二	一二	九	一一、五	二六	二六	二五	二三
常熟	嘉興	蘇州	崑山	太倉	嘉定	南翔	上海市	松江	杭州灣上陸	大場鎮	江灣鎮	廣行鎮	日本軍總攻撃
占據									占據				

五	四	二	二	二	十二、二	三〇	二九	二八	二六	二五	二四	二一	一九
句	溧	丹	金	江	溧	廣	常	宣	長	無	湖	福	南
容	水	陽	壇	陰	陽	德	州	興	興	錫	州	山	潯

占據

七
宣
城

考 備	二四	二〇	一四	一三	一〇	一〇	八	七
	杭 州	滁 州	楊 州	南 京	當 塗	蕪 湖	鎮 江	宣 城
占 據								
一 戦争の發點上海より南京北方滁州まで約百二十里の行程を戦ひつゝ約百三十日を要し、此の間上海、南京の大都を始め、大小都城約七十を攻略した。								



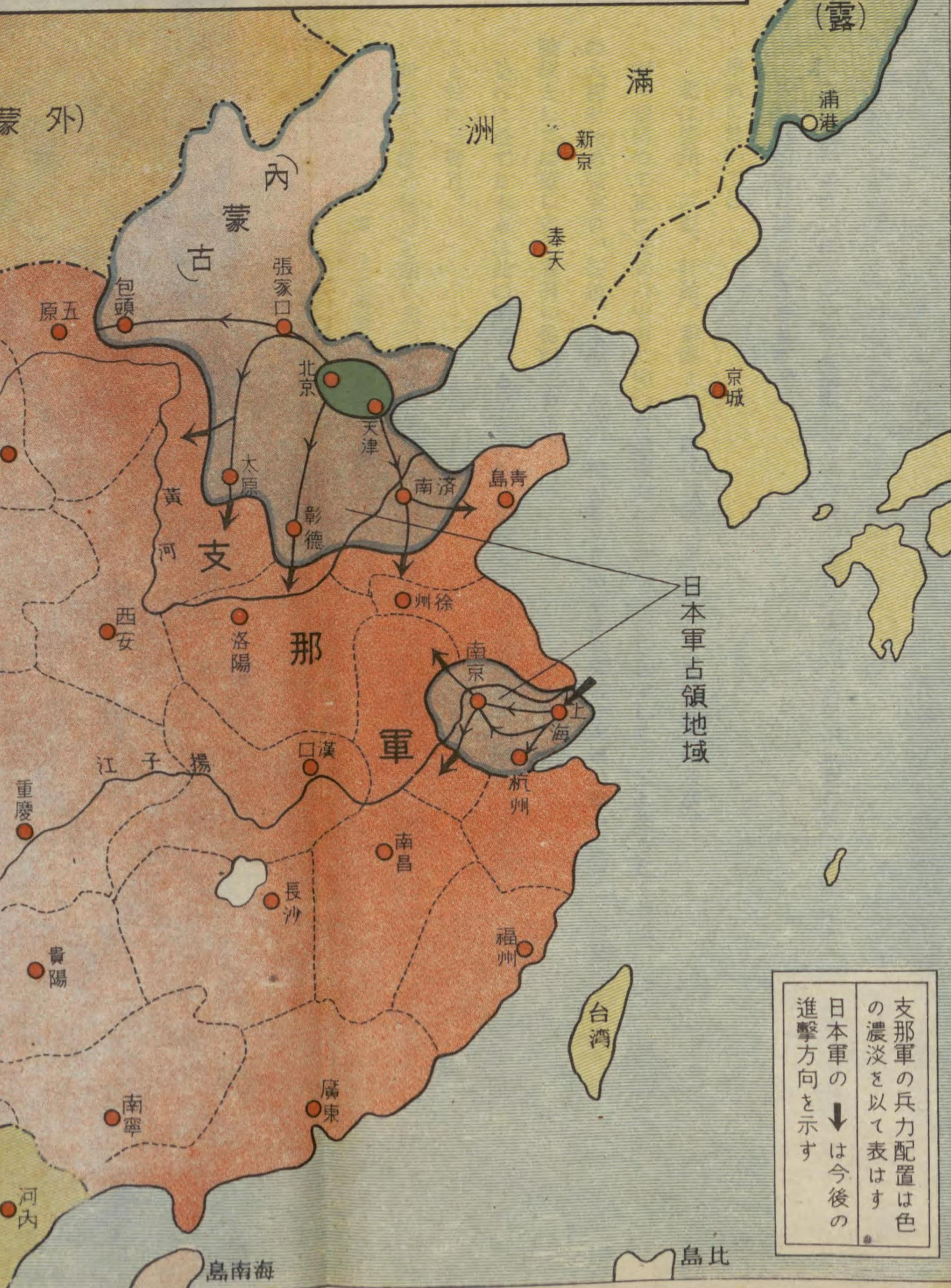
洋東集圖



東 瀛
西 瀛
東 海
西 海

支那事變參照圖 (昭和二十年二月)

附圖第六

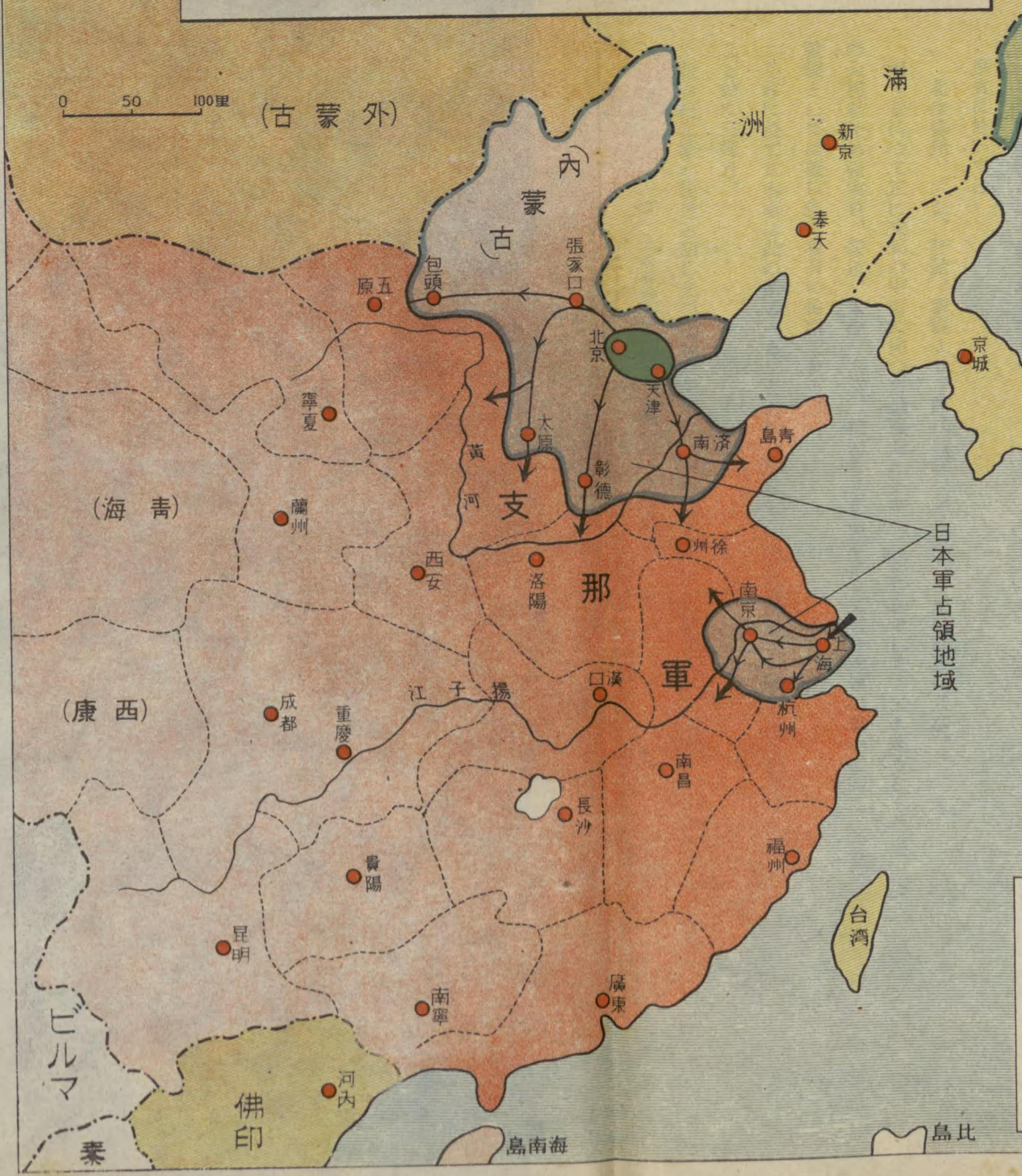


支那軍の兵力配置は色の濃淡を以て表はす
 日本軍の ↓ は今後の進撃方向を示す

(年一第爭戰) 圖照參變事那支 (年二十和昭)

0 50 100里

(古蒙外)



第三章 事變第二年、昭和十三年の戦局

事變第一年、昭和十二年に於ける戦線は北支と中支の二方面に展開せられ、兩方面共、日本軍の連戦連勝となり、同年末から翌新年に懸けての戦線は北支に於いては

北は包頭より山西省の中部を横断して河南省の彰德（安陽）及び山東省の濟寧を経て其の東方遠く青島に至る蜿蜒約四百里の長きに及び、

中支に於いては

北は楊州、天長、肝胎、滁縣より、西は蕪湖、南は杭州、東は浦東に及び、

兩々相待つて正に支那の中原に向つて飛躍せんとするの勢ひを示した。云ふ迄もなく北京、天津、上海、南京の大都を始め張家口、綏遠、太原、濟南、杭州等々の省城は凡て皆日本軍の掌中に歸し、開戦以來僅か六箇月の戦績としては蓋し史上希有の偉觀である。

是れに於て日本軍は此の所で一と息を入れ、補給を行ひ陣容を整へて來るべき新作戦に備へんと鋭意準備すること茲に三箇月、

新春紀元節の佳日を期し先づ北支の戦線に活潑なる黄河作戦が展開され、次いで歴史を飾るべき偉大なる作戦

が夫れから夫れへと現はれて世界の耳目を聳動せしめた、本年中には行はれた主なる會戦は

- 一 黄河作戦 (二月—三月)
- 二 徐州會戦 (三月—五月)
- 三 武漢攻略戦 (六月—十月)
- 四 廣東攻略戦 (十月)

であつた。先づ黄河作戦より述べよう。

甲 黄河作戦 (二月—三月)

支那では古來「水を治むるものは國を治む」と云はれ、黄河を制することは支那を制するの基礎を爲すものとせられてゐた。之は主として治國平天下なる政治的方面の要語であるが、黄河は獨り此の政治乃至經濟に關するのみならず、又軍事、兵略上にも重大なる價值を有することは三千年來の支那史は之を證明してゐる。

前年度に於ては日本軍の一部は此の黄河の下流を越えて其の戦線を南岸の地に進めたが、其の上流の河南省の北部及び山西省方面は未だ黄河々畔に達せずして越年したのである。是れ山西省は嶮山峻峰が連亘錯綜して交通頗る不便を極め、且つ同省は抗日教育の盛んな地方で、其の上近年共產黨が入り込み益々反日行動を取る所以進意の如くならず、それで省都太原を占領した所で暫く其の鋭鋒を收めたから、其の戦線は尙ほ黄河々畔に達し

なかつたのである。それを今度の作戦で戦線を河畔に迄進めようとしたのである。

それで各方面から數個の縦隊が山地戦の要領に基き、各山頸、谷地等を分進したのであつて、其の大體は

進意の如くならず、それで省都太原を占領した所で暫く其の鋭鋒を収めたから、其の戦線は尙ほ黄河々畔に達し

なかつたのである。それを今度の作戦で戦線を河畔に迄進めようとしたのである。

それで各方面から數個の縦隊が山地戦の要領に基き、各山頸、谷地等を分進したのであつて、其の大體は

- 一 彰徳、大名附近よりの進撃
- 二 邯鄲附近よりの進撃
- 三 榆次附近よりの進撃
- 四 太原附近よりの進撃
- 五 朔縣附近よりの進撃

以上の五方面から鋒を揃へて河南省の北部、山西省の南部並に西北部に向ひ殺到し忽ちの裡に黄河々畔に至る要地を攻略したのである。

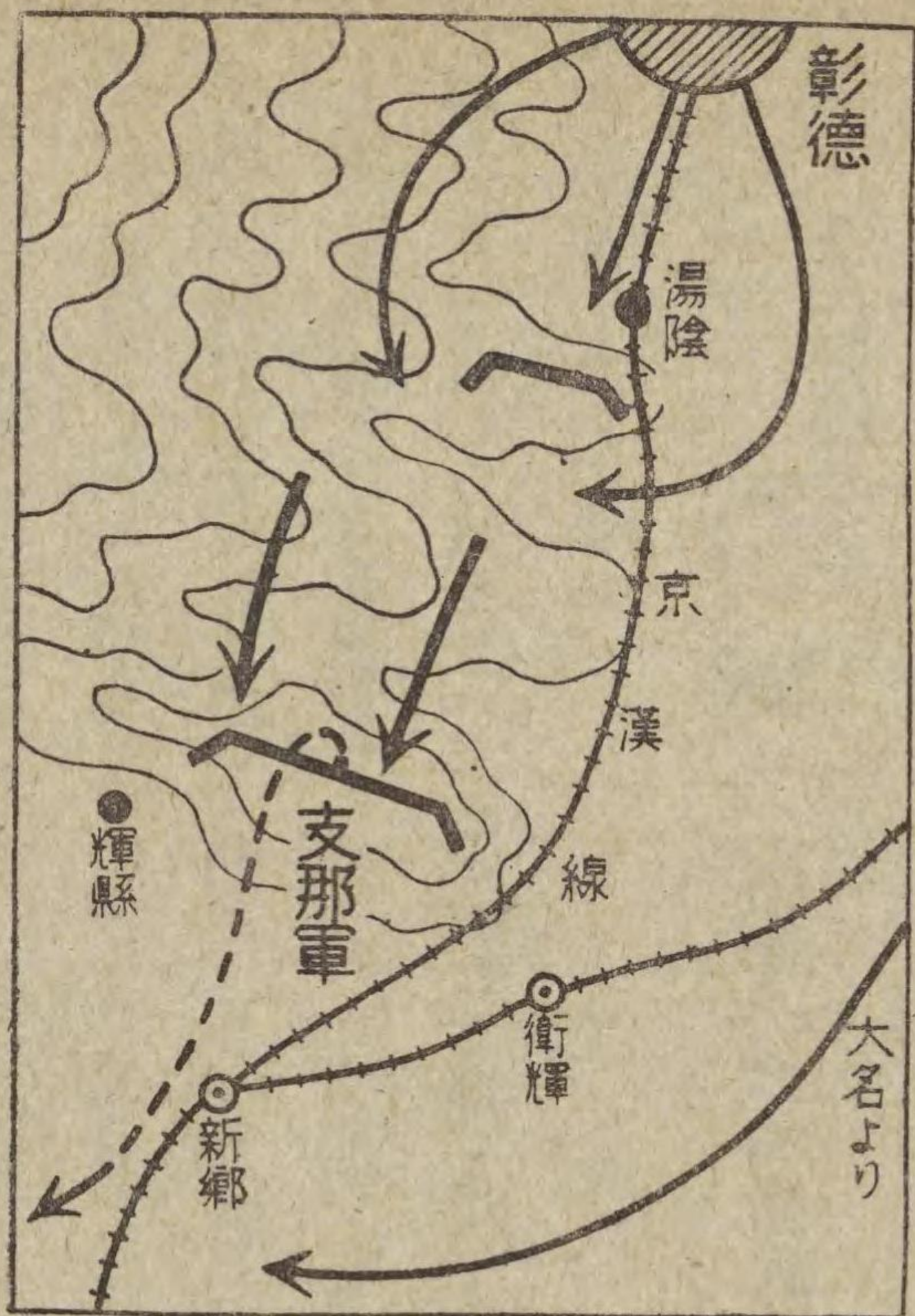
第一節 彰徳、大名附近よりの進撃

京漢線方面の彰徳、大名附近を第一線として待機してゐた日本軍は二縦隊となり二月十一日紀元節祝日の拂曉を期し三箇月振りに、全面的前進を開始し、兩軍の銃砲聲は河南の曠野を震駭させた。

其一 彰徳よりの右縦隊

彰徳附近より前進せる右翼縦隊諸隊は先づ彰徳南方約四里に在る湯陰附近の敵陣地を攻撃せんと、十一日の拂

曉三縦隊となり包圍的に前進した。當面の敵は萬福麟軍の歩、騎三個師より成るものゝ如く附近の地形を利用し堅固に構築せる陣地に據り頑強に抵抗したが、空陸協同の猛撃と其の兩翼を包圍されたので遂に崩潰して十二日湯陰の陣地は陥落した、支那軍の遺棄した屍體約一千に達した。



湯陰——新郷

日本軍は勝に乗じ追撃を強行し、此の方面に於ける敵の主要陣地である衛輝（春秋戰國の時代、蘇秦、張儀により唱へられた要衝の地）西北方高地より輝縣北方高地に據る優勢なる敵に對し十五日より主力を右方に置いて攻撃を開始し強攻の後十六日敵線を突破して殆んど敵を殲滅し、十七日には一舉其の後方の要衝新郷（城廓の周圍一里半、人口一萬二千）を占領し、空軍は機を逸せず敵の退路を遮斷すべく黄河鐵橋を爆撃した。此の戦に於ける敵の遺棄屍體

約一千であつた。此の時恰も大名方面より南進せる左翼縦隊は新郷の背後に迫まつて此の攻撃を有利に進展せしめた。

其二 大名よりの左縦隊

大名（曹操に關係の要地）より前進せる左縦隊は、既に南樂、清豐附近に在る敵を驅逐し、二月九日には濮陽（春秋時代には衛の都で、項羽、曹操等に關係の地）を占領し、十三日には長垣を、十五日には封邱を占領し十六日に

其二 大名よりの左縦隊

大名(曹操に關係の要地)より前進せる左縦隊は、既に南樂、清豊附近に在る敵を驅逐し、二月九日には濮陽(春秋時代には衛の都で、項羽、曹操等に關係の地)を占領し、十三日には長垣を、十五日には封邱を占領し十六日には陽武を陥れ疾風の勢ひを以て十七日新郷の背後に進出し、前述せる右縦隊の攻撃に大なる後援を與へた。

以上の如く彰徳、大名より分進せる兩縦隊の猛烈なる攻撃により僅々一週間を以て正面約三十里、縦深約二十二里に及ぶ極めて堅固に構築せる敵の數線陣地を突破し、今や其の第一線は黄河の線に達し京漢線以東に於ては全く黄河以北の地區を占領肅正することが出來た。

此の方面一帯の支那軍は程潛の指揮する約二十個師と云はれてゐるが、其の損害は少くも三萬を下らず、之に對し日本軍の戦死者は僅かに約五十餘名に過ぎなかつた。

其三 黄河左岸の西方追撃

二月十七日新郷の線を占領した日本軍諸隊は直ちに黄河左岸に沿ひ追撃に移り、其の一部は京漢線を遮斷して濶縣に進み三月三日之を占領し、他の諸隊は二つに分かれ、一は吳村を、他は修武(此の附近にて周の武王が殷の紂王を大破した)を経て懷慶に向ひ前進し、途中砲を有する有力なる敵の抵抗を撃破しつゝ二月二十一日懷慶を攻略した。此の間に於ける敵の遺棄屍體約一千、我が死傷僅かに百五十であつた。

それより追撃軍は大體三つに分かれ一は南方黄河々畔の孟縣に向ひ前進し二月二十二日之を占領して爾後其の附近の守備に任じ、一は北方に向ひ、他の一は河畔に沿ひ西方に追撃前進した。先づ北方の状況を述べよう。

其一 北方追撃隊 懷慶占領後北方に分進した部隊は二月二十四日夜襲を以て大口の敵陣地を奪取し、勢ひに乘じ連戦敵を撃破し二十六日には澤州城に據る敵の一個師を攻撃して之を陥れ、更に西進して沁河を横ぎり、嶮山を越え、三月一日には陽城の敵陣を突破し翌二日には山間の小市沁水を攻略して續いて前進し、三月六日には汾河畔の曲沃に進出して、太原より同蒲線を南下する友軍と連絡した。此の行程懷慶より約六十里の嶮峻なる山路を敵と戦ひつゝ約十日を以て突破したのである。

其二 西方追撃隊 此の隊は二月二十二日懷慶占領後直ちに追撃を續行し、其の日の中に濟原を占領し途中約二千の敵を殲滅し、二十八日黄河々畔の要鎮垣曲を占領し、それより退却中の敵大部隊を窮追して西北方の山地に入り三月四日同蒲線上の聞喜に進出して太原方面より同線上を進來せる友軍と連絡し、更に分かれて南下し、五日安邑（昔し舜、禹の都）六日解縣を攻略し、八日には芮城及び平陸を占領して黄河々畔に出て、有力なる砲兵を以て對岸の隴海線を砲撃して多大の損害を與へた。

以上を以て彰徳、大名より進發した諸隊の行動を終るのであるが、是等諸隊の作戦行動は實に破竹の勢ひとも云ふべく、即ち二月十一日より三月八日まで二十五日間に約百五十里の山野を、優勢なる敵と戦ひ且つ進み、一日の行程平均約六里を突破したのである。

第二節 邯鄲附近よりの進撃

京漢線上の邯鄲附近に集結した日本軍部隊は二月十一日同地を出發し、河北、山西の省境山脈を越えて前進し翌十二日武安を急襲して之を占領し、更に西進して敗敵を追撃中約八千の敵と衝突し猛烈なる遭遇戦を演じて之を撃破し十四日涉縣を占領し、十六日には司地西方なる東場關の嶮に據る優勢の敵を對し兩翼より包圍挾撃して

京漢線上の邯鄲附近に集結した日本軍部隊は二月十一日同地を出發し、河北、山西の省境山脈を越えて前進し翌十二日武安を急襲して之を占領し、更に西進して敗敵を追撃中約八千の敵と衝突し猛烈なる遭遇戦を演じて之を撃破し十四日涉縣を占領し、十六日には同地西方なる東陽關の險に據る優勢の敵に對し兩翼より包圍挾撃して大いに之を破り約三千の損害を與へて追撃に移り翌十七日には黎城を占領した。

黎城占領後西進して十八日漳河を渡り十九日潞城附近に在る敵を撃退して其の西方の要鎮潞安に迫つた。潞安は春秋戰國以來攻守の重地、兵家必争の要害であつて殊に五代亂争の際には争奪を反復された所である。故に城廓の周圍は今尙ほ四里に餘る宏壯なものであるが、市街は衰微して人口約一萬、僅かに往時の面影を存してゐるに過ぎず。

我軍は夜襲を以て城の一角を突破し二十日完全に之を占領した。此に據つた敵は約一萬の歩騎兵であつて五百の屍體を遺棄して西南方に遺走した。其の後襄垣、屯留を攻略し、更に西進して二十五日には沁河對岸に據る敵を撃破し途中執拗なる敵の抵抗を排除して二十七日曲亭鎮を陥れ同日夕には遂に同蒲線上の臨汾（平陽）を占領入城した。此の附近の戦に於て敵の遺棄屍體千三百の損害を與へ各種砲百五十を鹵獲した。

以上日本軍の前進したる地域は大行山脈の峻嶮なる山地にして共產軍の跋扈せる所であり、行程約九十里の間を激戦を續けつゝ十七日間を以て突破し、而して太原より同蒲線を南下中の友軍と連絡して茲に敵巢窟覆滅の目的を達したのであるが、此の山地に於ける敗敵は恰も飯上の蒼蠅の如く其の後反復出沒して蠢動を續けた。

第三節 榆次附近よりの進撃

榆次及び太原附近に在つた日本軍は、該方面一帯に蟠踞する共産軍を肅清する爲め、京漢線方面の友軍が前節記述の如く邯鄲及び彰徳、大名附近より紀元節の佳辰を期して活動を起したのに呼應して、茲に積極的攻撃を開始した。

二月十一日榆次附近に集結した部隊は同蒲線に沿ひ南下し同十三日平遙附近に在つた約三千の敵を攻撃して之に大打撃を與へ同日同縣城を占領した。敵の遺棄屍體約千五百を算した。平遙は周宣王が儼狁を伐つた時の築城に係ると云はれ、此の附近には五胡十六國時代に於ける古戰場多く、城壁の周圍約二里、人口約一萬、山西省金融の中心地として著名である。平遙攻略後引き続き敵を追撃し十六日介休に進入し、爾後軍は二つに分かれ主力は同蒲線に沿ひ進み、右側隊は孝義より隰縣方向に進んだ。

其一 主力方面 主力部隊は十六日介休占領後靈石の敵陣地を攻撃すべく敵情地形を搜索したる後二十二日三縱隊となりて介休を出發し包圍的に攻撃前進し約四箇師の敵と激戦を交へ、或は夜襲を以て或は迂回により敵を撃破し二十六日靈石を占領した。敵の遺棄屍體約千五百に上つた。軍は勝に乗じ敵を追撃して二十七日臨汾（平陽）に進入した。

其二 右側隊方面 右側隊は十六日介休より主力と分かれて西南方に進み同日夕孝義を攻略し、それより錯雜

せる山地を縫ひ幾多の陣地に據る數倍の敵を撃破しつゝ追撃前進し、二十六日當面の要地隰縣城を攻略した。

隰縣は山岳に圍まれ、西方に黄河、東方に汾河を控へ、古來攻守の要地を爲し、秦、魏間に屢々爭奪の焦點と

陽)に進入した。

其二 右側隊方面 右側隊は十六日介休より主力と分かれて西南方に進み同日夕孝義を攻略し、それより錯雜

せる山地を縫ひ幾多の陣地に據る數倍の敵を撃破しつゝ追撃前進し、二十六日當面の要地隰縣城を攻略した。

隰縣は山岳に圍まれ、西方に黄河、東方に汾河を控へ、古來攻守の要地を爲し、秦、魏間に屢々爭奪の焦點となつた。晋の劉淵河東の地を取り北方の離石より都を此の地に移した。市の東北にある蒲子山は堯の師である蒲子隱棲の地と傳へられる、城壁の周圍約一里人口五、六千に過ぎざるも山間農村の中心都邑をなしてゐる。

同隊は隰縣占領後尙ほ進んで二十八日其の南方の午城鎮を攻略し、三月一日には蒲縣を陥れ、後臨汾方面に進みて主力軍に合した。此の右側隊の過ぐる所敵の死屍累々として其の數約四千五百の多きに達した。以て其の激戦の狀を知ることが出来る。

其三 其の後の南進 二月二十七日臨汾を占領した諸隊は二縱隊となりて追撃し其の主力は同蒲線に沿ひ三月二日には曲沃、五日には聞喜を占領し其の快足部隊は六日蒲州に七日潼關渡場に進入して機關車、貨車合計五百輛を鹵獲し對岸の潼關停車場を砲撃して多大の損害を敵に與へた。

一方臨汾附近より右方に分進した部隊は三月四日汾城に、五日稷山に六日河津に進入し其の先頭部隊を以て禹門の渡場に達し其の附近に在る敗敵約千五百を殆んど殲滅して同地を占領し、然る後更に黄河の東岸を北方郷寧に向ひ敵を追撃し山間に窮迫せる約二千の敵の逆襲を受けたが悉く之を撃退して遺棄死體約五百の損害を敵に與へた。三月二十日吉縣を占領した。

第四節 太原附近よりの進撃

太原附近に在つた日本軍は二月十一日行動を起して先づ交城附近に集結し、然る後十五日文永附近に在る約一千の敵を攻撃し其の半數を斃して同地を占領した。之より軍は二つに分かれ、主力は左縦隊となり十七日汾陽附近にある約千二百の敵に對して攻撃を開始し同日夕を以て之を占領した。汾陽（汾州）は古來西北邊有事の際必備の地で戰國時代に秦、趙相角逐し、下つては五胡の侵入期に當り中原禍亂の基となり、北朝に於ける周、齊爭奪の地となり、隋の末期、唐の中期以後の亂世には太原以南第一の要地と目せられ、宋代には西北の大國西夏に備へる重兵屯駐の處となつた。縣城は一名を四陽城と云ひ三國魏の築く所と云はれてゐる。城壁の周圍約一里半、人口約三萬である。此の汾陽を占領した部隊は二十三日吳城鎮、二十四日中陽（寧鄉）を攻略し二十七日には軍渡に進出した。

又右縦隊は十五日文水より主力と分かれて西北進し、十六日數百の敵を撃破して東社鎮を占領し、然る後二十三日には上馬寨を二十四日には離石を陥れ、更に磧口鎮の渡場を占領した。

斯くの如く榆次より進撃した隊は黄河々畔に達して東方京漢線方面より西進せる友軍諸隊と相連絡し又太原より進撃した隊は西方黄河の線に達して同河畔の要鎮を占領し以て今回發動の目的を達したのである。

第五節 朔縣附近よりの進撃

山西省西北部は共產軍、馬占山軍、何柱國軍等の雜軍が蠢動して其の討伐に寧日なき状態であつた。是等の敵

り進撃した隊は西方黄河の線に達して同河畔の要鎮を占領し以て今回發動の目的を達したのである。

第五節 朔縣附近よりの進撃

山西省西北部は共產軍、馬占山軍、何柱國軍等の雜軍が蠢動して其の討伐に寧日なき状態であつた。是等の敵は一月下旬頃から或は包頭に向ひ、或は綏遠に向ひ、或は渾源附近に五月蠅く侵襲して來るので日本軍は蒙古軍と協力して之を撃退してゐたが二月下旬に至り之を掃蕩すべく稍々強力なる討伐を行つた。

其一 朔縣よりの進撃 二月二十三日朔縣附近に在る日本軍の一隊は同地南方の寧武方面に向ひ前進して二十四日同地を攻略し、敵を追撃して二十八日黄河々畔の保徳を占領し渡河潰走中の敵に多大の損害を與へた。それより反轉して後方山地に出沒する敵を掃蕩して三月十一日五寨を占領した。

又他の一隊は朔縣より北進し井坪鎮を経て西進し二十四日乃河堡附近の敵陣地を攻撃して之を陥れ、二十八日には此の方面の要地偏關を攻略し、更に進んで三月六日には黄河々畔の河曲を占領し九日對岸に陣地を占領しある何柱國軍を攻撃し附近一帯を掃蕩して敵に多大の損害を與へた。

其二 長城以北の掃蕩 蒙古軍と聯合せる我が諸隊は外長城北部の清水河を占領し更に北進して黄河々畔の飯鋪煙及其の東方地區の敵を攻撃して此の附近を掃蕩した。

以上の如く山西省西北部は何れも敵を黄河以西に驅逐したるを以て、諸隊は其處を撤して原駐地に歸還すると、それに乗じて敵は又々渡河東進するので屢々之が膺懲討伐を反復せねばならなかつた。

又朔縣の東方なる五臺、及び其の附近の内長城の邊に蟠踞せる共產軍は嶮峻なる山地を利用して蠢動を續け、各地守備諸隊は屢々之と交戦するのであるが、此の共產軍の中には二十歳前後の青年が多く、皆制服を著し自動火器多數を整備し中々勇敢に戦つた。故に此の方面に於ける戦場には敵の屍體比較的多かつた。

第六節 評 論

昭和十三年二月十一日紀元節の佳日をとして開始された黄河作戦は約四十數師の大敵に對し神速果敢なる攻撃を斷行して多大の戦果を收め、行動開始後僅々一箇月、三月十日の陸軍記念日を前にして一應の終局を見た。

元來山西省は排日抗日の思想深く浸み込み、北支治安の癌と目せられてゐたが今や之が肅清成りて日本軍の北支掌握更に其の強きを加へた。

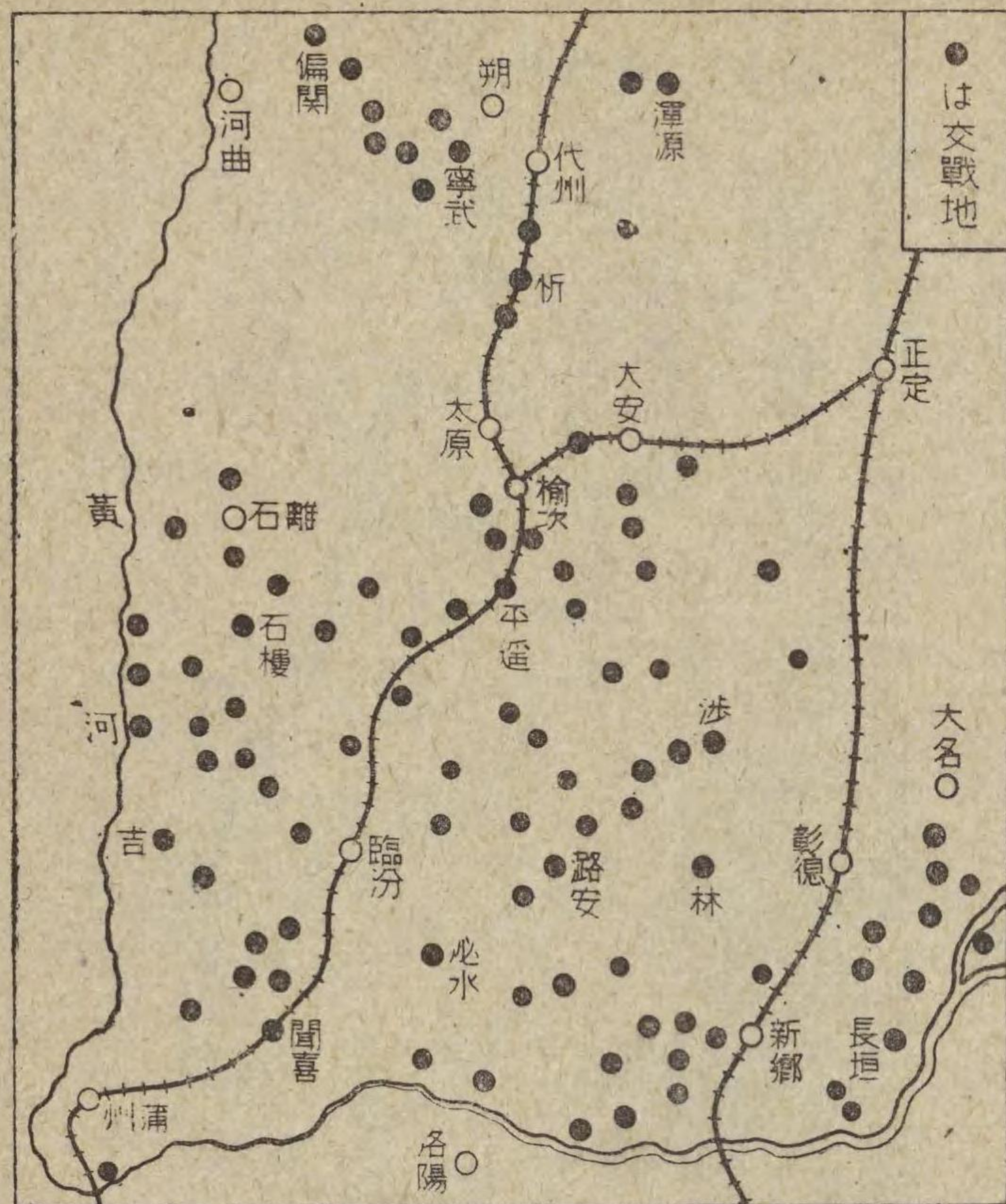
此の作戦に當り、各方面より出動せる日本軍は其の正面約百里に互り極めて放膽なる攻撃を強行し深さ約百里に及ぶ大地域を一舉に席卷して南方及び西方に於て黄河の線に達した。此の占領地域は我が北海道の約二倍の廣さに及び而して四十數師約三十餘萬に上る敵に對し徹底的打撃を與へ、死傷十數萬、投降二萬以上を出さしめ、鹵獲品は亦頗る多く、我が損害は戦死者約五百であつた。

日本軍の作戦は恰も三角形の一邊に沿ひ網を張り其の兩端より漸次窄めて他の頂點に向つたやうなもので、敵を太原、邯鄲、彰德方面から追ひのけて黄河の西南屈曲部の袋の中に押し籠めたのである。此の間には大行山

脈、連枝山脈の嶮が横はりて交通連絡頗る困難なるに拘はらず、理想的に相互の連絡が出来て兵學の所謂分進合擊の利を收め得たのは、固より各部隊の勇敢なる突進の效にも因るが、之は統帥の宜しきを得たる結果に外なら

日本軍の作戦は恰も三角形の一邊に沿ひ網を張り其の兩端より漸次窄めて他の頂點に向つたやうなもので、敵を太原、邯鄲、彰德方面から追ひのけて黄河の西南屈曲部の袋の中に押し籠めたのである。此の間には大行山

脈、連枝山脈の嶮が横はりて交通連絡頗る困難なるに拘はらず、理想的に相互の連絡が出来て兵學の所謂分進合擊の利を收め得たのは、固より各部隊の勇敢なる突進の效にも因るが、之は統帥の宜しきを得たる結果に外ならずして戦史に一異彩を放つたものと謂ふべきである。



殘敵掃蕩交戰地點
(昭和十三年三月)

茲に作戰上研究すべきことは、其の豫定する攻略地域を片つ端からローラー式に敵の一人をも残さず漸進的に掃蕩して行く方法と、も一つは大マカに、荒削りの、しかも疾風の敵を突破して其の後方にまで殺到し然る後徐ろに後に残つた敵を料理する方法との二つがある。強敵に對しては前者を、弱敵に對しては後者の戦法を取るのが常則であつて、名將は敵を見て善く其の取捨を誤たぬ。黄河作戰に於ける日本軍の戦法は其の後者に屬するもので、蓋し妙を得たものである。それが爲め疾風の敵の大體を瓦解せしめたが、後方の殘敵を掃蕩せねばならなかつた。

此の殘敵の掃蕩史を一々敘するを止め、單に其の交戦地點を概示して其の討伐の如何に煩累にして困難であつたかを知るの參考に供する。